
TWO - B I T

好風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TWO - BIT

【Nコード】

N0363M

【作者名】

好風

【あらすじ】

七屋敷祐介は元恋人で高校教師である冬華經由の依頼で、かつて『魔』を封じた藤姫の末裔であり、封印の解かれた『魔』を狩りに訪れた女子高生藤乃の護衛をするのだったが、戦いは劣勢に。そこに助けに現れたのは、冬華の生徒であり魔女の浮帆だった。彼女の助けもあり、『魔』を退けた一行ではあったが、祐介は自らの体を『魔』に奪われてしまう。そして、その魂は――

0：前夜（前書き）

10年ほど前にサーファーズパラダイスで行われた小説のコンテストに応募し、あそこの図書館にて長らく掲載されていた代物です（現在図書館が閉鎖（改装中？）しているつばいので、勝手に転載を（爆

TINAMI(<http://www.tinami.com/creator/profile/13578>)でも公開を始めましたので、使い勝手の好みに合わせてお使い下さいな。

0：前夜

真円を描くには幾分かまだ欠けている月の夜。深淵を思わせる青の世界に包まれた公園を駆け抜ける影が一つ――

「ここまで力の差があるなんて」

歪めた口から零す一言は、苦々しい。

「さすがにまずいですね」

大きくかぶり、振るった刃が妖しく煌めく。月光の下、緋袴姿の少女が一人、虚空に向かって太刀を振るっていた。

――ッ！

硬質な音が人気のない公園に響く。

何かと戦っている少女。

でも、

相手が見えない。

まるで、独り剣舞を舞っているような優雅さがあった。

ただ、その端整な顔つきは真剣そのものだ。

幾たびと刀を振るっている内に、少しずつだがその太刀筋が遅れ始める。

「クッ――」

思っている以上に重すぎる真剣に、少女の顔に疲労の色が浮き出ていた。

暦の上では夏も終わろうかとする九月半ば――

夜とは言ってもまだ暑く、吹き出た汗は少女の舞いに併せて飛び散る。

キーン――

遂に握力に限界が来たのか、弾かれた反動で両手から抜け飛ぶ。数メートル先の花壇の中に突き刺さる刀。

慌ててそれを取りに向かおうとした、その足が止まる。

「言っておくけど、単純な力比べではあんたの方が上だよ。ただ、

力の使い方に差があるだけ」

背後からの冷たい囁きに、一変、汗が冷や汗に転じる。

月光に輝くは、細い喉元に突き付けられた鋭い爪。

少女の背後には、髪の高い女がいた。白い着物姿。何処か少女とよく似た容貌。唯一、人と違うは頭に突き立つピンツとした獣の耳。

——『魔』だ。

「殺すのですか？」

訊ねる少女に、『魔』は面白そうに答えた。

「殺しはしないよ」

「何故です？」

「藤姫——あんたの先祖に封印されてかなりの年月を過ぎたからね」
鋭い爪を突き付けたまま身体を少女の前へと返す。ピクピクと耳が動く。

「言っただろ。力だけを見れば、あんたの方が上だと。この朽ち始めている藤姫の身体、残されている力はもう僅か」

ニヤツとつり上げてみせる唇が血の如く紅い。

「だから、この身体の代わりにあんたの身体を貰い受けるだけだよ」
クイツと顎を持ち上げると、そこに口を併せようとしてくる『魔』。

それから逃れようとする少女だが、『魔』の紅い瞳に魅入られて、身体が満足に動こうとしない。

今まさに、二人の美女の唇が触れようとしたその時——

「キヤアアアアア！」

悲鳴を上げて少女の元から飛び退く『魔』。そのまま闇の中へと姿を消した。

完全に『魔』の気配が消えた後、少女は力が抜けたように経たり込む。

ペタンと地面に腰を降ろしている少女の元に、
「手を貸しましょうか？」

黒のブラウスに黒のロングスカートをまとった二十代半ばの女性

が歩み寄ってきた。

シャープな輪郭に切れ長の瞳。シャギーの入った黒髪が夜風になびく姿は、ある種の鋭さを感じさせる。

女性の手に持たれた何かのお札のようなモノが見える。

そして、自分のすぐ脇に半分焦げたお札が転がっているのに気付いた。

たぶん彼女が『魔』から自分を助けてくれたのだろう。

「貴女様は……？」

訊ねる少女に、女性はブラウスの胸ポケットからメガネを取りだし、

「私は教師よ」

「……教師？」

「そう、教師よ。ただの高校教師」

微笑みと共に掛けるメガネのレンズは場違いなまでに大きく、鋭かった彼女の顔を愛らしく歪めてみせた。

「ただ、少しだけ押し迫った婚期に、ちょびつとだけ焦りを感じているんだけどネ」

0：前夜（後書き）

この話は前書きにもある様に10年前には書き上がっている話なんです。が、如何せん十年一昔的に古い部分もあるますので、改筆修正しながら上げていこうかと——思ってたんですけど、別段読み直した分には問題なさそうなので、適度なタイミングで上げていこうかと。

1 - 1 : 浮帆

カーテン越しの淡い陽光に、パステル調に統一された部屋は照らし出されていた。

そんな薄明かりの中、ベッドの上では水色のダブダブの丈の長いTシャツをパジャマ代わりに着込んだ少女が安眠を貪っていた。

ベッドの下には、目覚まし時計が転がっている。

「浮帆ちゃん、いい加減に起きなさい」

暖かい呼び声に、浮帆の意識は少しだけ覚醒へと向かう。

でも、まだこの心地よい世界から抜け出したいくない気持ちが強い。

「あと五分……」

無意識に自分の希望が口からこぼれた。そこへ、

ガチャ――

扉を開けて入ってきたのは、髪をアップにまとめたエプロン姿の女性だった。

見た感じ二十代で通りそうな若々しい容貌だが、四十を越えている浮帆の母親の瑞穂だ。

まなじりの下がった糸目に微笑みを称えた口元は、一見して温厚な女性のものだが……

「浮帆ちゃん、朝よ」

耳元での囁きに応えず、浮帆は大きめの枕をギュッと抱きしめる。ピクツ。

瑞穂の眉尻が微かに跳ね上がる。

伸ばした手で浮帆の頬を摘むと、

「イタタタタタタタタタ――」

両脇に引っ張る。

「痛いってば！」

目尻に涙を浮かべて瑞穂の手から逃れる浮帆。すっかりと頭は覚醒していた。

赤くなつた頬をさすりながら恨めしそうに母親を睨む。

「いきなり頬を摘まないでよ！」

「素直に起きない浮帆ちゃんが悪いの。今度素直に起きなかったら、夢魔の一つも放つてあげるわよ」

ムスツと頬を膨らませる浮帆だが、意にも介さない瑞穂。そのま
まカーテンを開けると浮帆の部屋を出ていった。

「ちよつと、ママ。着替える前にカーテン開けないでっいつも言
つてるでしょ！」

「早く着替えて下に降りてらっしゃい。急がないと今日も遅刻よ」
瑞穂の言葉に、壁に掛けてある時計を見れば、八時二十分を過ぎ
ていた。

顔色が青くなる。

遅刻のタイムリミットギリギリだ。

慌てて着替えようと、母親が開けたばかりのカーテンを再び閉ざ
す。

手早く制服に着替えた浮帆は、机の上に置かれたデイパックを手
に取り、下へと降りる。そのまま持っていたカバンを玄関の片隅に
置くと、洗面台へと飛び込む。

歯を磨き、顔を洗うと、膝裏まで届く長い髪の毛にブラシを通す。
寝相の割には寝ぐせは付いていないので、軽く整えるだけで十分だ
った。

朝の支度を終わると、ダイニングに向かう。

テーブルには既に食事を終えた和服姿の優しそうな老婆が湯飲み
でお茶を飲んでいた。先程呼びに来た瑞穂はキッチンで食器を片付
けている。祖母と母——それが浮帆の家族の全てだった。

「おばあちゃん、おはよ」

「おはようございます、浮帆さん」

浮帆の祖母である船穂があいさつを返す頃には、既に浮帆は自分
の席に置かれたコップ一杯の牛乳を飲み、その隣にある朝食には手
を伸ばさず、ランチボックスを取る。

「浮帆ちゃん、朝御飯は？」

「時間が無いから要らない」

瑞穂が呼び止めも聞かず、部屋を飛び出していった。

スニーカーを履き、ランチボックスをデイパックに入れると背中に背負い、下駄箱の脇に立て掛けてある愛用のスケートボードを手に取る。

「いつてきまーす！」

「車に気を付けるのよ」

そんな母親の言葉を遠くに聞き、襟元で縛った髪をなびかせながら、浮帆は家の前の坂道を学校へと向けてスケートボードを滑走させた。

巧みな技術で通行人の間を高速ですり抜けていく浮帆。早朝の篠華町では見慣れた風景なので、誰も驚かない。

疾風と化したその速度は、街道の中心を走る路面電車に追いつこうかとしていた――が、しかし、

それとて、下り坂を進んでいる間だけである。一番下までたどり着き、上り坂に差し掛かった今、その速度は落ちる一方だ。

「あつ、浮帆！」

少女――浮帆に気付いた、路面電車に乗っている女子高生のグループが、身を乗り出して口々に声をかけてくる。

「また寝坊したの？」

「浮帆さあーん。スケートボードでの通学は校則違反ですよ」

「委員長だからって堅いこと言わない。それより浮帆、早くしないと遅刻するぞあー！」

親友達からの暖かい声援を遠くに聞きながら、惰性を失ったスケートボードは今にも止まろうとし、

「う、る、さあ――いつ――！」

叫び返す浮帆の注意が路面電車に反れた瞬間、ドシーン！

突如目の前に現れた影に思いつ切りぶつかり、完全に停止した。

「いつう——」

思いつ切り尾てい骨を打ち付け、目尻に涙が浮かぶ。

「もう、何なのよ!？」

突然の災難に苦言が洩れるが、

「それはこっちの台詞だ」

無然と言い放つのは、同じように尻餅を付いているＴシャツにジーンズ姿の火の付いていない煙草を加えた青年だった。

転がっているスケートボードに手を伸ばし取ると、浮帆に差し出す。

「ほらよ。こう言うのはもう少し人のいないところで乗ってくれよな」

「あつ、ご免なさい」

素直に謝る浮帆。

「まあ、幸いお互いに怪我もないようだし……スカートなんかで乗るもんじゃないな」

男の視線の先に気付き、目を向けるとスカートの裾が捲れていた。

「キャツ！ エッチ!!」

反射的に男性の頬を叩いてしまう浮帆。自分のしでかしたことに気付き、

「ご、ごめんなさい!!」

今一度大きく謝ると素早く立ち上がり、スケートボード片手に路地裏に逃げるように消えていった。

残された男性は、展開の急さに付いていけず、呆然と叩かれた頬を撫でていた。

「ふうー、やっぱいわね」

路地裏に隠れると、大きく息を吐く浮帆。

自分の不注意でぶつかっておいて、しかも不可抗力でスカートの中身を見られたことに対して叩いてしまったのである。

明らかに自分に非があるのは明確なのに……

少しだけ、自己嫌悪を感じる浮帆だが、そうもしてられない。

今のでかなり時間をロスしていたのだ。

手首の時計を見ると、八時半。

後は上り坂が続くためスケートボードで滑ることもできないし、

普通に走ったところで間に合わないのは必然。

そう、普通には――

キョロキョロと辺りに人が居ないのを確かめると、抱えていたスケートボードを地面に置き、右足で滑り落ちないようにと押さえる。

「頼むよ、相棒」

精神集中するように瞳を閉ざす。視覚を消し去ったことで敏感になった触覚が、わずかな風の流れを捉える。

微風にも満たない空気の揺れ。

それが次第にざわめきだす。

なびく髪。そして、セーラー服の襟とスカートの裾が舞い上がる。周りに風が集まるのを肌に感じ――

そして、

「行け」

短い眩きと共に、浮帆を乗せたスケートボードは風をまとって坂道を駆け登っていく。

エンジンでも載せているかのような加速。もしボードを観察する者がいれば、車輪が地面に付いていないことに気付いただろう。

古き魔女の血を引く瀬野浮帆。高度5センチも保てれない飛翔魔法が、彼女の知るちよびつとだけ使える魔法の一つだった。

1 - 2 : 祐介

早朝のアーケード街に建ち並ぶ店のほとんどがシャッターが降ろしたままでいる中、『準備中』の札をかけた喫茶店の扉を開ける青年がいた。年の頃は二十代半ばから後半、体付きは痩せ気味。ボサボサの髪にまばらに生えている無精髭。半分閉ざされた瞼の下から覗く目つきは、あまり良いモノとは言えない。

火の付いていないよれよれの煙草を口に咥えたまま、

「ちわつす」

カウベルの音と重なるように挨拶をし、店内へと踏み込む。

全体的にシックな古い作りの店内は、まだ準備中だけあって客の姿はなく、マスターである筋骨隆々の大男がカウンターの中でコップを磨いていた。髭面巨漢のその姿は山男然りだが、エプロンに身に太い指で器用に食器を洗っているその様は、小さな三輪車に乗るクマのような滑稽さがあった。

「おう、祐介か。遅かったな——って、どうしたんだ、その頬は？」

頬に見える紅葉に、マスターが眉を顰める。

「ちよつと、女子高生にぶつかられて、その礼にビンタを貰ったんですよ」

「礼って——お前、マゾか？」

「まさか」

一蹴する。

「不可抗力の人身事故ですよ」

説明する気にもなれないのか軽く流し、カウンターに腰掛ける青年——七屋敷祐介の前に、今拭き終えたばかりのコップに氷と水を入れて置かれた。

「まだ煙草は吸っていないのか？」

「後三日で賭けも終わりっすからね」

指三本立ててはひねた笑みを浮かべる。

祐介がくわえる煙草は、禁煙を紛らわすものであった。

「それで、何のようなんです、親っさん？　こんな朝っぱらに呼び出して」

少しばかり祐介の言葉に刺がある。アパートで寝ていたところを叩き起こされたのだから無理もない。煙草を灰皿に置き、差し出された水を一口含む。その際、チラリと横目で見た年代物の振り子時計は八時半少し前を刻んでいた。

「いくら、無職で時間があるからって、就職活動があるんだから、そう簡単に呼び出さないで下さいよ」

「仕事の方は見つかりそうなのか？」

皿を洗いながら訊くマスター。祐介は、手持ちぶさたげにカウンターに転がっていたリモコンを手の中で回しながら応えた。

「今日も昼前に面接が一本入ってます」

夏前に務めていた会社が不況の煽りをくって倒産。それ以来、再就職先を求めて夏中奔走しているが、秋になろうとしている今も見つからない。

「ほう」

髭を撫でるマスター。

「それで、明日からの予定はどうなんだ？」

「ありませんよ。一つの会社受けるのに、その結果が分かる前に他也受けたら礼儀に反するじゃないですか」

変なところで真面目な祐介。その要領の悪さが、再就職先が見つからない要因になっていることに気付いてはいなかった。

「そうか。明日からの予定は何もないんだな。それならしばらくは暇だろ。丁度良い」

「まるで、俺が落ちるみたいな言い方ですね」

無然と言い放つ。

「冬華が言っていたからな」

「冬華が……」

マスターの口から出た女性の名に項垂れる。そんな祐介の落ち込

みに併せたかのように、店内がグラリと揺れた。

「おっと。また地震か」

棚に並んでいるコップが触れ合い、音を発てる。震度にして3と言ったところか。ここ数日藤華町を微震が襲う。

「きゃっ！」

可愛い声を上げ、裏口から顎めっ面で現れたのは紺色の襟をしたセーラー服姿の少女だった。

「もう、最低。階段踏み外してお尻ぶっちゃったじゃ——」

カウンターにいる祐介に気付き、その円らな瞳を真ん丸にする。

「よう、おはよう。小枝ちゃん」

「あつ、祐介お兄ちゃん、おはようございます」

飛び付いてくる小枝の小さな膨らみが腕に触れ、無精髭生える頬が微かに赤くなる。そんな祐介に、

「おい、祐介。小枝はお前にはやらんぞ」

笑顔で言い放つマスター。笑っている顔の中で、双眸の瞳だけが真剣なのに気付く祐介だった。

少女の名は風見小枝。地元の中学に通うマスターの一人娘だ。

「ええー。あたし、お兄ちゃんのお嫁さんになるが夢なのに、こんな分からず屋のお父さんなんて捨てて、駆け落ちしましょ」

隣のスツールに腰掛け、腕を絡めてくる。

「うーん、いいね。でも、今俺って無職だからお金無くてさ。大した所に行けないぜ」

「むう」

軽くあしらわれてることに小枝が頬を膨らます。

「お兄ちゃんって、冬華お姉ちゃんと結婚する気ないんですよ。だったら、あたしと婚約しよ」

「ピシ——」

弾ける音はマスターのコップを磨いている手の中から聞こえた。

冷や汗を頬に伝わせながら、言葉選ぶように妹として接している少女を諭す。

「小枝ちゃんがもつと大きくなって美人になって、そんな時に俺が独身で小枝ちゃんが愛想を尽かしていなかったら頼むよ」

「ホントに本当に約束だよ」

それで納得した小枝。

「ねえ、お父さん。雑誌は？」

ひび割れたコップを困ったようにゴミ箱に捨てながら、カウンターの置くから幾つかの雑誌を取り出した。普通の喫茶店ならマンガ雑誌が主なのだが、近くに女子校がある立地条件からか女子高生の客が多く、女子中高生向けの情報系雑誌が目立つ。

内一冊を手に取り開ける小枝。

「ん？」

横から覗き込めば、小枝が熱心に読んでいるのは占いの頁だった。

「ここの星占い、よく当たるって有名なんですよ」

おやつと祐介は眉を動かす。

「占いなら、冬華にみてもらえばいいだろ？」

「だって、お姉ちゃんの占いって、夢がないもん」

「違うない」

思いだして苦笑する。

「あつ、お兄ちゃんの星座って確か双子座だったよね。週末の運勢は……厄介ごと多し、注意されたしだって。特に異性運が最悪だよ」

「女難の相か……確かに良く当たるみたいだ」

女子高生に叩かれた頬を撫でる。

「小枝。学校行かなくていいのか？」

壁の時計を見れば、もう八時四十分を過ぎている。地元の歩いてすぐの場所にある中学とは言え、走らないと間に合わない。

「あつ！ 遅刻しちゃう！！ お父さん、お兄ちゃん、行ってきまーす！」

「いつてらつしゃい、小枝ちゃん」

景気良くカウベルを鳴らし、小枝は夢見鶏を飛び出した。ベルの音の余韻響く店内に取り残された男が二人。ジロリとした

一瞥を向けてくるマスター。

「小枝はやらんからな」

強く念を押す。

小枝が幼い頃に妻を亡くした父娘二人暮らしてこともあってか、マスターの小枝に対する溺愛ぶりは外見からは想像が付きにくい。

「わかってますって。それより冬華のヤツ——」

小枝が来て中断していた話を戻す。

「あいつ、何て言っていたんです？」

「ああ、そいつは確か、『祐介の就職はまだしばらく見つからないから、叔父さんのところで面倒見てあげて』ってな」

「親っさんの野太い声で、冬華の声真似しても不気味なだけですよ」

「そうか」

コッホンと一つ咳払いをする。

「冬華の『予言』なんですよね、それって」

「まあな」

祐介を見るマスターの目に、同情にも似た哀れみが浮かんでいた。
「ったく、『賭け』が有効な間は、干渉しないって約束なのに」

忌々しげに洩らす。無意識に手は灰皿の煙草を取り、口へと運ぶ。
どこか機嫌が悪い。

「あいつだって『賭け』があるから、お前に直接言わなかったんだ
ろ」

「それで、今日の面接に行っても無駄って事ですよね」

はあーっと深くため息を吐く祐介。

「そう言うことだ。冬華の話じゃもうそろそろお前さんの蓄えも底
をつく頃だろうとも言っていたな」

「うっ」

すっかりと自分の財布の中身まで知り尽くしている元恋人の顔を
思い浮かべ、がっくりと肩を落とす。

「本当言つと、ウチに就職してもらえるとありがたいんだが……ま
あ、しばらくはウチでバイトでもして生活費を貯めろや。就職活動

はそれからでも遅くないだろ」

「『よろず屋』に就職するくらいなら、マグロの遠漁漁業にでもかけますよ」

祐介の言う『よろず屋』とは、マスターが喫茶『夢見鶏』と兼業しながら開いている何でも屋のことであった。事務所は夢見鶏の二階にある。

祐介自身、大学生時代に冬華の紹介でアルバイトをしていた。

「それで、仕事は何があるんです？ 家庭教師ですか？ 猫探ですか？ それとも配管工？ まさかスズメ蜂の巣の駆除とか言うんじゃないですよ。あれは嫌ですよ。前にやった時、刺されてマジで死にかけたんですから」

「あれはスズメ蜂じゃなくて蜜蜂だっただろうが」

苦笑混じりに言う。

よろず屋と名乗るだけあって、依頼内容は多種多様。引越しの手伝いから探偵まがいな依頼、早朝のゴミ捨ての代行に恋人の身代わりまで色々ある。

学生時代の祐介のよろず屋でのスタンスは、何でも屋であった。

天才とまでは言い切れないが、飲み込みの速さとコツの掴み方の速さは尋常じゃなく、専門の資格を必要とする依頼以外の全てを一回の説明を聞いただけでこなすため、よろず屋所属の正社員、アルバイトの中で祐介は専門の担当を持たず、仕事の依頼があった時にそれを担当できる者がいない場合において、他の人間がそのスキルを得るまでの間の繋ぎとしてそれを担当していた。

何でもこなす祐介。そんな彼の唯一の欠点と言えば、先天的に運が悪かった。鉄壁の防護でスズメ蜂の巣の駆除に乗り出せば、蜂の巣を駆除した後に転んだ拍子に防護服を破り、近くにいた蜜蜂に刺されるし、カースタントのバイトをこなせば、全ての撮影を終えた後、何故かスタントに使用した車が爆破。屋根に取り付いていた祐介はそのまま火に飲み込まれた。

数えればきりが無い程の災難に遭った祐介。不思議と大事に至る

事故は起きなかったのは不幸中の幸いであつた。

「ウチが嫌なら、姉貴んトコで働けばいいだろうに。姉貴、お前ならいつでも歓迎するって言っていたぜ」

「嫌ですよ。春香さん、冬華以上に娘を貰ってくれつつうるさいんですから。二人と一緒の職場じゃ、一日中耳元で喚かれて洗脳されますよ」

思い出しただけでげんなりする。

元恋人の冬華の母でありマスターの姉の春香は、娘の働く地元女子高の理事長をやっていた。

「それで、俺に何をやらせたいんです？」

斜に訊く。視線の先は、開かれたまま小枝に置いていかれた雑誌の占いコーナー。

とてつもなく嫌な予感がする。そして、どう足掻いても回避できないのは経験済みだ。嫌と言うほどに……

「お前にやつてもらいたい仕事はコレだ」

カウンターの奥から数枚の写真を取り出し、祐介の前に置く。

手に取りパラパラと写真に目を通す祐介。複数枚の写真だが、被写体は一人の女子高校生だった。色白で黒髪長い姿はかなりの美少女だ。

アイドルとして売り出せそうだが、芸能界で生きるには清純すぎるかも知れない。

「女子高生？」

写真を見る限りではどんな仕事なのか分からない。

「何です、この娘は？ 人捜しですか？」

「姫だ」

「あんっ！？」

その単語に目が点になる。

「九石藤乃——彼女の身边警護が祐介に頼みたい仕事だ」

1 - 3 : 転校生

キーン、コーン、カーン、コーン――

校舎に鳴り響く予鈴に、職員室にいた教師達が揃って自分の担当教室に向かう中、

「それでは藤乃さん。教室の方に案内するわね」

黒の長袖のニットに同じく黒のジーンズで身を包んだ場違いなまでに大きめのメガネを掛けた女性が立ち上げる。

「はい、久保様」

応えたのは、私立藤華女子高校の制服であるセーラー服とは異なった、半袖のブラウスに白のベスト、チェックのスカートに紺のハイソックスといった他校の制服姿の女子高生だった。色白の肌に綺麗に整えられた長い黒髪、垂れ気味の目は見る者におっとりとした印象を感じさせる。

「冬華で良いわよ、藤乃さん。どうせみんな下の名前で呼んでいるから。それに、様は止めてね。先生で頼むわ」

「あつ、はい、冬華先生」

冬華の後をついて廊下へと出る藤乃。予鈴のチャイムが鳴ったからと言って、一時間目の始まりにはまだ少し時間があるので、校舎の中はそこそこ慌ただしく騒がしい。

北館の三階にある冬華が担任をしている2 - Aの教室に真っ直ぐ向かうかと思いきや、来客用の玄関へと向かい、藤乃に彼女が履いてきた靴を持つように言う。

それから二人は、教室移動している生徒達の一団とすれ違いながら、生徒用の出入り口に向かった。

「藤乃さんはこの下駄箱を使つてね」

冬華は2 - Aの札が付けられている下駄箱の開いている部分の一つに、藤乃の名簿のナンバーのシールを張り付けた。

藤乃が靴を入れながら自分の下駄箱位置を覚えようとしてる間、

冬華はざつと下駄箱を見て、いない生徒を確認する。

「浮帆さんしたら、また遅刻かしら」

一つだけ靴の替わりに上履きが残された下駄箱を見つけた冬華。少し困った顔をする。

「冬華先生？」

怪訝そうな声をかけてくる藤乃に、冬華は何でもないようにニコツと微笑む。

「じゃあ、藤乃さん。教室に行きましょうか」

藤乃を伴って階段を上り、教室へと向かう。

階段を上つてすぐの所に2・Aの教室があるため、藤乃にそこで待っているように言っていると、彼女は扉に手をかけた。

扉が開く瞬間静まり返った教室が、入ってきたのが担任の冬華だと知るとざわめき出す。

「冬華先生、一時間目は英語ですよ」

現国を担当している冬華の授業は四時間目のはずである。

「連絡事項があつて山根先生と時間割を替わってもらったの」

その話しに、生徒達が一斉に一番後ろの窓際を見る。そこには二つの空き席が並んでいた。

「先生、転校生なんですか？」

「ちよつと、その話は後ね。全員揃ってから話すわ」

生徒達を制すと、冬華は壇上から降りて教室の後ろへと向かう。

何事かと生徒達が見守る中、冬華は何もせずにその場にしばし佇んでいた。

教室、廊下のスピーカーからチャイムの音が響くのは、すぐのことだった。

キーン、コーン――

――カーン、コーン。

眼前の丘の上にある校舎から聞こえるチャイムを耳にしながら、砂煙を発てながらスケートボードで疾走する浮帆。丘の上に見える

正門には、生徒指導の教師が遅刻の生徒を見張っていた。

「やばい……」

丁度、他の生徒を取り締まっているのをいいことに、見つからないように高校の横の細道に曲がり込む。

一段と速度を上げるとボードを斜めに傾けて、その勢いを利用して壁を駆け上っていく。

高度五センチの飛翔魔法だが速度には際限が無く、浮帆の運動神経と併せれば、瞬間的にだがコレくらいの芸当はできる——のだが、

「いたい……」

跳び越えた際の着地のショックで、先程打ち付けた尾てい骨に痛みが走る。

思わず足を止めるが、

「——っと、そうもしてられないわね」

涙目のまま、慌ててスケートボード片手に校舎に向かう。

キーン、コーン、カーン、コーン——

既に一時間目開始のチャイムが聞こえるが、今日の一時間目は遅れてやってくることで有名な山根先生の英語である。

校門の生徒指導の先生の魔の手から逃れた今、山根先生よりも早く教室に入れば遅刻にはならない。

掃除道具入れの後ろの隙間に隠すようにスケートボードを置くと、靴を脱ぎ上履きに替えて、音のない廊下を進む。

体のバネを目一杯活かして数段抜かして階段を駆け上る、その足音がほとんど響かないのは彼女の運動神経の良さか、魔女たる由縁か——

階段を上り終えてすぐの二年一組の教室の後ろの扉に向かう途中、廊下に立っていた髪の長い女性にぶつかりそうになるが、

「あつ、ごめんね！」

短く謝って、そのまま扉に飛び付く。

ガラッ——

少しだけ開けて教室を覗き込む。本人はひっそりとやったつもり

だが、扉を開けた音で一斉にクラスメートの注目を集めた。
それらを気にも止めずに教壇を見れば、先生の姿はない。

「ラッキィ！ 先生、まだ来てないよネ？」

問いかけに応えが返ってくる前に、既に自分の中で先生は来ていないものと帰結させ、教室に入り遅刻しなかったとホッと一息付いた、その瞬間、

「アンラッキィよ、浮帆さん」

バツコーン。

覗き込んでいた頭を軽く叩かれた。恨めしそうに首を回せば、冬華が出席簿を持って立っている。

「ええ！ ええ？ ええ！？ どうして冬華先生がいるの？」

「緊急の連絡事項があつて、山根先生に授業時間を変わってもらったのよ」

他の生徒にしたのと同じ説明を話してやる冬華。

「それより、遅刻は駄目です」

出席簿の浮帆の覧に遅刻と記入する。

「……はい」つと返事をして、一番後ろの窓際にある自分の席に向かう。そのしよぼくれた背に、

「それと、浮帆さん。スケートボードでの登校は駄目よ。転んだりしたら危険なんだから」

「見てたんですか？」

振り返る浮帆に、冬華はクスツと小さく微笑んだ。

「見てた——ってコトは、やはり転んだようね」

冬華が指さすその先は、白く跡の付いたスカートがあつた。

「……あつ」

砂埃をはたく浮帆に「気を付けなさいね」と言い残し、冬華は教壇へと向かう。

先生が離れていくのを待って、

「朝から災難ね、浮帆」

身近な席にいたバンダナを被った娘が小声で声をかけてきた。

朝の路面電車で浮帆を見ていた悪友の一人、竹井杏奈だ。

そして、その隣の席の同じ顔の女生徒が続ける。

「運が悪かったな。あんな所で転けるなんて」

彼女もまた路面電車の一人で、竹井甘奈。杏奈とは双子だ。二人の違いと言えば、頭にバンダナをかぶっているかいないかだけだ。

「ぶつかって転ぶし、スカートの中見られたし、最低最悪不可よ」

げんなり気味に応え、教室の後ろを歩く浮帆だったが、自分の席の手前でその足を止めた。

「？」

生徒数が奇数のため、隣がない浮帆の席の隣に何故か誰もいない座席が用意されていた。

「転校生が来るみたいよ」

浮帆の前の席に座っているセミロングの髪をした西野仁美が説明してくれた。彼女も朝の路面電車にいた一人で、浮帆を含めた四人でグループを形成している。

「転校生？」

時間割を変更してまで担任の冬華がいるコトの意味が分かった。

「それでは、全員揃いましたので転校生を紹介しますね」

浮帆が座るのを待って、冬華が廊下に向かって呼びかけた。

「藤乃さん、入って」

「はい」

涼しげな声音が響く。

ガラスと扉を開けて入ってくる一人の女子高生。長い黒髪を風になびかせながら歩いてくるその姿は清楚さが感じられた。

黒板にチョークで名前を記す。

『九石藤乃』

優雅に身体を返して、

「九石藤乃です。不束者で、至らぬ点も数多くありますが、未永く宜しく御願致します」

たおやかな涼風が流れる。

教壇に三つ指付いて深々と頭を下げたその仕草の大和撫子然りのそのあまりの丁寧さに、思わずつられて頭を下げるクラスメート一同だった。

「それでは、藤乃さん。一番後ろの席に座って貰いますね」

指さす先は浮帆の隣の空き席だった。

持っていた鞆を席に置いて腰掛ける藤乃。まだ教科書が揃っていないため、開けた学生鞆から取り出すのはノート代わりのバインダーと布製の筆入れだった。

「教科書まだ無いんだよね」

そう言って、浮帆は自分の机を動かして藤乃の机とくっつけ、彼女に教科書が見えるように間に置いた。

「ありがとうございます。ええーっと……」

「ボクは瀬野浮帆。好きなように呼んでくれればいいよ。こっちは藤乃って呼ばせて貰うから」

「浮帆さんですね。改めて、九石藤乃です。右も左も分からぬ不束者ですが、何とぞ宜しく御願ひ致します」

「……藤乃、それってば、嫁入りの挨拶だよ」

微笑笑を浮かべる浮帆だった。

1 - 4 : 何でも屋

「姫の身边警護って何なんです!？」

夢見鶏の店内に祐介の素っ頓狂な声が響く。

「だから、言葉のままだ。言葉の」

「言葉のまま——って!？ 百歩譲って身边警護はいいです」

ストーカー相手のボディーガードの仕事もいくつかこなしたことのある。それに、『よろず屋』所属のメンバーの中には、格闘技を取得している荒事専門の連中もいた。

「姫って何なんです!？ 姫って! どう見ても、普通の日本人ですよ?」

これが外人なら、日本に留学に来た王族の護衛というのも考えられるが——日本人ではその可能性が導き出せない。江戸時代じゃあるまいし、今の時代、姫などと言う存在は聞いたことがない。

ポリポリポリと顎髭の中に指を突っ込み掻くマスター。

「藤姫の伝説は知っているよな?」

「一応、観光用パンフレットに載ってるぐらいには」

藤姫伝説——藤華町の北部に位置する要山に伝わる民間伝承で、かつて近隣の集落を襲っていた魔物を、天より舞い降りてきた藤姫なる女性が退治した伝説であった。

「その伝説がどうかしたんですか?」

唐突な話の転換に、意味を求める。

「三日前に地震があっただろ?」

震度にして4のそれは、コンクリートの壁にヒビを入れた程度で大した事故もなかったはずだ。

「地震で要山の奥にあると言う姫塚——藤姫の墓が崩れたんだと。それで、藤姫が封じ込めていた『魔』が解き放たれたとかで、今現在の姫の位を持つ九石藤乃が退治に乗り出してきたんだ」

マスターの言っていることは祐介の思考の範疇を超えていた。

「——一つ聞きたいんですけど」

「何だ？」

「それってもしかして裏の仕事の話じゃないでしょうね？」

「ああ、その通りだ」

あつさりと頷くマスターに、祐介は微かな疲労を感じた。

祐介は担当したこと無いが、超常現象的な仕事の依頼は結構舞い込んできている。もっとも、そのほとんどは幽霊や心霊——宇宙人の仕業ではなく、幾重にも重なった偶然が織りなす現象なのだが、中にはそう言ったもので説明できないものもあり、よろず屋では裏の仕事と称され、それ専用に担当している者がいるらしい。

一人を除いて、祐介にはその担当している連中とは面識がなかった。

「俺に魔物退治をやれとか言っんですか？　そう言うのは冬華にでもやらせて下さいよ」

唯一、裏の担当者で面識のある元恋人の名を出す。

「超常現象なんて俺の専門外です」

「その冬華が名指ししてきたんだよ」

「へっ!？」

気まずそうにマスターが言った冬華の名に、間の抜けた声がこぼれた。

「もしかして、冬華がマスターに面倒見ろって言ったのは、俺にその仕事を受けさせたいため？」

「多分な。あいつが言う以上、お前が適任なんだろうさ」

「冬華が……」

苦々しげに洩らす。

滑稽なまでに大きなメガネをした美女。まるで全てを見透かしたかのように自分を見つめるその存在の元恋人が脳裏に浮かぶ。

「はあー」

大きく息を吐く祐介。

「やってくれるか？」

「しゃくだけど、冬華が関わっている以上はやるしかないじゃないですか」

投げやりげに承諾するのだった。

「その代わり、朝飯ぐらい驕って下さいよ」

時刻は既に九時をまわっている。話し込んでいる間に、すっかりと開店時間を過ぎていた。

「分かった、分かった。トーストでいいな」

「珈琲も付けて下さい」

準備を始めるマスター。

「悪いがこの新メニュー、壁に貼ってきてくれないか？」

カウンターの奥から取り出したメニューを祐介に差し出す。

見てみれば、『スーパージャンボパフェ始めました』と描かれているそれを、祐介は壁の貼っていく。そんな彼の背に、

「そう言えば、今日はこれからどうするんだ？」

「帰って寝ますよ」

振り向きもせずに答える。

「会社の面接は？」

「パス。落ちると分かっている面接に行くバカもいないでしょ。電車賃も勿体ないし」

全てのメニューを貼り終えて戻ってくる祐介。その顔に数束の書類が投げつけられた。

「のわあつと!？」

慌ててそれを受け止める。

「何ですか、いきなり!」

「今日は暇なんだろ。その仕事、全て終わらせてきてくれや」

それは依頼書だった。それも、一つや二つじゃない。職種は迷子の猫探しからインターネットへの接続のセッティングまで多種多様なものが十以上ある。

「最近人材不足で仕事が溜まっていたんだ。祐介がやってくれるとありがたい」

すっかりやるものだ決めてかかっているマスターに、祐介は恨めしそうに依頼書を眺める。

断ったところで、無理矢理働かされるのが目に見えていた。

1 - 5 : 日常1

昼前の誰もがお腹を空かす時間帯。

浮帆は机の上に頭を倒してばてていた。

「大丈夫ですか、浮帆さん？」

「お腹空いた〜」

心配そうに小声で訊ねる藤乃に、力無く小声で答える。

遅刻寸前に家を飛び出したモノだから、朝食を抜いている浮帆には、昼休み前の四時間目は苦痛でしかない。

朝から胃の中に入れた物と言えば、二時間目の休み時間に杏奈から分けて貰ったお菓子があったが、既にそれは胃酸によって綺麗さっぱり溶けて無くなっている。

ぐうー……

腹にあてた手に胃袋の振動が伝わってくる。

「お腹空いた〜」

「後もう少しで授業も終わりますから、頑張ってください」

藤乃の励ましに、最後の力を振り絞るかのように身体を起こす。

黒板の上の時計の秒針がやけに遅く感じられる。

「この五分が長いんだよね……」

悠久にも感じられる五分間。それでも、過ぎない時間は存在せず、

キーン、コーン、カーン、コーン――

授業の終了を示すチャイムが鳴り響いた。

終礼の挨拶を済ますと同時に、

「浮帆、お昼食へに行こ」

「あっ、藤乃さんも一緒にどうです？ 私達、お昼は屋上で食べてるんですけど」

ランチボックス片手に浮帆の席にやってきた杏奈と甘奈。そして仁美。

「私もいいんですの？」

「良いつて、良いつて。藤乃とあたし達はもう友だちなんだから」
五人は連れだつて屋上へと向かった。

「あつ、居た居た」

屋上に現れた二人の少女が、ランチタイムを楽しんでいる浮帆の姿を見つけて、駆け寄ってきた。

セーラー服のスカーフ色から二人が一年生の後輩なのが窺えらるる。

箸をくわえたままおよつとした顔を上げる浮帆。つられて一緒に昼食を取っている杏奈達も顔を向ける。

「瀬野先輩、助けて下さい」

「次の時間に英語の小テストがあつて、問題を――」

ランチボックスに箸を置いて、後輩達の方に向きなおした。

何やら会話を始める。

そんな浮帆の背を見ながら、

「何ですか、あの方々は？」

「浮帆のお客さんだよ」

「お客さん？」

杏奈の言葉の真意が分からず小首を傾げる藤乃。

「浮帆さんは、テスト範囲を予想するのが得意ですから、ああして訊きにきているの」

「テスト範囲……ですか？」

目を向ければ、浮帆は後輩を相手に何やら始めようとしていた。

セーラー服の中から引っぱり出してきたクリスタルのペンダントで後輩の持つ教科書の上でそれをぶら下げている。

小さめのランチボックスを膝の上で抱えたまま不思議そうに見守る藤乃。

「浮帆さんの占いつて、当たるんですか？」

「浮帆の占い？」

学校に来る途中にコンビニで買っていた菓子パンを食べながら甘奈が答える。

「だいたい半々じゃないかな」

「うん。大体それぐらい」

食べかけのまま放置してある浮帆の弁当から、タコさんウインナーをかすめ取るうとする杏奈。ただ、それに気付いた甘奈が彼女の手を叩いて止める。

渋々ながら手を引つ込めて、話を続ける。

「当たる時は100%当たって、外れる時も100%。大体それが交互にきているんじゃないかな」

「そうね。平均的に見れば、きっかり50%と言ったところね」

一人静かに食べていた仁美も頷く。

「それは……凄いのか凄くないのか計りかねますね」

何と言つていいのか分からず、微苦笑を浮かべる藤乃だった。

「先輩、ありがとうございます」

ペコリと頭を下げ、屋上から去っていく後輩達。

「ほい、杏奈」

仲間の輪に戻ると、既に昼食を終えて物欲しそうに自分の食べかけの弁当箱を見つめている杏奈にポッキーの箱を投げつけた。

それは、後輩から前回のテストのヤマが当たったことに対してのお礼だった。

「謝謝」

「あんたは中国人か」

甘奈が軽く小突くが、口一杯にポッキーを頬ばる杏奈は意にも介していなかった。

やれやれとため息つく甘奈。つられるように浮帆は苦笑をみせた。

「ねえ、ねえ、今日の帰りってみんな暇？」

「何よ、唐突に？」

「夢見鶏で新しいパフェが今日から出るんだって。それで、帰りに食へに行かない？ それに、藤乃の転校記念を祝ってさ」

「あのお、せっかくなんですけど、帰りに人と会う約束をしておりまして」

申し訳なさそうに言う藤乃。

「人と？ 今日じゃないとまずいの？」

「はい。今日の夕刻にお会いする約束をしてますので」

「それは、残念。藤乃の転校祝いは後日ってコトで、みんなは大丈夫よね？」

「別にいいけど」

「仁美は？」

「私もいいですよ」

「あつ、ボクは駄目。帰りにおばあちゃんに買い物の用事を頼まれているの」

「おばあちゃんの買い物って——漢方薬買いに行くの？」

「またイモリの黒こげ？」

「それを言うなら、黒焼きだろ、黒焼き」

「そんなとこ」

魔女である浮帆の祖母は、懇意にしている漢方薬屋で魔法薬の原材料を購入しており、浮帆はなにかにつれて買い物頼まれていた。「いつ聞いても思っんですけど」

「何、仁美？」

「浮帆さんのおばあさんって、まるで魔女みたいね」

以前、浮帆の買い物に付き合ったことがあり、彼女達にとってそれはあまりに妖しげな代物だった。

「あつ、分かつちゃった。実はボク、魔女の孫で魔女っ娘なの」

「プツ、何よそれ。笑わせないで」

浮帆の答えを冗談と受け取ったのか、吹き出す仁美。下手に隠して否定するよりも、こう言った方が誤魔化せることを浮帆は経験上知っていた。

「確かに……魔女っ娘よね」

ニヤニヤとした笑みと共に浮帆の胸に視線を持っていく杏奈。

「何よ、杏奈」

凝視され、腕で胸を隠す。

「胸のサイズは魔女っ娘サイズだもんネ」

「うつ……」

気にしていることを言われてがつくりと肩を落とす浮帆。藤乃を含めて、浮帆は五人の中で一番胸のサイズが小さかった。

「こら、杏奈！ それは禁句でしょうが……！」

甘奈に怒られている杏奈を後目に、

「まだまだ成長期なんだから、大丈夫よ」

仁美が慰めるように言葉をかけるのだが、浮帆はチラッと仁美の胸を一瞥し、自分の胸に視線を落としてさらに一層落ち込む。別に仁美が巨乳って訳でもないし、他の友人達もみな平均的なサイズをしているだけなのだが……それでもやはり半ばコンプレックスになりかけている浮帆にはそれが大きく見える。

はぁーっと大きいため息を吐き、ミートボールを箸で突き刺し、口に放り込む。

そんな浮帆を、藤乃は不思議そうな眼差しで見ていた。

「——ありがとうございます」

頭を下げて家を出ようとする祐介。パソコンのセッティングの依頼で、彼はとある老夫婦の住む家に来ていた。

「ちよつと、お兄さん。お茶でも飲んでいきなさい」

老婦の申し出に後ろ髪引かれる。だが、祐介にはまだまだやらねばならない仕事がたくさんあった。

「すみません。折角ですが今日の所は遠慮させてもらいます」

「どうしてなの？」

「今日は、仕事を立て込んでいるんですよ」

「お仕事なら仕方ないわね。もし近くにでも来たら、立ち寄ってね」

「あつ、はい。本当にすみません」

再度頭を下げ、祐介は家を後にする。角を曲がって老夫婦の家が見えなくなると、さすがに仕事中は口にしなかった煙草をくわえ、肩に背負っているデイパックから依頼書の束を取り出して次の依頼先を確認する。

「ええーつと次の仕事は……犬小屋組立代行か……」

現在地から一番近い依頼場所を選ぶのだが、あまりにあまりな依頼内容にげんなりする。

目的地の民家に向かいながら、

「……多いな」

恨めしげに依頼書の束を見る。依頼自体は一つを除けばそれほど時間がかかるものではないのだが、籐華町を縦横無尽に移動しなくちゃならないのが辛い。久しぶりの仕事は、身体のなまりを痛感させるには十分だった。

歩きながら依頼書の最後の書類に目を通す。それには、他の依頼と違って一枚の写真が付属されていた。尻尾にリボンをつけた黒猫の子供の写真が――

「他の依頼はいいとして、猫探しなんて今日一日でできるのか？」
過去の経験から言えば、少なくとも数日は要した仕事である。

依頼先へと移動する間、道ばたで猫を見かける度に、依頼の猫と違うかどうか写真を取り出して確かめていたが、それで見つければかなりの幸運である。

「にゃあ〜」

「んっ？」

鳴き声に目を向ければ、黒猫が塀の上でちょこんと座っていた。
しばし、時間が停止する。

一度、二度と瞬きし、手に持っている写真と見比べる。
同じだ。

特徴と言えば特徴で、特徴じゃないと言えば特徴じゃない漆黒の毛からの判別は難しいが、ピンツと伸びた尻尾の先につけられた青色のリボンで探している子猫であると確信した。

「チツ、チツ、チツ——」

舌を鳴らして誘うが、

「にゃあ〜」

子猫は一鳴きして、祐介に背を向けて駆け出す。

慌てて追いかける祐介。子猫は籐華女子高の隣にある大きな籐華公園へと入っていく。

「おい、こら、待て！」

黒猫を追いかけて、縦横無尽に公園を駆けずり回る祐介。一度は木の上から降りられなくなった所を捕まえたモノの足を滑らせて木から落ち、その際に逃げられてしまった。

肝心なところで運が無い。

背中に走る痛みを堪えながら、

「いいコだから、逃げないでくれよ」

呼びかけて注意を引くが、子猫の警戒心を消すことができず簡単に逃げられてしまう。

それでも追いかける祐介。九月とは言え残暑厳しく、全身汗まみ

れである。

「はあ、はあ、はあ……つきしょう！」

肩で息をしながら、ベンチに倒れ込むように腰掛ける。

「ここまで鈍っていたとは……」

ここ数ヶ月、就職活動以外はほとんど何もするでもなく日がな一日部屋で転がっているだけの生活をしていた祐介にとって、不摂生の分だけ身体の筋力が落ちていた。

特に祐介の場合、一度身に付けたスキルは、その時の身体で覚えているものだから、身体機能が当時よりも勝っているならまだしも、劣ってしまっていると気持ちだけが先に動いて身体が付いていかない。

「やっぱ、ジョギングぐらいはしとくべきだったかな」

悔やんでも仕方がない。

「にやあ？」

急に祐介が動かなくなったものだから、不思議に思って少し近付いてきた子猫。

ピクッ――

瞬間、跳ねるように子猫に駆け寄る祐介だが、それよりも子猫の逃げ足の方が早かった。

……………。

「駄目か……」

ベンチに座り直す。

「少し休憩だ」

遠巻きに眺めている子猫に言い聞かせるようにそう言うと、祐介は荷物の中からコンビニの袋を取り出す。

その中身は、昼になったら食べようとコンビニで買ってきた昼食であった。もともと、子猫との追い駆けっこに熱中するあまり、昼は過ぎていた。

鮭のおにぎりを取り出してぱくつく。

その匂いにつられてか、子猫が近付いてきた。

「んっ？」

「にゃあゝ」

ぎりぎり祐介が跳び付けられない距離を離れてひと鳴き。

「……欲しいのか？」

「にゃあゝ」

言葉が分かっているかのように鳴く子猫に、祐介はおにぎりを二つに割りその片割れを放った。

「にゃあ」

ひと鳴きして、子猫はそれを食べ始める。

「お前、俺を相手に遊んでるだろ」

警戒しているのか警戒していないのか全く分からない子猫に、そんな気がしてくる祐介だった。

食べ終えたゴミを捨てようと立ち上がる祐介に、子猫は怪訝そうに小首を傾げながらひよこひよここと付いてくる。

「……完全に遊ばれているな」

ポリポリと頬を掻きながら、ゴミをくずかごに投げ捨てる。

「んっ？」

その際、鉄力ゴの中に一つの焼けた札を見つけた。

「お札……」

それは黒焦げた一枚のお札だった。

「何で、こんな物があるんだ？」

考えてみるが答えなどない。

「姫の護衛ね……。俺に魔物退治の手伝いなんて出来るとは思えないが……」

振り返った先には、雄壮にそびえる要山とそれに連なる山麓が見えた。

1 - 7 : 非日常へ1

黄昏時のゆつくりとした時間の中、夕陽に紅く染まった籐華駅前広場の片隅に女子高生が一人。

長い布包みを大事そうに抱え、籐華町近隣では見かけない制服姿は不思議に思われがちなのに、誰一人として女子高生に注意を向けない。

まるで空気の如く静かに佇む彼女は、街の風景に溶け込んでいた。そんな少女の元に、一人の男が声をかける。

「キミが、九石藤乃さん？」

確認するように訊ねる祐介。キョトンと見上げる藤乃。切り揃えられている前髪が風になびく。

「よろず屋の七屋敷祐介なんだけど……」

「七屋敷様ですね。この度は私の依頼をお受けいただき、ありがとうございます」

深々と頭を下げる藤乃に、つられて祐介も襟を正し頭を下げなおした。

「それで、護衛つてのはどんな事なんだ？ それに、俺も魔物を相手にするのか？」

護衛する分にはいい。ただ、魔物相手に自分が役立つとは思えない。

「実は、私もよくは分らないんですが……」

小首を傾げる藤乃。

「冬華先生——久保冬華様が、『魔』を封印する際に、七屋敷様の御助力が必要だと」

「冬華が？」

訝る。元恋人の真意が全くと言っていいほど掴めない。

「七屋敷様は何か特殊な能力でもお持ちなんですか？ 診た限りでは、かなりの力を感じますが」

「力を？」

そんなの初耳だ。どんな事でも器用にこなす自信はあるが、冬華のように靈感の類は持ち合わせないし、超能力の類もない。

「力ってどんなちか——」

シャリイン——

祐介の言葉を遮るように、鈴の音が雑踏の中に鳴り響く。音の先は、藤乃の持つ袋を縛っている紐に付いた小さな鈴だった。

その音に、藤乃の瞳に鋭い光が帯びる。

「『魔』が近くに来たようです」

「『魔』が？」

ザッと目配せをするが、見慣れた街の風景しか見えない。

「こっちです」

祐介を先導するように駆け出す藤乃。

「どうするんだ？」

「倒します。時間を置けば、置いただけ厄介になります故に」

「厄介って強くなるのか？」

「はい」

前を向いたままコクンと頷く。

「今の『魔』は藤姫のお身体を操っております」

「藤姫の！？」

伝説が確かなら、藤姫が『魔』を退治したのは数百年前の事になる。にわかに信じられない。そんな祐介の心情を読んだかの如く、話を進める。

「藤姫は、『魔』を封じる時にこの刀——」

持っていた包みを指し示す。

長さからして刀と当たりを踏んでいた祐介は、その存在には驚かない。

「神刀久遠を用いて、自らの肉体に『魔』を封じ込めたのです。悠久な時の移ろいに封印の効力は弱まり、そして、先の地震で藤姫の墳墓が崩れ、数々の『魔』が甦ったのです。その内の一体の『魔』

が、藤姫の身体を依り代にして活動しています。ただ、藤姫の身体には既に残された力も少なく、代わりになる身体——私の身体を狙っております」

「なっ！？ それなら、あんたは隠れていた方がいいんじゃないのか？」

「いえ」

首を横に振る。

「籐華町は気脈の流れ込む淵のような地なんです。気付いている人はほとんどいませんが、力のある人が自然と集います」

「丁度、冬華様や七屋敷様のように——」と言い、そして「浮帆さんもまた……」声に出さずに心で続ける。冬華の引き合わせか、それとも偶然か、隣の席の同級生に想いを馳せる。今朝廊下でぶつかりかけたあの時、藤乃は浮帆の力を看破していた。

「『魔』にとつては、藤姫の血族である私の身体でなくてもいいのです。もし、それなりの力がある方の身体が『魔』に奪われますと、かなり厄介なんです。まだ、『魔』は力を得ることだけを考えていますが、これがひとたび力を得れば、人を襲い出すはずですよ」

祐介は少しだけ間を開け、

「正直、理解しきれないが、何となくやばいのは分かった」

素直な感想を洩らす。一般人である自分には途方も無さ過ぎた。

「それで、俺と一緒にいて大丈夫なのか？ 仮に、俺にも力があるのなら、身体を奪われる可能性があるんじゃないのか？」

「大丈夫です。力においては、今のところ私以上の方は見かけおりません。『魔』も、強い力を欲するなら、私を狙ってくるはずですよ」

「狙ってくるって、勝てるのか？」

気まずげに藤乃の顔が歪む。先日、冬華の助けが無ければ身体は奪われていたのだ。

表情から不安を読み取る。

「勝てないのか？」

「藤姫の一族として、『魔』を調伏する修行はしていました。でも、
いまだ修行中の身故に完全に自分の力を使いこなせていないのです。
それに、体力的にはあちらに分があります」

（望み薄いな……）

走りながらも器用にズボンからよれの煙草を取りだしくわえ
る祐介。勝てる可能性が見出せない戦いに、思わず帰りたくなる。

1 - 8 : 非日常へ2

「あいよ。これで頼まれた品は全てじゃよ」

白髭たくわえた老店主が、奥から持ってきた黒い粉末を秤に掛け適量包むと、他の品と一緒に袋に入れてカウンターに置く。

駅前の商店街から少し離れた奥地に、ひっそりと店舗を構える漢方屋には似つかわしくない小柄の女子高生がそれを受け取り、大事そうにデイパックにしまう。

「おっと、浮帆ちゃん。これを船穂さんに上げてくれんか」

串に刺さった何かの長い生き物の薫製を持ってく老店主。

「何ですか、それ？」

さしもの浮帆も頬がひきつる。祖母に頼まれて購入した物の中には、イモリの黒焼きなんかもあったが、それは既に粉末にされていたため抵抗はなかったが……さすがに原形を留めていると退ける。

「ツチノコの薫製じゃよ」

「ツチノコ!？」

素っ頓狂な声を出す浮帆。言われてみれば、へびと比べるには胴体が太いようにも見えた。

素直に驚く浮帆に、老店主は乾いた笑い声を上げ、

「冗談じゃよ、冗談。蛙を飲み込んだ状態での蝮の薫製じゃ」

「おじいちゃん、からかわないでよね」

へなへなと抜けた力のまま睨み付ける浮帆。この店に来る度に老店主にいいようにからかわれていた。

前回も、宇宙人の木乃伊だと言って小猿の木乃伊を持ってきたことがある。

「すまん、すまん。浮帆ちゃんがあまりにも素直に驚くから、からかいたくなるんじゃないよ」

カッカカツと笑う老店主に、浮帆は憮然と頬を膨らませながらも、貰った蝮の薫製を他の買い物と一緒にしまう。ただ、少し大き

すぎるそれは、尻尾がはみ出していた。

「じゃあ、ボクは帰りますから」

「また面白い物でも入ったら連絡するから、船穂さんによろしく言っておいてくれんかの」

「はいはい、分かってますよ」

どこか投げやりな返事を返し、店を後にする浮帆。ウィッチのイラストの入った愛用のスケートボードで緩い下り坂を進む。見上げた西の空は真っ赤に染まっていた。

朝のけたたましいまでの慌ただしさと違い、ゆっくりとした速度で滑る浮帆。秋風に身を委ね、MDプレイヤーで曲を聴きながら、鼻歌混じりにスケートボードで右へ左へとスラロームさせる。

「ふん♪ ふふん♪ ふ——ッウゲ!？」

いきなり襟首を掴まえられ、セーラー服の胸当てで喉が締められる。

「浮帆さん」

襟を掴んだのは担任の冬華だった。手にも提げられている買い物袋からして、運悪く、買い物途中の所に遭遇してしまったようだ。

「冬華先生……」

「スケートボードでの通学は駄目と言ったはずですよ」

浮帆をスケートボードの上から降ろすと、ボードの真下から蹴り上げ、クルクルクルと回転するボードを空中で器用に掴む。

「没収——ですか？」

恐る恐る訊ねる浮帆。

まだ学校近くにいるため、家まで徒歩で四十分は歩かないとならない。

「没収しても無駄でしょうね」

大きな眼鏡の下で目を眇めながら、ボード片手に嘆息する。

「あなたのことだから、ボードを取り上げたら今度はインラインスケートでも履いてくるんでしょし」

「……………分かります？」

クスツとほくそ笑む冬華。

「あなたぐらい分かりにくい娘もないけど、それでも少しぐらいはね」

冬華のおかしな表現が何を言い表しているのか浮帆には掴みかねていた。そんな彼女に、取り上げたスケートボードを渡す。

「だいたい、自転車で通えばいいのに……」

「……自転車、乗れないんですよ」

一見運動神経の良さそうな浮帆だったが、何故か自転車を苦手としていた。

「しょうがない娘ね」

やれやれと苦笑する。

「そういうモノは、なるべく先生の見ていない所で乗りなさい。私以外の先生は優しくないわよ」

軽くウインクしてみせる冬華。真面目だが融通の利く彼女は、そこそこ生徒達に人気があつた。

スケートボードを抱えた浮帆は、たわいのない会話を交わしながら冬華と並んで街を歩く。方角が同じ為、冬華のいる間はスケートボードは使えない。

上り坂ならいざ知らず、下り坂を二本の足で歩くのは久しぶりだ。

「そう言えば、浮帆さん」

「何です？」

校舎が見えてきた頃、冬華が唐突に話題をふってきた。

「文化祭の準備の方は順調なの？」

「文化祭ですか？」

それは今週末の土日に行われる文化祭に付いてのモノだった。

担任とは言え、生徒達が自主的に行う文化祭の催し物への関与はしたくないのか、冬華は自分のクラスが何をするのか概略しか知らない。

「確か喫茶店をするのよね」

夏休み前に生徒達が話し合いで決めたことを思い出しながら訊ねる。

「お店で出す物は、珈琲紅茶にジュースとクッキーだけですけどね」とても喫茶店とは言い切れないが、少ない品数は質で勝負する事とし、クラスメートの中で実家が喫茶店を営んでいる娘や、趣味で紅茶を嗜んでいる娘が最高の材料を用意し作る事になっている。

「浮帆さんは何を担当しているの？」

「ボクですか？ ボクはウエイトレスです」

浮帆達のグループは文化祭当日のウエイトレスを担当していた。

「先生の方は準備はいいんですか？」

他の学校と違い、彼女達を通う高校の文化祭は、教師が生徒の催し物に関わらない代わりに、先生達も何かの催し物を用意し参加する事が恒例となっていた。数人でバンドを組む教師達もいれば、趣味で描いた絵画の展覧会をする先生もいる。

「私の準備は当日に着替えるだけでほとんど必要ないからね」

冬華が高校に新任として教鞭を取るようになってから四年。毎年

彼女は、他の占い好きの同僚数人と共に占いの館を開いていた。

「また、占いの館ですか？」

「仕込みもいらなし、あれが一番簡単なのよ」

冬華の占いは浮帆の魔法によるものと違い、靈感に頼った本格的であり、その的中率はかなりのものを誇っていた。

「そう言えば、浮帆さんも占いをするのよね」

訊ねる冬華の声が何故か弾む。

「先生ほどの的中率ではないですけど……少しは」

おずおずと応えた。冬華のやけに澄んだ笑みが気になる。

警戒するように心を身構えさせる浮帆だが、次に冬華が言ってきた話は予測の範疇を超えていた、

「やっぱり、スケートボードでの通学はよくないわよね」

「へっ？」

唐突に変えられた話題に戸惑う浮帆。冬華は、自分の言ったことを一人納得するようにうんうん頷いてみせた。彼女の顔に浮かぶ笑みは、悪戯が浮かんだ小悪魔のように蠱惑を含んだそれは、浮帆に

嫌な予感をまとった冷たいものを背筋に伝わせた。

「コレは、浮帆さんのお母様を呼んで、一度嚴重注意しないとね」
「先生？」

今までそんなことは一度もなかったのに突然の母親の呼び出しを言い出してくる、その真意が掴みかねる。

「あつ、ペナルティとして読書感想文を提出して貰うのも良いかもね……枚数十枚以上の。それとも、グランドの脇の草むしりもいかしら。陽射しはまだ強いから、焼けるわよ。あつ、『私は校則違反しました』ってプラカードを持たせて、文化祭の間正門で立たせるのも面白しろそうね」

何となく、冬華が言おうとしている事が分かってきた浮帆。力無く口を開いた。

「ボクも文化祭は楽しみたいから、手伝えるのは初日の自由時間だけですよ」

冬華は満面の笑顔を浮かべた。

「ありがと——」

言葉を嚥み虚空を見つめる冬華。大きなレンズのメガネの下の瞳は、かなり鋭い。

「どうかしたんで——！？」

ゾクツとした感覚に、冬華と同じ方角を見る浮帆。たわいもない魔法しか使えない浮帆だが、力を感じ取ることぐらいはできる。

何か強い力——凄く気になる。

「先生、ちよつと行つてきます」

言うが早いか、持っていたスケートボードを地面に置き、飛び乗る浮帆。力の感じる方角向けて加速する。

「えっ？」

風に乗って微かに聞こえた冬華の囁き。スケートボードを滑らせたまま振り返れば、優しいな微笑みを浮かべていた。

「——ゴメンナサイね」

別れ際に冬華は確かにそう言っていた。

その言葉の真意が分からない。進むべく先の東の空は、いつの間にか夜の暗さがあつた。

「空気が違うな——」

周りを見渡し、ぼそつと洩らす祐介。肌を感じる空気が異様にざらつく。

祐介と藤乃の二人がやってきたのは解体途中の古ビルだった。シヨベルカーで壊されているビルは瓦解と化し、辛うじて一面の半分だけ残された壁と半分以上崩れている柱がビルの名残を残していた。普通なら、工事している人の姿が有りそうなそこは、不思議と誰の姿もない。先日の地震で、工事が一次中断しているのかも知れない。どうでもいいコトだが……

「来ます——」

反射的に布から神剣久遠を取りだし、はじき返す藤乃。

キーンつとした澄んだ音。薄暗い夕闇の中、虚空が煌めく。

「何だ!？」

突然の戦闘に付いていけない祐介。

瓦礫の上を弾けるように舞い上がる埃。藤乃の刀と交わる時に聞こえる音だけが、何物かの存在を感じさせる。

だが、祐介にはそれが見えない。

瓦礫の山の上で一人剣舞を舞う藤乃の姿しか、祐介の目には映らなかった。

「これじゃ、助けようもないな」

苛立たしげに吐き捨てると、くわえていた煙草を投げ捨て、足下の瓦礫からこぶし大のコンクリートの塊を手取る。重量を確かめるように二度三度宙に放り、力強くそれを握る。

相手は見えない。でも、それで存在を識れないわけではない。

リアクシヨンの度に舞い上がる埃に音。そして、刀を振るう藤乃の先に剣先を見、『魔』の動きを予測する。

どんな動きにも対応できるように斜に構え自然体で立つ祐介。

聞こえる音に一定のリズムを読み取り――

「そこだ！」

持っていたコンクリートの欠片を、藤乃の目の前に投げつける。
ドゴツとした鈍い音。宙を走る藤乃の刀に血が滴る。

「当たったようだな」

少しだけ息を抜く。その刹那――

「七屋敷様、避けて下さい！」

叫ぶ藤乃。彼女の目には、祐介めがけて駆ける『魔』の姿を捉えていた。だが、見えない。

気を抜いてなければ気付いたかも知れない。でも、今の祐介には無理だった。

迫り来る気配。

その場から避けようとする祐介だが、瓦礫に足が取られて思うように動けない。

ぶわつとした風圧。

駄目だ――！

思わず目を閉ざす祐介。竦めた彼の頭上を何かが通り過ぎた。

バツコーン――

高速で飛来した物体に『魔』は大きく吹き飛ばされた。

カラカラカラッと、乾いた音を発てて転がるのは裏を向いたスケートボードだった。

「藤乃！」

「浮帆さん！？」

工事現場を囲むように立てられた防音壁の間に立つのは浮帆。『魔』に祐介が襲われそうなのを見て、彼女がスケートボードを魔法で飛ばしたのだ。

高度5センチの飛翔魔法も、乗ってる自分がいなければあれくらいの手当はできる。

祐介の元に駆け寄る藤乃。浮帆もまたそこに向かう。

「何なの、あれは？ やばそうに思えたから、とっさにスケボーを

投げつけたんだけど……」

祐介に見えない『魔』を、魔女である浮帆はしっかりと視認していた。そして、獣の耳こそあれど、一見すれば藤乃似の人である『魔』の本質を見抜いていた。

「要山に封じられていた『魔』です。そして、私は『魔』を見張っていた一族の者です」

「ふーん、よく分からないけど、人の敵ってヤツ？」

「です」

短く応える藤乃。抜き身の刀を翻す。

キーンとした甲高い音。

「ちよつと、おじさん！」

呆然と立ち竦む祐介の腕を引っ張って横に避ける浮帆。今まで立っていた場所を、疾風が駆け抜けた。

「お前は？」

「浮帆」

目で『魔』を追いながら、

「名前よ、おじさん。ボクは瀬野浮帆。藤乃のクラスメートの瀬野浮帆。名前で呼んでよね、おじさん」

「なら、俺もおじさんはやめてくれ。七屋敷祐介って名前がある」

「七屋敷？ 言いにくいから、おじさんでいいじゃない。実際、おじさんだから」

祐介からは死角で見えない足下で、瓦礫に魔力を込める。

込められた魔力は、藤乃めがけて向かう『魔』の足下の瓦礫を小さく弾かせた。

体勢を崩す『魔』。その隙を見逃さず藤乃は刀を振るうが、既に体力がつきかけていたのか、ワンテンポ遅れ、虚しく空を切り裂いた。

お互いに距離を取るように後ずさる二人。

「残念」

「見えるのか？」

「おじさんには見えないの？」

答えの代わりの質問。それが全てを肯定する。

「ああ。微かな気配のようなものは空気の流れて分かるんだが……何も見えない」

浮帆の見つめる先に目を向けても、見えるのは月光に照らされた空間のみ。

「九石のヤツに護衛を依頼されているんだが……」

手出しのしようがない。

「護衛って？」

「俺もよくは分からん」

それを知っているのは祐介を名指しした冬華一人だけだろう。

「しかし……」

戦いの場で何もできないのは齒がゆい。高速で移動する藤乃と、『魔』の気配。こうなると、先程みたいに石を当てることもできそうにない。

「見えるって事は、浮帆にも何か力があるのか？」

「力——ね」

薄い笑みを浮かべる。

一度目を閉じ、魔力を高めるように大きく息を吐く浮帆。左手に光が集う。

「キヤア——」

短い悲鳴。視線の先では瓦礫に足を取られ、藤乃が転倒していた。好機——とばかりに迫る『魔』。浮帆は光を握り締め、それを投げつけた。瓦礫やスケートボードと違う魔力の衝撃。威力自体は大きなこと無いが、『魔』の進行を僅かにずらすことに成功。反れた攻撃は、藤乃の握り締める刀を弾かせるだけで済んだ。

「ボクは魔女よ。もっとも、ちよびつとな魔法しか使えないけどね」
ニコツと笑む横顔は、可愛らしさの向こうに微かな妖艶さが混じっていた。

藤乃は素早く立ち上がると、浮帆達の場所にまで戻り体勢を整え

る。

「浮帆さん。久遠——刀を呼ぶことはできますか？」

弾かれた刀は遠く、瓦礫の山の突き刺さっている。とてもじゃない。取りに行く自分を『魔』が黙って見過ごすとは思えない。

「少し待って」

魔力に意識を込め、それを伸ばして刀に触れてみるが、思うように掴めない。

「無理ね。かなりの力のある刀みたいで、ボクの干渉をはじき返してくるわ」

祖母か母並みの魔法が使えば動かすことぐらいはできるのだが、浮帆にはそれは無理な話だった。

「助けが入ったみたいだが、終わりだね姫。素直にあんたの身体をくれるのなら、今回だけはその二人を見逃して上げるよ」

居丈高な声が響く。

「これは、『魔』が話しているのか……」

姿の见えない祐介にとって、それは虚空から聞こえる不思議なものだった。

「どうするの、藤乃？ 身体をくれって、やばい事なんですよ？」
事件の概要を知らない浮帆でも、それが何となくまずいのは分かる。

「はい」

「何とかならないのか？」

「あいにく、私の力は久遠と合わさって始めて発揮されるものです。久遠が無いと、どれだけの力を持っていたても、満足に出すことができないんです」

一度首を横に振り、すつくと『魔』を見据える。

「仕方ありませんね」

『魔』に向かって歩き出す。

「九石？」

「藤乃！？」

「お二人は巻き込まれただけですから——ここはそれ以上答えず歩む藤乃。」

「浮帆。魔女なら、お前の魔法で何とかならないのか？」

「無理よ。魔女って言っても見習い以下で、全魔力を込めても一瞬の隙を作るのがやっとよ」

「隙——か」

目で刀を見る。

「『魔』の目を眩ますことはできるか？」

「それくらいなら」

強烈な光を作り出すことはできなくもない。

「じゃあ、俺が駆け出したら『魔』の前で作ってくれ」

ぼそつと呟き、

「Go——！」

叫びと共に刀めがけて走り出す。それを合図に、浮帆は魔力の全てを込めて光を作り出した。

カメラのフラッシュの如く眩い閃光が、瓦礫の山を白一色に染め上げる。

手早く刀を掴むと、それを藤乃の元に投げようと身体を返すが、

「いない!？」

そこに居るはずの藤乃の姿が無い。

「せつかくの小細工も、残念ね」

声のした方に向けば、一人の見知らぬ女性が藤乃の首を締め上げながら、浮帆を踏みつけていた。

「……『魔』!？」

自分の目に映る『魔』に戸惑う祐介。視線を『魔』に向けたまま、コレの力なのか？

握られた刀を意識する。

日本刀のはずのソレは不思議と軽く、自分の手が延長しているかのような錯覚さえ覚える。

そして、体の中から力が湧いてきている感じがした。
祐介を無視して、藤乃と口を併せようとする『魔』。
いけるか。

祐介の身体が揺らぎ、背景に溶け込む。
疾く速く――

一瞬の残像を残して、祐介は『魔』の目の前に詰め寄った。
藤乃の首を掴んでいた『魔』の腕を一刀の元に切り落とす祐介。
そのままの勢いを使って『魔』を蹴り飛ばす。

重圧から解き放たれた浮帆は、苦痛に顔を顰めながらも立ち上がる。
藤乃もまた、喉をさすりながら空気を吸い込む。

「あなた――力を隠していたのかい」

静かに言う『魔』。腕を切られたわりには怒っているように見えない。
ちらつと一瞥落とされた腕に向けると、ふわりと浮かび上がり『魔』の元に飛んでくる。掴んだ腕を、血の滴る切り口に併せると、それはあっさりと繋がった。

「良いわね。あなたの身体――」

ニヤリとつり上げた口元の向こうに鋭い犬歯が見える。

「その若い姫の数倍の力を持っているじゃない」

「逃げて下さい！ 七屋敷様――！」

『魔』の考えを悟る藤乃。でも、祐介は逃げずに『魔』に向かう。
基本も何もなっていない我流に振るう刀。軽いこともあって、太刀筋は速い。

迫り来る刃に防戦一方の『魔』。

「冬華様の言っていたのはこの事なの――」

自分以上に神刀久遠を操る祐介の存在に、冬華が自分に祐介を紹介したのを思い出す。

昨晚、公園で『魔』にやられそうになった時助けてくれた冬華。
彼女は持ち前の靈感で『魔』を察知し、あの場に訪れたと言う。
『力を貸す』と告げる彼女は、何故か自分を籐華女子に転入させ、
『よろず屋』を紹介してくれた。

理由を問えば、『必要だからね』と笑って返すのみ。

そして、それ以上に力を貸してくれるような真似はしなかった。つい先刻も、祐介と会うことに同行を願ったが、それは断られた。昨夜は、たまたま『魔』が止まっていたからお札を投げつけられたが、運動神経の鈍い自分は足手まといにしかならないと――

「凄いじゃん、あのおじさん」

浮帆の感嘆の声に、思考の海から戻る。

「勝てるかな？」

「大丈夫だと思います。完全に久遠と同調してますし――秘めている力の量が桁外れですから」

「ふーん。私もあの刀持つと、魔力強くないかな……」

些細な考えが浮かぶ。生まれた時から、母と祖母の強力な魔法を見ていたため、力の弱いことに劣等感を感じていた。

せめて、箒に跨って空ぐらいは飛べるようになりたい。

考えが反れるぐらいに、祐介の『魔』との戦いにはゆとりが見えた。

「あいにく、久遠を使えるのは藤姫の一族のみです」

「藤姫の？」

言葉の意味するところを知らない浮帆だが、自分が該当しないのは分かる。

「はい。でも……何故七屋敷様が使えるのかしら……」

疑問に思う藤乃。祐介を見、そして向けた『魔』と視線が合う。

底の见えない瞳に見据えられ、ゾクツとした恐怖が背筋を走り抜ける。

刹那――

『魔』に向かってきた祐介の前の空間が真っ白に弾けた。

突然の光に景色がホワイトアウトする三人。さっき、浮帆が使ったのと同じ手段を取ったのだ。

力押しばかりで、そんな技を使えるとは思ってもいなかった祐介は完全に遅れを取る。

「キャッ！」

ドッゴ——

悲鳴と鈍い音が入り交じる。

うつすらと見える視界の向こうでは、先程と同じように浮帆を踏みつけ、藤乃の首を締め付ける『魔』の姿があつた。

ただ、先程と違うのは、その双眸の紅い瞳は祐介を見つけ、隙を見せない。

何かの動作に移れば、二人を一瞬で殺す——それが『魔』の視線から伺い知れた。

動けない祐介。

「その刀——放してくれる？」

訊ねる口調は優しい。

どうするか考えあぐねる祐介。放せば二人を助けてくれるかも知れない。

「あんたの身体気に入ったの」

握る腕が強ばる。答えがどうにもまとまらない。

「早くしないと、二人とも殺すよ」

その言葉に、祐介の指が一本ずつ解き放たれる。

彼の腕から離れた刀は、本来の重量を示すように瓦礫に突き刺さる。

空いている方の左腕を刀に向ける『魔』。左手から放たれた力が、瓦礫もろとも刀を後方に吹き飛ばす。

完全に危惧が無くなつたのを確認して、掴んでいた藤乃を投げ捨てた。

半壊の柱にぶつかり、低いうなり声を上げて倒れる藤乃。死んではいないみたいだが、完全に意識を失っているようだ。

踏みつけていた浮帆から足をどけ、ゆっくりと祐介に歩み寄る。

間近にある『魔』の顔は、禍々しいまでに美しい。

軽く小首を傾げると、いきなり口に唇を重ねてくる。

突然のことに対応できない祐介の口内に、貪るように入り込んで

くる舌。それと一緒に、『何か』が流れ込んできた。

「――」
何かの呼びかけに顔を上げる浮帆。焦点の定まらないぼやけた視界の向こうで、『魔』と祐介がキスをしているのが見える。

「なっ!？」

一瞬の驚き。だが、何かがおかしい。
違和感を感じ視線を凝らせば、今自分の見ている世界に色が無いことに気付いた。

いくら、闇の帳が降りてこようと、完全な灰色の世界になるのはおかしい。それに、音が何も聞こえない。

「何なの……」

キヨロキヨロと首を動かす。

キスしたまま動かない祐介と『魔』。藤乃は柱の根本でうずくまっている。

「時が止まっているのかな……」

誰一人として動いていない事に、そんな考えを浮かべる。

「まさか、知らない間に時空系の魔法が発動――なんて事は無いかな――蹴する。」

物理干渉系の魔法をごく僅かしか使えない自分が、そんな高等な事をできるとは思えない。

ともあれ、

「理由は分からないけど、今の内に魔物を退治した方がいいのかな?」

一步、祐介達に向かって足を踏み出した途端、更なる違和感を感じる。

「えっ!？」

振り返れば、瓦礫の上で横たわっている自分の身体があった。

「幽体離脱――じゃないよね」

魔女としての感覚がそうじゃない事を告げる。

意識だけが、空間のズレに迷い込んだと言ったところだ。

「でも、どうして……」

「私が喚んだのです」

隣からの女性の声に向けば、半透明に揺らぐ巫女姿の——『魔』
が佇んでいた。

ただし、その姿には禍々しさは無く、凜とした神々しさを感じる。

「あなたは？」

「私は藤姫。かつて、『魔』を自らの内に封じた者です」

「藤姫に『魔』って、伝説に出ている？」

コクツと頷く藤姫。

「お願いです。力を貸して下さい」

浮帆は『魔』に一瞥向け、

「あの『魔』とか言うのを倒せって事なの？」

「はい」

「良いよ」

貸せる力があれば、出し惜しみなどしない。

「でも、ボクに大した力なんて無いわよ？」

「いえ。貴女には私の血族の者に劣らぬ力を持っています」

「力を？」

自分の魔力は完全に把握しているつもりだ。そんな力があるとは思えない浮帆だが……

「何かに封じられているようです」

「封じられている？」

その言葉に訝る。考えられる可能性は、祖母か母が封印を施しているのかも知れない。

「封印に干渉して貴女の力を解き放ちます。それで、私の刀——久遠で、あの二人を貫いて下さい」

「ちょ、ちよっと！？ 貫けって、おじさんが死んじゃうじゃない！！」

「大丈夫です。私が力を制御します。さすれば、『魔』のみを切り裂く事も可能です」

そっと伸ばした手を浮帆の額に添える。

ドクン――

大きくぶれる身体の感覚。見開いた眼には色のある世界が映っていた。

どうやら、現世に戻ってきたようだ。

「これが……ボクの力!？」

身体の中で渦巻く大量の魔力に一瞬戸惑う。

でも、時間がない。

口を併せ、そこから『魔』が自らの『核』を祐介の身体に移そうとしているのが分かる。視線を二人の向こうに刺さっている刀に向ける。

来い――

想いに込めた魔力が強くなったためか、それとも藤姫の意志が働いているのかは分からないが、先程と違い簡単に刀が抜ける。

クルクルと回転しながら飛んでくるそれを、すつくと立ち上がると同時に受け取る。

ズッシリとした感触に、慌てて魔力で重量を和らげる。

軽くなつた刀を水平に構え、

「てえええええ――ッ!」

一気に駆け抜ける。

久遠の力と浮帆の魔力が相俟って、『魔』と祐介の身体を貫いた。不思議と血は出ていない。

「うわあああああ!」

長すぎる髪の毛がざわめく。溢れ湧き出る魔力を辛うじて制御し、久遠に乗せる。その全てで『魔』を封じ込めようとするが、

パッキーン――

澄んだ音を發てて、刀は碎けた。

神刀久遠自身の力に、浮帆の魔力。そして、祐介の力に藤姫の力、『魔』の妖力——その全てが一点に重なり合ったため、刀身が耐え切れなかったのだ。

久遠の時の中、圧縮した力の全てが弾けた。

1 - 11 : 余波

静寂に包まれた廃墟――

夜の闇をまといつてやってきた女性の足音に気付き、意識を取り戻す藤乃。

「……冬華様!？」

ニコツとだけ微笑み、瓦礫の上を歩む。

「『魔』は……」

藤乃が訊ねる。立ち上がった際に体中に痛みが走る。傷こそ少ないが打ち身が酷い。白い肌の至る所がくすんでいた。

「逃げたわ」

星空を見上げ、

「祐介の身体を奪ってね……」

冬華の前には、久遠の柄を握り締めた浮帆だけが倒れ、『魔』も祐介も姿が無かった。

夏はまだ終わっていないのに、涼しげな秋風が冬華の頬を撫でていった。

「う……ん……………」

低いうなり声と共に瞼を開ける祐介。ぼやけた視界が定まるにつけて、白い天井と大きすぎるメガネ越しに覗き込む女性の顔が見えた。

「冬華……か。賭はまだ有効なんだから、俺の生活に干渉するなよな」

気怠そうに言い放つと、冬華から顔を背けるように横を向く。
ばさっ――

ふわりとした感触が頬を撫でる。何事かと思い布団から手を出して摘むと、それは髪の毛だった。たぐり寄せるように引つ張ると、思いの外長い。

まるで女性のように長い髪――いや、女性にしてもそこまで長い長髪の人には珍しいかも知れない。それほど黒髪は長かった。

呆然と髪の毛の先端を見つめる祐介。しだいに頭が冷めてくる。

「そう言えば、『魔』は!？」

身を起こして訊ねる祐介に、冬華は首を横に振る。

「私が行った時には逃げた後よ」

「そうか」

寝ころぶように背後に倒れる。ワントンポ遅れて舞った長い髪の毛が頬に触れる。

「なあ、この髪の毛って――俺が力を出したために伸びたのか?」
力の発揮による身体の変調だと思ふ祐介に、冬華は手鏡を差し出した。

再び身を起こし、首を傾げながらもそれを受け取り覗き込む――
「ッ!？」

映り込む姿に言葉を失う。

右へ左へと顔を動かすと、鏡の向こうも同じように向く。鏡を持

つたまま空いた左手で頬を引っ張ってみれば、鏡の方も頬が伸びる。
「……………」

呆然と隣の冬華を見れば、コクツと小さく頷く。

咄然と視線を落とせば、セーラー服の襟と胸当て、その下に左右二つの膨らみが見えた。

そつと当てた手のひらに柔らかい感触が伝わる。

冬華よりも小さな——漠然と考える。それが現実逃避なのに気付くのに、時間は要らなかった。

「これって……確か浮帆とか言ったヤツ——」

そこで始めて、自分の声の変調にも気付いた。空気に響いて聞こえるのとは違うが、確かにそれは少女の声——

鏡に映り込む自分の姿は瀬野浮帆だった。

「どう言う事なんだよ、これは？」

「推測になりますが」

そう断ってきたのは冬華とは違う声。向けば、藤乃がいた。今まで気付かなかったが、病室のそこには他にも二人の女性——中年女性と老女が佇んでいる。

「何があつたんだ？」

「『魔』が七屋敷様のお身体を奪うのを阻止しようと、浮帆さんが御自分の魔力を乗せた久遠で『魔』を封じようとしてました。ただ、浮帆さんが動いた時には既に『魔』は七屋敷様のお身体を奪い取っていました。本来ならそれでも封印はできたんですが、『魔』の力に藤姫の力、久遠の力に七屋敷様の力、そして浮帆さんの力が一点に集約されました。その途方もない力の余波に耐えきれず、久遠は砕けました。その力に押され、辺りを漂っていた七屋敷様の魂が浮帆さんのお身体に入られたのです」

「入られたのですって、どうして入れるんだよ？ 浮帆はどうしたんだ？」

「それは……」

言い淀む藤乃の代わりに冬華が言う。

「あの時、浮帆さんは解放されたばかりの巨大な魔力になれておらず、制御が甘かったからね。魔力の消費と共に魂——霊力まで消耗させてしまったのよ」

まるで見ていたかのような話が続く。

「おかげで彼女の魂と肉体の繋がりが希薄になっていた——そこへ祐介の鼻先に人差し指を突き付け、

「あんたの魂が押し込まれたの。おかげで、浮帆さんの魂は祐介の心の底に沈んだわ」

「沈む？ それって、どう言うことなんだ？ それに浮帆は？」

「浮帆さんなら……」

『ボクならココよ』

声が聞こえた。心の内から——

「浮帆？ 何処にいるんだ？」

心の中に浮帆の姿が見える。でも、世界の何処にもその姿は映らない。

『おじさんの心の中よ』

キョロキョロと辺りを見渡しながら応える浮帆。

「俺の中？」

「今の浮帆さんは霊体を形成する事すらできないほど消耗しているのよ。本当なら、良くて成仏。悪ければ、あのまま魂が拡散して消滅しているところなの。幸い、祐介と浮帆さんの靈魂の持つ波長が似通っていたから、祐介の魂に寄生する形で現世に留まっていたの」

「それって、ずっとこのままなのか？」

「大丈夫よ。二、三日もすれば浮帆さんの霊力が回復するから、身体の支配権は浮帆さんに戻るわ」

「その場合、俺はどうなるんだ？」

「幽霊……かしら」

「幽霊ね……まあ、こんな身体でいるよりかはましか」

『こんな身体で悪かったわね』

心の中で浮帆が頬を膨らませるが、取り合わない祐介。

「なあ？　今のまま浮帆に身体を返すってのはできないのか？」

「それは無理」

首を横に振る冬華。

「今の浮帆さんが戻っても、指一本満足に動かせないから」

「だけど、俺が使っよりまだろ？」

「今、祐介が浮帆さんの身体から離れたら、コレからの戦い——負けるわよ」

「戦い！？」

「『魔』は再びあなた達の前に現れるってコト。今の『魔』は、祐介の身体を奪い取っただけ……あの身体、砕けた神刀——久遠だったわね。あの刀の破片が体内に残り、思うように力を出せないのよ。久遠の破片を取り出せば問題ないんだけど、相対する力だから『魔』にはそれは無理。そうになると、別の身体を探そうとする——そうになると、『魔』は再び現れるわ。その時、上手くすれば祐介の身体を取り戻すことも可能よ」

取り戻せるの一言で、少しでも希望が見出せた。

女子高生として生きるぐらいなら幽霊でいた方がましだと思っただけ、それなら耐えられる。

でも、

「『魔』が、力を欲するなら他のヤツを選んだりしないのか？」

メガネの下の瞳を細め、冬華は祐介と浮帆に見渡す。

「今、籐華町周辺で一番力を秘めているのは浮帆さんになるから、大丈夫よ」

「そうは言うけど、霊力が無いんだろ？　それじゃあ、意味がないんじゃない？」

何も分かっていない祐介にとって、それは当たり前の疑問だ。

「専門的なコトを話しても理解できないと思うから、簡単に言うわね」

「理解できなくて悪かったな」

ムスツと拗ねる仕草が愛らしい。クスツと微笑み、冬華は説明を始める。

「簡単に言えば、肉体は器で魂はそこに入る水なの。器が大きければ大きいほど、水はどれだけでも入る。つまり、肉体が巨大であればあるほど、魂の持つ力を発揮するコトに制約を受けなくなるの」

「だから、この身体が狙われるのか？」

「そうよ」

チラツと横目で二人の女性を見る。

「ですよ。瀬野さん」

「ええ、そうね」

今まで黙っていた中年女性が話しに入ってくる。祐介は知らないが、瑞穂と船穂の二人だ。

「浮帆ちゃんの力は私やお母さんの遥か上をいきますからね」

『えっ！？』

驚く浮帆。祐介の内にいる彼女の声は外には届かないが、それぞれ強力な力を持つ冬華達はそれを聴き止める。

『それってどう言うコトなの？』

問い掛ける娘の戸惑いを見透かすように、その細い目をうつすらと開け祐介の瞳を見据える瑞穂。

「幼い頃——浮帆ちゃんが物心つく前に、魔力を暴走させたことがあって、おばあちゃんと二人で封印していたの」

『そんな……』

自分の魔力の弱さにコンプレックスを抱いていた浮帆にとって、それは衝撃的であった。

「でもね。本当は十八才の誕生日——来年にはその封印を解くつもりだったんだけどね」

「すいません。藤姫が勝手に解いてしまったらしく」

謝るのは、今の姫である藤乃だった。

「そんなに畏まらなくても良いわよ、藤乃ちゃん。もし、藤姫が封印を解かなければ、皆さん死んでいましたからね。それよりも」

冬華に向きなおす瑞穂。

「先生はどこまで読んでいたんです？」

糸目で表情は掴みにくいだが、少し怒っている感じがする。

「ええーっと……」

言葉に窮す冬華。冷や汗が頬を伝っている。

「その娘は『さとり』ですよ、瑞穂」

すうーっと船穂は冬華を見据える。

「あなたは全てを視ていましたね。それで、最後はどうなるんです？」

「あつ、大丈夫です。そこは保証します」

弁解するように頭を下げる冬華。毅然と背筋こそ伸びているが柔和そうな顔つきの船穂なのだが、冬華はすっかりと飲み込まれていた。

元恋人が恐れている事に気付き、祐介は小首を傾げてそれを見ていた。そんな祐介に、

「ねえ、おじさんってばどうして藤乃の刀を操れたの？」

頭の中で浮帆が小首を傾げている。

「それはそうですね。浮帆さんの様に久遠に力を乗せるだけならまだしも、七屋敷様は久遠の力を引き出して、自分のものにしてましたわ。あれは——」

「あなた、姫祭——七屋敷桔梗さんのお孫さんね」

冬華を叱っていた船穂が急に何かを思いだしたかのように、口を挟んできた。

「えっ、あつ、はい。そうっすけど……」

突然出てきた祖母の名前に戸惑う祐介。藤乃もまた何故か驚いていた。

「七屋敷様！ 桔梗様は本当に七屋敷様のお祖母様なんですか？」

「ああ。死んだばっちゃんの名前だけど、それがどうしたんだ？」

「もしか、旧姓は姫祭と言うのでは？」

首を傾げる祐介。嫁入りした母親の旧姓ならまだしも、祖母の結

婚前の姓など聞いたこともない。

そんな祐介に代わり

「姫祭であってますよ、藤乃さん」

船穂が断言してみた。

「やはり……」

言葉の意味を噛み締めるように、浮帆の中の祐介を見つめる藤乃。

「その姫祭って何なんだ？」

「姫祭とは藤姫の一族の名です。今は婿入りした父方の姓を名乗っています、私の本名は姫祭藤乃と申します」

「それって——」

「祐介は藤乃さんと同じように藤姫の血を引いているってコトよ。久遠の力を引き出せたのもそのおかげね」

2 - 2 : 浮帆の服飾事情

「祐ちゃん。浮帆ちゃんの制服ボロボロだから着替えてね。その間にお夕飯の支度するから」

閉まる扉の向こうに瑞穂の言葉を聞き流しながら祐介はベットの端に腰掛け、そのままパタンと背中から倒れる。見上げた天井は見慣れたボロアパートの元は違う。

外傷もなかった——医者居ない間に瑞穂が魔法で治療していた——事もあり、祐介が目を覚ました後、退院。そのまま瀬野家へとやってきた。

壁に掛かっている時計を見れば、時刻は八時前。

祐介としては自分のアパートに戻りたかったが、身体が浮帆——女子高生である以上独り暮らしはまずいと瑞穂と船穂に押し切られ、浮帆の部屋にやってきたのだ。

「ったく、ファンタジーは俺の専門外なんだが……」

顔の前にかざした腕は細い。いまだ自分が女子高生なのが納得できない。

「冬華のヤツ、もしかしてこうなる事を知っていて、俺に依頼を廻したんじゃないのか？」

訝る祐介。明日会ったら、問い詰めてやろうと考える。そんな祐介の心中で、浮帆が不思議そうに覗き込んでいるのが窺えられた。

「んっ？ 何だ？」

『ねえ、おじさんってっば、冬華先生とどう言う関係なの？ 仲がいいみたいだけど』

ポリポリポリと頬を掻き、

「元恋人」

『えっ！？ そうなの？』

「大学時代に付き合っていたんだよ」

それ以上は言いたくないのか、口を噤むように横を向く。視界に

入った世界は、混沌と化した部屋と違い、パステル調の女の子の部屋が広がる。

『なあ。よく平然といられるな?』

声に出さずに心の内に呼びかける。

『俺は仕事だから仕方ないと割り切ったが、お前は完全に巻き込まれただけだぜ? 他人——それも男に身体を動かされてよく平然といられるよな?』

『平然って訳じゃないんだけどね』

苦笑混じりにやんわりと口元をつり上げる浮帆。

『嫌だからって言っても、霊力が回復しないことには身体に戻るわけでもないし……それに、慣れているから』

『慣れている? 他人に身体を奪われることが慣れているのか?』

『ちよつと違うけどね。イギリスの方に留学している姉さんがいるんだけど、昔から魔法の実験台にされて——蛙にされたり、猫と融合しかけたり、妖しい魔法薬を飲まされて、尻尾が生えたりと色々あったから』

『……………』

呆れてもの言えぬ。

『着替えるか……………』

ぼそつと呟いて立ち上がる。いい加減、心が落ち着くにつれてスカート姿が気になる。

『着替えは?』

心の中では、既に着替えを済ませている浮帆の姿があつた。

『クローゼットの中とそこのタンスに入ってるよ』

言われるままにクローゼットを開けると、今着ているセーラー服の替えから、ワンピース等が掛かっている。

少し考えながらタンスの方も開ければ、パステル調の淡い色合いの綺麗にしまわれた下着に頬が引きつる。祐介も健全な男だ。元の身体でそれを見れば、多少はにやけるかも知れないが、自分がそれらを身に付けないとならないとなると話は別だ。

手早くその段を閉じ、別の段を引く。そこには、Ｔシャツが綺麗にたたまれていた。

ほとんど何も考えずにその一つを取りだし、ベットに置く。それからボトムを探すのだが――

「おい」

トーンを落とした声を発する。

「ジーンズが何か持っていないのか？」

『デニムのスカートならあるけど……』

言葉に併せたように、浮帆の姿が変わる。

「そうじゃなくて、ズボンだ。ズボン」

そこには、ズボンの類――キュロットすらも無かった。あるのは、ミニ、ロング問わずスカートばかり。クローゼットの中も同じである。

『ズボンって一本も持っていないよ』

「へっ!？」

あっけらかんとした浮帆の言葉に、目が点になる。

「無いのか？」

『うん』

コクツと頷く。

『ママがズボンを履くのを嫌がるの。なんでも、昔からボクが活発すぎるから、スカートでも履かせておかないと、どこを飛び跳ねるかわかったものじゃないって』

実際の所は、浮帆が幼い頃――まだ、魔力を封じられる前に、何かにつけて浮遊魔法で宙に浮く浮帆に対し、外で魔法を使わないかと危惧してのことであるが、その事実を浮帆は知らない。

『ボクもジーンズが欲しくて、中学の頃から自分で小遣い持って服買いに行くようになって、色々と買ったんだけどね。洗濯に出すとそのままママに隠されるんだから』

その反動で、浮帆は自分のことを『ボク』と言うようになっていた。

『お小遣い無駄にするだけだから、買わないようになったの』

「……………」

がつくりと肩を落とす。祐介としての金で買ってもいいが、話の分だとそれまでもが隠されるのが目に見えていた。まして、いつまで浮帆の身体でいるのか分からない。二日としない内に浮帆の魔力が戻れば、今と立場を代えて自分が幽霊になる。そうなると、買ってもあまり意味がないし、じり貧状態の祐介にとって無駄金は使いたくない。

「着替えるか」

デニム地のロングのタイトスカートを取り出す祐介。さすがにミニスカートを履く勇氣はない。

左側のファスナーを開け、セーラー服を脱ぐ。その一連の動作が映し出された姿見に、祐介は自分が女子高生なのを痛感させられる。パサツと落ちるスカート。

淡い緑色のパンツとブラジャーに包まれたむだ毛一つ無い肌理の細かい肌。

ゴクリ――

飲み込む生唾。

『ねえ、綺麗でしょ、ボクの身体？』

浮帆がニヤニヤと笑っているのが分かる。

『そのまま変なコトしないでよね』

釘を刺す。

「腐っても七屋敷祐介。婦女子の嫌がることをするか」

無然と言い放ち、用意したスカートを履き、Ｔシャツに首を通し。その際、長すぎる浮帆の髪が邪魔になる。

小さいまでもセーラー服以上に胸の膨らみが際立たされ、無意識に祐介の意志は双丘に伸びていた。布越しの柔らかな感触が手のひらに伝わる。そして、普通では感じられない触れられた感触も胸の内に感じる。思わず手を離す祐介。

『まあ、したければしてもいいよ』

その言葉に正気に戻る。

『後で冬華先生に話すから』

「ちよつと待て！　どうして冬華の名前が出て来るんだよ！？」

『だって、恋人なんでしょ？』

「元だ、元」

大きい声で訂正する祐介だが、浮帆には通じていない。

酷く疲れを感じながらも、着替える際にばらけた髪の毛を、頭を振って整える。

「なあ、どうしてこうも髪の毛長いんだ？　切ったらまずいのか？　できるものなら、ショートにしたい。それくらいうざったく、重い。よく肩が凝らないものだ。そう思って胸の小さな膨らみを見て、（これなら凝らないか）

かなり失礼なことを考える。

『おばあちゃんの話だと、魔女の魔力は髪の毛に蓄えられるんだって。それで、生まれた時から伸ばしっぱなしなの』

美容院に行っても、先を揃えるぐらいだと言う。

『魔力を減少させると、『魔』に勝てる見込みが減るよ。それに、魔力を減らすとボクの霊力回復も遅れるから、ずうーと女子高生でいるつもりなら、髪の毛切ってもいいよ。どうせ、魔力が減れば『魔』に狙われる理由も無くなるし』

いいよと言われて、素直に応じれる事柄じゃない。

「お前、俺をからかって楽しいか？」

『……だって』

俯く浮帆。

『そうでも言っていないと、落ち着いてられないよ！』

キラーンと小さな涙が浮帆の頬を伝い落ちる。それは、彼女の身体を離れてすぐにかき消えた。

平然としているって言っても、心根は不安でしかたないのかも知れない。

ポリポリポリと頬を掻く祐介。

「あのな、浮帆——」

『ウソぴょん』』

上げた顔には涙が無かった。

「お前な……」

さすがの祐介も腹に据えかねるが、

『でも、平然とはしていても、それで気分がいいとは言えないよ。理性と感情は別だからね。もし、おじさんがボクの身体に変なコトしたら、元に戻った暁には魔法の実験台にして上げるかもネ』

悪戯っぽい微笑みは、まるで小悪魔のようだ。

実際、何されるか分かったものじゃない。

「重々、気を付けるよ。お前のように蛙にされたら適わないからな」

「祐ちゃん。ご飯の支度ができましたから、降りてらっしゃい」

下から瑞穂の声が聞こえてきた。

2 - 3 : サバト

階段を下りる際、頭一つ分以上の身長差に不思議な感覚に捕らわれる祐介。それに、スカートがタイトなため思うように脚が開けず歩きにくい。それでも、目の前を漂う浮帆の案内でダイニングへと向かう。不思議なことに、浮帆の姿はセーラー服姿のままであった。既にテーブルには瑞穂と船穂の二人が待っていた。

做うように夕食の置かれた空席——浮帆の指定席に腰掛ける。

「どうです、浮帆ちゃんの身体は慣れましたか？」

「それが、その……まだまだです」

返事に窮す。浮帆の身体で目を覚まして、まだ一時間も経っていないのだ。慣れる以前に戸惑いすらも感じられず、呆然としている状況だった。

「あ、あのおー、みずほ——さんでしたか？」

クスツと小さく笑う瑞穂。

「どうしたの？」

祐介——自分の身体の上に乗っている浮帆が小首を傾げる。

「少しね。浮帆ちゃんの身体で瑞穂さんって呼ばれると不思議な感じがして——」

クスクスクスと優しく笑う。

そう言われても、さすがに『ママ』と呼ぶ事は祐介にはできそうもない。

そんな祐介の考えを読み通したかのように、

「瑞穂さんで結構ですよ」

ニコツと言う。

「楽帆ちゃん——浮帆ちゃんの姉なんですけど、彼女は私の事を瑞穂さんって呼びますし、祖母のことは船穂さんって呼びますから」

優しい雰囲気になり、頬を撫でる。

「それでは、瑞穂さんに船穂さんと呼ばせていただきます」

一度断り、

「浮帆——さんにも聞いたことなんですが、よくお二人は平然としていられますね？」

「祐介さんとは深い縁がありますから」

船穂が言う。

「必要ならば、どれだけでも手をお貸します」

「深い縁とは？」

「貴方の祖母である桔梗さんとは旧知の仲で、その上浮帆さんが生まれてまもなく、強大な力のある魔女がかかると言う特殊な疾患を治療するのに手を貸して頂いた事があるんです。言うなれば、桔梗さんは浮帆さんの命の恩人に当たる方。そのお孫さんが困っていれば、私も手を貸すことに躊躇うことは有りませんよ」

「そう言うことで、私達は今回の件に可能な限り力を貸しますわ」

不思議な縁に、何者かの意志を感じる祐介。

『ねえ、おばちゃん。特殊な疾患ってなに？』

命の恩人と言うところからして、命に関わる病なんだろうけど、浮帆は初耳だ。

「それは、持って生まれた強大な魔力を制御できずに、肉体と魂が著しく消耗し死に至る病ですよ。桔梗さんのお力を借りて、生まれただけの浮帆さんの魔力の一部を切り離し封印しました」

『切り離れたって、藤姫に解かれた封印の事なの？』

「それとは別よ。それに、浮帆ちゃんにはまだまだ幾つかの封印が施されてるの」

『えっ』

言葉が止まる。

「それって、浮帆が全ての力を出せば『魔』を倒せるって事なんですか？」

代わりに祐介が聞くと、船穂が首を静かに横に振った。

「浮帆さんの封印で直接魔力に関わるのは、藤姫に解かれた封印と桔梗さんの封印です。後ののは他の事柄に関しての封印ですよ」

「他の？」

眉を顰め訝る祐介。微妙な表情の変化だが、日頃の浮帆からは見られにくいものだ。事実、頭上の浮帆とは同じ容姿なのに、かなり違う感じを受ける瑞穂達。

「浮帆ちゃんには魔力以外にも感覚にも優れていて——あつ、今言った感覚ってのは普通の五感と違い、見えざる物を視たり、聞こえざる物を聴いたりする感覚ね。昔はよく、色々なモノを見つけては、一緒にいた子供達を困惑させてね。他にも、人の心を読んだりもするしで、その感覚を封印してるの。後は他にも色々あるんだけど——」

すいーつと細めた目で、祐介の中の浮帆を視る。

「知りたいなら話してあげてもいいけど、世の中には絶対に知らない方が幸せってコトもあるわよ」

絶対に力を込めて言う母に、

『………恐いから遠慮しておく』

浮帆は聞く事ができなかった。

2 - 4 : あんばらんす

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ――

けたたましく鳴り響くアラーム音にムツクリと起きあがる祐介。寝ぼけ眼で見渡す部屋は――浮帆の部屋だ。

ポリポリポリと頭を掻きむしるうちに少しずつ現状を思いだす。全てが夢で、目が覚めれば元の祐介であることを心の片隅で期待はしていたのだが……さすがに簡単にはいかないようだ。

「そう言えば……浮帆になっていたんだ」

見下ろした先にはダブダブのＴシャツ越しに膨らんだ胸が見えた。浮帆の服に関する瑞穂の行為は徹底しており、寝間着とは言えずボンの類――普通のパジャマは無く、用意されていたのは足首まですっぽりと隠れる裾の長いダブダブのＴシャツか、古風な浴衣だった。浴衣は、寝ている間に帯が解けたりしたら恐いので、祐介はＴシャツを着込んで寝ていた。

頭の中では浮帆が寝息をたてて眠っている。霊体が寝る事に滑稽さを感じながらベットから出る祐介。

「――と、どうすればいいんだ？」

起きたはいいが、次の行動が思い至らない。朝の支度をするべき何だろうが、世間一般普通の女子高生の朝を祐介は知らない。

起こすか。

「おい、浮帆。朝だぞ？」

声をかけるが一向に目を覚ます気配がない。

やれやれと肩を竦めて、部屋を出る。とにかく用ぐらいは足しておこう。

「おはよ、祐ちゃん」

トイレに向かう祐介に、洗濯カゴを抱えた瑞穂が声をかける。

「あつ、おはようございます」

ペコリと頭を下げる祐介。頭上の浮帆はいまだ寝ている。どうも

浮帆の霊体は、自分で意識しない限り、自分の身体の側を離れることができないようだ。

「浮帆ちゃんと違って朝は早いよね」

「低血圧なんですかね？」

言ってみるが、それが真実なら、浮帆の身体を借りている祐介の方が寝坊しているはずだ。

「まだ、頭の中で寝てますよ」

「浮帆ちゃんってば、時間通りに起きたこと無いからね」

愛娘を見て眉を顰める。

「でも、このまま寝かせておくと、祐ちゃんの朝の支度が困るわね。早くしないと、学校始まっちゃうし」

「それって——浮帆の代わりに高校に行けと？」

「あら？ 浮帆ちゃんの代わりに何処へ行けと言うの？」

クスリとほくそ笑む。

「で、でも——」

「身体は何ともないでしょ？ それなら学生の本分を果たさないと」

「あ、あの、瑞穂さん。俺、26で大学も卒業しているんですけど？」

「でもね。今の祐ちゃんは浮帆ちゃんの代わりだから、さぼりは許しませんよ」

口調は優しいが嫌とは言わせぬ何かがあった。

「それにね、祐ちゃん。俺なんて言葉使ったら駄目よ。外では浮帆ちゃんの代わりなんだから、『あたし』って言うてくれないと」

「えっ？ でも、浮帆のヤツ、ボクって——」

「いいから、『あたし』って言うて」

見えているのか疑問に思えるほどの瑞穂の瞳が少しだけ大きく開かれる。吸い込まれそうな漆黒の瞳に、少女の姿が映り込む。

「あ・た・し」

「あ、あ、あた、あたし……ですか」

頬を思いつ切り引きつらせながらも何とか言う祐介。スカートを履かされたり、風呂で身体を洗わされたりしたのとは別の意味で恥

ずかしい。

開かれた瑞穂の瞳は再び細く閉じた。

「はい、よく言えました」 ちゃんとこれからはそう言ってね」

祐介がちゃんと言ってくれた事に満足げに声を弾ませる瑞穂。

『ふあわあ……何やってるの、おじさん？』

大きな欠伸を洩らし目を覚ます浮帆。

「あら？ おはよ、浮帆ちゃん。少し、祐ちゃんに女の子の嗜みをアドバイスしただけよ」

艶っぽく言うと、瑞穂は洗濯カゴを抱えて廊下を進む。

鼻歌混じりに去っていくそんな母親の背中を見つめながら、残っている祐介に怪訝そうに聞く。

『どうしたの、おじさん？』

「あ、あたしは別に——」

言って、慌てて両手で口を閉ざす。

『あたし？』

不思議そうに問う。

『どうしたのよ、突然？』

「浮帆の代わりだから、『あたし』と言って、瑞穂さんが」

祐介の話に合点がいった浮帆。ポリポリと頬を掻きながら小さく嘆息した。

『おじさん、ママに催眠術をかけられているわね』

「えっ？」

頓狂な声が洩れる。

『ママの瞳を見ただしょ？』

コクツと頷く祐介。

『ママってば、ああやって視線に魔力を込めて催眠術の様な魔法を使うのよ。大方、外ではボクの代わりを演じられるように言葉遣いを矯正するような暗示がかけられているわね。昔から、ボクの一人称を変えろってうるさいから』

困ったもんだと嘆息する。

「あ——じゃなくて、おれ——ボクが元の身体に戻ったら解けるのか？」

意志して『俺』と言い直してみるが催眠術の影響が落ち着かず、間を取って『ボク』と言ってみる。これなら、自己崩壊せずに済みそうだし、元々の浮帆と何ら変わらない。

『それは大丈夫よ。そこまで深い催眠術じゃないモノ。すぐに解けるわ』

胸を撫で下ろす。

今の姿で使う分にはまだ割り切れる。でも、男に戻ってそれだと——考えることも恐ろしい。

トイレの扉を開けて入ると、

『しかし、お前って、人にかけられた催眠術の深度まで分かるのか？』

祐介は便座に腰掛けながら聞く。昨日から数えて二度目のトイレだが、座って用を足すことには慣れていない。話でもしていないと気分が紛らわせれない。

『そう言えば……前はそこまで分からなかったけど……』

口元に人差し指をあて、考え込む浮帆。

『藤姫に封印が解かれたことで鋭くなったのかな？ それとも、霊体でいるから分かりやすいのかも……あつ、今はおじさんの心の中にいるから、それで分かるのかも』

推測は色々と思い浮かぶが断定はできない。祖母や母なら知っているだろうと、後で聞けばいいと考える。

「なあ、浮帆。学校はどうするんだ？」

トイレから出た祐介はその足で洗面所に向かう。

いつもなら、軽く洗うだけで済ますところを、浮帆の指示でしっかりと顔を洗う。

『学校？』

「瑞穂さんが行けって言うんだけどさ。あ——ボクとして行きたくない。正直、お前を演じられる自信が全く無い」

意志力で瑞穂の術に耐えきる祐介。自分の中に浮帆が居るから、浮帆に拳動を聞いて行動すれば演じる事も出来無くはないが……如何せんタイムラグがありすぎる。

『でも、ママが行けって言ったとなると、サボるコトなんてできないし……冬華先生に頼んで、突発性の一時的な記憶喪失にでもして貰えば？』

「それしかなさそうだな」

やれやれと息を吐く。着替えるべく二階へと重い足取りで上る祐介だった。

部屋に戻った祐介は、クローゼットの中から昨日着ていたボロボロの制服とは違う別のセーラー服を手に取り、壁掛けにかける。

寝間着代わりのＴシャツを脱ぐと、パンツだけの裸体が露になる。なるべく身体を見ないように、制服に伸ばした手が止まる。

「なあ、ブラジャーって付けないとまずいよな？」

『あつたり前じゃない。ノーブラで制服着るなんて絶対に嫌よ！』
「うう〜」

低くうなり声を上げながらも、このまま半裸でいられるはずもなく、しかたなくタンズから一つのブラジャーを取りだした。

艱難辛苦の末、それを身に付けるも時間は五分以上過ぎていた。

『何か……創作ダンスでも踊っているような』

呆れ口調の浮帆。色々と声を出しているだけなのに酷く疲れた気がする。

「悪かったな」

スカートを縛りながら応える。下着を付けた後の着替えは早かった。

『もう少し普通に着られないの？』

「健全の男ってヤツがブラなんて付けた経験あるか」

『でも、冬華先生のを脱がしたことは有るんでしょ？』

「それは——ってノーコメントだ」

憮然と言い放つと、部屋を出ようとする。

『ちよつと、おじさん』

「悪いが、いい加減おじさんって言うのを止めてくれないか？ 七屋敷が言い難いなら、祐介でいいから」

『じゃあ、祐さん』

素直に言い直す。

『下に行くなら授業の用意をしてつてよ』

いつの間にか、浮帆の姿も制服に替わっていた。

『それに、髪の毛、ブラシぐらい入れてくれない』

着替える際に擦れたのか、髪型が乱れている。もつとも、長すぎる髪は自重で垂れているため、それほど酷くはない。

軽くブラシを通しデイパック片手に部屋を出ていく祐介。手早く朝食を済ませる。普段の浮帆から比べるとかなりゆとりのある時間だが、早めに学校に行つて冬華に口裏を合わせるように言っておかないとならない。

スニーカーを履きながら、

「なあ、本当にアレで学校に行くのか？」

玄関脇に立て掛けられたウィッチのイラストが描かれたスケートボードを横目で見る。

『ここから学校まで徒歩四十分だよ？ スケボー使わないときついんだから』

「自転車は無いのか、自転車は？」

『自転車はちよつと……』

伏し目がちに横を見る。

「浮帆ちゃん、自転車に乗れないのよ」

ひよっこりとリビングから顔を出す瑞穂。

「自転車に乗れない？」

『たっはっはっはっは………うん』

乾いた笑いをしていたかと思うと、コクンと頷いてみせた。

やれやれと肩を竦め、スケートボードを見下ろす。

「さすがにスケボーの経験は無いな……」

ローリースケートなら、小学生の頃に乗った思い出があるが……
スケートボードとは勝手が違う。スノーボードやサーフィンなら多少は近いかも知れないが、経験が無い。

生来の器用さがある祐介だ。三十分も練習すればいっぱしに操れる自信はあるが、時間が無い。

「しかたない。歩いていくか」

「あつ、祐ちゃん。自転車ならあるわよ」

玄関のドアに手を掛けた祐介を呼び止める。

祐介を連れて、家の裏にあるガレージに向かう瑞穂。ガレージには、真っ赤なオープンカーが一台に砂まみれの4WDが一台。他にもハーレーなんかも停まっている。後、天井を見れば、ウインドサーフィンのボードがしまわれているし、見渡せばまだまだアウトドアなモノが揃っていた。

ただ、何故か場違いを感じさせる数本の簾が壁に掛けられている。

「この車とかつて、誰が使ってるんだ？」

「車はママの趣味なの」

「瑞穂さんの？」

サングラスでも掛けて、斜に構えて運転する瑞穂を思い浮かべる。確かに、彼女ならそこそこ似合うかも知れない。糸目さえ隠せば。

失礼なことを考えている祐介。視線は車の隣のバイクに向く。そこには、数台のハーレーが止まっている。中には、サイドカー付きなんて代物もあった。

「あのハーレーも瑞穂さんなのか？」

「ううん」

横に振る。

「オートバイはおばあちゃんのよ」

「船穂さんの!？」

それには驚く。浮帆以上に小柄のあの身体で、その上高齢で操るモノじゃない。

それ以前に、

「足、届くのか？」

『うーん、おばあちゃんの言い分だと、運転する時には足が付く必要はないんだって。あれで、運転歴五十年以上のベテランで、無事故無違反。若い頃は、レースにも出ていたって言うていたわ。それに、整備も自分でやってるんだよ』

外見に似合わない活発さに呆然としてみると、瑞穂が一台の自転車を持って戻ってきた。普通の通学用の自転車が出てくるのかと思いきや、

「マウンテンバイク？」

「ごついタイヤをした黒と紫の落ち着いたトーンをしたマウンテンバイクだ。」

「浮帆ちゃんの高校通学用に買ったんだけど、乗れなかったから、ずーっと物置にしまってたの」

言うだけあって埃で汚れているが、錆などはどこにもなかった。

ただ、少し傷が目立つ。

フレームの傷に触れる雄平に、

「それって、浮帆ちゃんが付けたモノよ。一応、何回かは練習したんだけどね……」

嘆息混じりに微笑む瑞穂。浮帆は明後日の方向を見ていた。霊体なのに器用にも頬に汗を伝わせていた。

「乗って良いんですね？」

「ええ。浮帆ちゃんのですからね」

スタンドを解除し跨いでみる。その際、短めのスカートの裾が舞い上がり、サドルと尻の間は薄地のショーツ一枚だけになってしまい、不思議な感触が伝わってくる。慌てて腰を上げてスカートの裾を直す、それ以上に困ったコトに、長すぎる浮帆の髪が後ろの車輪の下の方にまで届いていた。このまま走ると、車輪に髪の毛が巻き込まれて危ないだろう。

「これって——髪の毛を結わえる必要があるわね」

「結わえるって、ボ——」

祐介を見据える瑞穂の瞳が少しだけ開く。少しだけトローンとした眼差しになり言い直す祐介。

「あたしには無理ですよ」

催眠術は依然解けていない。

「ヘアピンとかでまとめるんですよね？ そんなの出来ませんよ」
ポニーテールにしたところで髪の毛の先は車輪に届く。アップにするしかないのだが、そんな経験は祐介には無い。

「それなら、尻尾を横にすれば大丈夫よ」

言われるままにポニーテールの尻尾を横に束ねてみる。確かにそれなら、車輪に触れる心配がない。

自転車に再度跨ってみて、調子確かめる。

「どう？」

「大丈夫ですよ」

試し乗りとばかりに、

「——っと」

足を離れた瞬間、倒れる。

横倒しのまま啞然とする祐介。

変だ。おかしい。自転車に乗るのは久しぶりだが、ここまでバランス感覚は悪くはなかったはずだ。

「うーん、浮帆ちゃんの身体ってそんなに自転車と相性が悪いのかしら……」

眉間にしわを寄せる瑞穂。もう、こうなるとそう結論付けるしかない。

『大丈夫、祐さん？』

心配げに内から訊ねる浮帆。

「何か、思いつ切り左側に引っ張られたような……」

感じたままのことを口にする。足を離れた瞬間、確かに祐介は見えない力に横方向に引っ張られた感じがした。

「もしかして」

腕を組んで、顎に手を持っていきながら瑞穂が言う。

「髪の毛の重さなのかしら？」

「髪の毛？」

確かに、祐介が倒れた方が、ポニーテールのある方であった。

「いくらなんでもそれは……」

逆側に結び直し、跨いでみれば今度は右側に倒れた。

二度三度とポニーテールの場所を変えてみるが、その度に有る方向へ転ぶ。

「これは完全にそうみたいね。そう言えば、浮帆ちゃんも練習で乗っていた時に、髪の毛の垂れている方に倒れていたし……」

「そうみたいって、そんなに変わるのものですか？ たかが髪の毛ですよ？」

「髪の毛は魔力の塊のようなモノだから……それで感覚が狂っているかも知れないわね。特に、浮帆ちゃんの場合のバランス感覚は優れすぎているからね、微妙なずれも大きく左右するのよ」

「それじゃあ、自転車は無理って事ですか？」

「ツインテールにするって方法もあるけど……」

少し考え、

「もう一度跨ってみてくれる？」

言われるままに跨る祐介。数回の転びで懲りたのか、用意された膝や肘にプロテクターを着け、手袋を填めている。

「それじゃあ、足を離す前にポニーテールとは逆側に魔力が集まるように意識してみて。それも、髪の毛が流れるように」

「意識って言われても、魔力なんてポ——あたしには分かりませんよ」

「魔力を意識するのは特別な事じゃないわ。ただ、あるように気に掛ければそれで大丈夫」

人差し指を立てて言い切る瑞穂に、小首を傾げながらも逆方向に意識する祐介。

多少は意識しやすいようにと、心の中で浮帆が移動する。自分の方に注意を向けると言っている。

「できたのなら、足を離してみてくれるかしら」

恐る恐る足を離し、ペダルに乗せて漕いでみる。

先程までとは一変して、真っ直ぐ走る祐介。

「あれ？」

「えっ！？」

驚く祐介と浮帆。

「どうやらこれで乗れるみたいね。後は、無意識に魔力を操れば完璧だけど、それは馴れるしかないわね」

瑞穂は自分の考えが成功し、満足そうにしている。

「これなら、浮帆ちゃんが元に戻れても自転車に乗れるわね」

『乗れるの？』

「そうよ。今まで転んでいたのは、魔力が左右に片寄っていたのが原因みたいだからね」

と、そこでガレージの壁に掛けられている時計へと視線を向ける。

「そろそろ行かないと、遅刻するわよ」

ガレージに三人がやってきて、十分近く過ぎていた。

『祐さん、早くしないと』

「分かってるって」

力強くペダルを踏みつける祐介。あれだけ転んだのが嘘のように快適に自転車は走る。

――が、

「無茶苦茶変な感じがするな」

苦い顔をする祐介。

『どうしたの？』

「スカートだよ、スカート。風が舞い込んできて無茶苦茶変なんだよ」

基本的にジーンズを好む祐介には、それは不思議な感覚だった。

『それは……馴れるしかないわね』

軽く流す浮帆。そればかりはどうしようもない。浮帆自身もその感覚が分からなかったりもする。

「はあー。これから女子高生やらなくちゃならないかと思うと、気が重いよ」

嘆息する。上り坂に差し掛かったのか、踏むペダルが重い。

「なあ、それはそうとして、お前の通う高校——籐華だっけ？ それってどっちの方角にあるんだ？」

思いつ切り転ぶ浮帆。

「ちよつと、分かっていて走っていたんじゃないの？」

「いや、適当に走っていた」

その言葉に心底呆れ果てる。

街の住人で高校の場所も知っているが、如何せん現在地が解らない。適当に流していれば知っている通りに出られるだろうが、時間が掛かりすぎる。

「言われてみれば、走っている方向が反対じゃない!？」

結局、二人が学校に着いたのは、いつもの浮帆よりも少しばかり早い時間であっただけだ。

2 - 5 : 突発性健忘症

「そう言うことで、突発性の記憶喪失って事で口裏併せてくれるか？」

教室に向かわず職員室にやってきた祐介は、冬華の姿を見つけて頼む。

「別にかまわないわよ。こっちも、そのつもりでいたしね。いいわよね、藤乃さん」

「ええ。それが一番誤魔化しやすいと思いますから」

冬華の隣には藤乃の姿もあった。

「それよりも祐介——じゃなかった、浮帆さん」

つとーっと、大きいレンズの下の瞳を下に向ける。

「珍しく自転車に乗ってきたのは分かるけど、そのプロテクター外したら？」

言われて始めて気付く祐介。朝の自転車訓練で付けたプロテクターがそのままであったコトに。

慌ててそれを外すと、背負っていたデイパックにそれを突っ込み、結わえていたりボンを外し、髪の毛を流す。

頭上では予鈴が鳴り響いていた。

冬華は、祐介と浮帆に藤乃を連れて教室に向かう。幸い、一時間目の授業は彼女の受け持ちであり、『瀬野浮帆』が記憶喪失になったコト伝えなければならなかった。

「それで、少女としての生活はどうだった？」

階段を上りながら訊ねる。

「べ、べつに……疲れただけだ」

そっぽを向く祐介。その頬に朱が射し込む。そんな祐介に代わり、浮帆が話す。

『聞いてよ、先生。祐さんってば、目を瞑ってお風呂に入って、思いつ切り転んでたんこぶ作っただけですよ。その後、『ガキの身体に

は興味ない』って言うておいて、浴槽の中で鼻血流すし……』

軽蔑の隠った視線を向けるかと思いきや、冬華の眼差しが優しい。

「そんなに女性に飢えているなら、いつでも私の所に来て良いのよ、祐介」

「来て良いってな……それで無理矢理酔わせた上に襲って、既成事実作って、子供ができたって逃げ道塞ぐつもりなんだろう？」

冷ややかに言い放つ。過去に似たような事柄があったのかも知れない。

そんなコトを考える浮帆。藤乃は二人の化かし合い的な大人な会話に、顔を赤くしていた。

『ねえ、祐さんって冬華先生のこと嫌いな？』

「好きだよ」

即答。その言葉に一瞬顔を輝かせる冬華。

「友人としてはな」

続けた祐介の言葉に肩を落とす。

「恋愛感情も多少は混じっているかも知れないけど、始終いつも一緒に居たいって程じゃない。そんな関係だ」

『それって、悪友の関係みたい』

「まあ、そうかもな」

振り返って後ろを見れば、踊り場の片隅でしゃがみ込んでいる冬華の姿があった。

「……私はすぐにでも結婚したいのに」

「冬華先生、いじけないで下さい」

心配げに声を掛ける藤乃。

祐介はやれやれと肩を竦める。

「結婚結婚って、そんなに結婚したいのか？」

「そうだって何度も言っているじゃない」

ポリポリとうざったげに髪の毛を掻き上げる祐介。

「だったら賭に勝つコトだな」

「でも、賭の期限が終わるのって明日じゃない。その身体じゃ、全

く望み無いモノ」

拗ねる仕草が可愛いと思う浮帆に藤乃。一人雄平だけは平然としている。

「分かった、分かった。ボクが浮帆の身体でいる間は賭は保留だ。元に戻ったら再開な。ただし、昨日の夜から浮帆になって——賭が終わるのは本当なら明日だから、その分の二日分だけ——元に戻ったその時から四十八時間で良いよな」

祐介の言葉に、キッラーンと眼鏡のレンズが光る。

「問題ないわ」

応える微笑みが、先程と違い妖艶さが伴う。

自信の現れか、それともはったりか——どちらにしろ、ようは自分が気を付けることに変わりはないから問題ない。

『賭ってなんなの？』

浮帆が興味を持った眼差しを向ける。

「ちよつとした賭だ。ボクが勝ったら、ボクのやるコトに二度と冬華からは干渉しない事。ボクが負けたら、冬華の望む通りに婚姻届に判を押す事だ」

説明している間に、一行は教室の前にたどり着いていた。先に藤乃は一人で教室に入る。祐介は冬華の後に続いて前から入っていた。

ざわめいていた教室が、冬華が一步足を踏み入れた瞬間に静まる。そして後ろにいる浮帆の姿に気付き、皆が怪訝そうに首を傾げた。

日直の娘が号令を掛けようとするのを手で制する冬華。

「授業を始める前に一つ言っておきたいコトがあります」

ざあーっと教室を見渡す。

「この度、瀬野浮帆さんが晴れてめでたく記憶を失うコトとなりました」

その言い回しに、思わず駆けかける浮帆コト祐介。何か言い返そうかと思ったが、下手なことを言ってボ口を出すのはまずいと、静かに控えるのみだ。

「記憶喪失って、本当ですか？」

「ええ。昨日の帰り、スケートボードで転んで頭を打ったそうよ。大したことはないそうですけど、打ち所が悪いらしく、お医者さまの話では完全に失っているそうよ。日常生活を行う分にも、幾つか忘れていたみたいだから、困っているところを見かけたら助けて上げてね」

「……すいませんが、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる。大勢の女子高生に圧倒され、見られていることへの恥ずかしさと照れ、ボ口を出さないための自制心が大人しい浮帆を演じさせる。それがかえって、日頃の浮帆からかけ離れており、記憶喪失の話に信憑性を持たせることに繋がった。

「それじゃあ、浮帆さん。貴女の席は一番後ろの窓際だから——藤乃さんに仁美さん、彼女を頼みますね」

「はい」

「分かりました」

隣の席の藤乃と、前の席で学級委員の瞳が頷く。

祐介が席に着くのを待って、一時間目の授業は開始された。

教科書片手に、冬華が何かを話しているが、祐介の耳には右から左へと素通りする。

「祐さん、ノートぐらい取ってよ」

仁王立ちし上目遣いに睨み上げる浮帆がいた。

「ノートって言っても……。一度は高校の授業で受けている内容だし、ボクもこの教科の教員免許持ってるんだよ」

言葉に出さず応えるその想いに苦笑が混じる。

「教員免許？」

「ボクと冬華は同じ大学の学科の出身なんだよ」

「あつ、そうなんだ」

納得する浮帆。

でも、

「ノート取ってよ。祐さんに必要はなくても、ボクには必要がある

んだから』

浮帆にしてみれば、ノートを取って貰わないと後が困る。

しかたなしにシャープペンを手に取るが——何かを思い付いたのか、隣を見れる。そこでは、藤乃が真面目にノートを取っていた。

少し考え、

《『魔』はいつ頃現れると思う？》

ノートの切れ端に書き込み、藤乃に差し出す。その時偶然気付いたのだが、自然と書いた文字の書体は浮帆のモノだった。どうやら祐介が意図しない限り、無意識下での身体のスキルは浮帆のモノが出てくるようだ。

《明日か明後日以降、近い内に》

切れ端の下に達筆でそう綴られた。

《今日は？》

短く書くと、藤乃は何やら長い文章を書き込み始めた。

返ってきたそれを読む。浮帆も興味があるのか、脇から覗き込んでいた。

《今の『魔』は、七屋敷様のお身体を掌握するのに躍起のはず。今のまま私達の前に現れれば、返り討ちに遭う可能性があることは分かっているはずです。少なくとも互角以上に持ち込めるようになるまでは、現れないはずです》

「明日か……」

窓の外へ視線を移しながらポツリと洩らす祐介。夏から秋に変わろうとする空は、うろこ雲が見えた。

2 - 6 : 浮帆の隣人

「よっ、浮帆！ 記憶無くしたとは災難だね」

頭上からの声に見上げると、涼しげな笑みを浮かべた少女が立っていた。

「どちら様で？」

「あたしは甘奈よ。 竹井甘奈。 あんたとは一年の春からの付き合いの——」

「浮帆！」

甘奈の言葉を遮りながら、飛び込んできた声。 いきなり横から強い衝撃を受け、祐介は大きくぶれる。 幸い、窓際の席であるため横転する事は無かったが、かなりの威力だ。

視線を落とせば、バンダナを被った甘奈と同じ顔の少女が目には涙を浮かべて抱きついている。

「あたしのコト忘れたなんてウソだよ。 あたし達の友情は永久に不滅だよ」

「ええーっと……」

困ったように視線を泳がす。 心の中では浮帆が肩を竦めている。

『何なんだ？』

『からかっているだけだよ。 もうじき、甘奈が助けしてくれるから大丈夫よ』

浮帆の言葉通りに、

「泣き真似して浮帆を困らせるな！」

甘奈が彼女の襟首を引っ張る。 その目尻には浮かんでいた涙がいつの間にか消えていた。

「泣き真似？」

あまりの出来事に思わず言葉が洩れる。

「こいつはあたしの片割れで杏奈。 イタズラの為なら、涙の一つも流せるヤツだ」

「ちょっと、甘奈。あたしだって、少しは心配しているんだから」
頬を膨らませて抗議する杏奈だが、

「浮帆は大事な大事な友達なんだよ——」

ピコッ

乾いた音が響き、頭を押さえる。

「そう言う神妙なセリフは、こう言うのを隠し持つて言う台詞じゃないわな」

ピコピコハンマーを片手に呆れ顔の甘奈。それは杏奈の背中に隠されていた代物だ。

「ちよつと、返してよ。あたしの大事なピコピコ君」

奪い返そうとするが、双子だけあって行動パターンがわかるのか、簡単には取り返せない。

「もしかして、それで記憶を取り戻そうとか言うんじゃない……」

ピョンピョン飛び跳ねる杏奈に、仁美が恐る恐る訊ねる。

「あつ、さつすが委員長。よく分かっているジャン」

「ジャンじゃない、ジャンじゃ。ウンなので記憶が戻れば、医者はいらないんだよ」

ピコッ、ピコッ！

ハンマーで杏奈の頭を連打する。

間の抜けた音と同じように痛みなどほとんど無いが、甘奈に叩かれてる事に屈辱でも感じているのか機嫌が悪そうだ。

そんな彼女達を少しだけ困った笑みを称えながら見守る仁美。転校してきたばかりの藤乃は完全に着いていけず、呆然と佇むのみ。

『何なんだよ……最近の高校生は……』

目の前で展開される質の悪いコントに、心の中で苦味を呟く祐介。あまりの元気の良さにすっかりと圧倒されていた。

『こんなの、いつもよりも大人しい方だけど』

浮帆の言葉に、自分の老いを感じる祐介だった。

杏奈の苦勞の賜か、それとも単に甘奈が飽きただけか、無事にピコピコハンマーを取り戻した杏奈は、祐介に話しかける。

「それよりも、浮帆」

「？」

沈黙で訊ねる。下手に言葉を返すよりも、この方が楽だ。

「記憶無いのは分かったけど、約束は有効よね」

「約束？」

「そう、約束。契約、盟約、確約——指切りげんま、ウソ付いたら針千本のーますの約束」

「はあ……」

酷く疲れを感じる祐介。

「それで？」

「だから、今日の帰りに夢見鶏でスーパージャンボパフェ奢ってね」

「夢見鶏……」

そう言えば、そんなメニューのビラを貼らされた覚えがある祐介だった。

「奢る？ ボクが？」

『ウソよ、ウソ。そんな約束していないんだから』

必死に訴える浮帆だが、記憶喪失になっている『瀬野浮帆』の身では、それを指摘することは出来なかった。

奢るしかないのか……

そんな事を考える。どうせ痛いのは浮帆の財布だから、奢る分には問題ない。

『ちよつと、勝手に奢ったりしたら、後で請求書回すよ』

叫ぶ浮帆。心の中での事だけあって、耳栓が出来ないのが痛い。

「こらっ！」

いきなり甘奈が杏奈を小突き、仁美が言葉を続ける。

「杏奈さん、記憶喪失をいい事にウソの約束をしないの」

「んっ？」

「こいつ、昨日食べた夢見鶏のパフェにすっかり魅せられて、これ幸いと奢らせようとしたただけだから、浮帆は気にしないでいいよ」

「ちよつと、痛いんだから止めてよー!!」

こめかみをりょうこぶしでぐりぐりとされ、涙目で訴える杏奈だが、甘奈はそれを止めようとしない。

『何か……このままやってく自信ないぞ』

『うーん、そう言っても、コレくらいは序の口だよ』

腕を組み、困ったように言う浮帆。

『明日から文化祭があるのよ』

『文化祭？』

懐かしい言葉に意識を向ける。浮帆に教室の後ろの黒板を見るように促され振り返ると、そこには一ヶ月の日程表があり、明日明後日の土日に文化祭があると記されていた。

『出し物は？』

『喫茶店だよ』

『茶店ね——』

何やら言い争っている杏奈達の喧騒をよそに、すいーつと目を細めて窓の外を見る祐介。文化祭と言うだけあって、中庭には造りかけの謎のオブジェが転がっていた。

『確かに今日よりは騒がしそつだな』

ごちる。

まだ暖かい夏の風が頬を撫でた。

『で、何をやるんだ？』

『何って？』

『担当の事だ。喫茶店って言っても、裏方から厨房担当にウェイター——ローテーションは組んでいるんだろつけど、全てを受け持つて事はないんだろ？』

『それなら、ウェイトレス担当だよ。一緒にやるのは、甘奈に杏奈、仁美の四人なんだけど——そう言えば、藤乃は何をやるのかな？』

首を捻る。

そんな浮帆を横目に、

『ウェイトレスか……』

夢見鶏でよろず屋の仕事がない時にちよくちよくウェイターをや

らされた経験がある祐介にとって、授業を受けるよりかは気楽だ。
深く考えずに思う。

スピーカーから二時間目の始まりを示すチャイムが鳴り響いた。

2 - 7 : 逃げられない現実

「ええー!？」

素っ頓狂な叫び声は、校内中に響く雑多な喧騒にかき消されて他の教室まで届かない。

明日からの文化祭のため、午後からの授業はなく、先生生徒一丸になって準備をしている中、祐介は頬をひきつらせていた。

彼——コト『瀬野浮帆』の前にはウエイトレス用のコスチュームをかざしている女子高生達がいる。

彼女達は衣装担当で、最終的な衣装合わせをしようとしていた。天井近くまで組まれた机は暗幕で覆われ、教室の一画に控え室を作り上げていた。

そこで衣装合わせをするウエイトレス担当の生徒達。横を向けば、杏奈達も着替えていた。

「これをボクが着るの!？」

白のブラウスに焦げ茶色の肩の膨らんだワンピース、エプロンドレスに腰を縛る臍脂色のリボン——メイド服風の衣装を渡され、途方に暮れる。

「記憶喪失のトコ、悪いと思っているけど。浮帆の担当だからさ」
脂汗が吹き出す。

てつきり制服の上からエプロンを着けるぐらいと軽く考えていた祐介にとつて、それは思いも寄らなかつた。

『祐さん。早く着替えないと、衣装担当の娘達が困るよ』

心の中で浮帆が促す。

『ちよつと待てよ。ボクは嫌だぜ。こんなの着て客に媚びるなんて既に着替え終わっている杏奈や仁美を見れば、際どいミニスカートをしてるのが窺えられる。杏奈は平然とし、更なる裾上げを注文し、仁美は少し恥ずかしそうにしていた。

甘奈は、体型が同じ杏奈に衣装合わせを任せ、部活の方の催し物

の準備とかで教室にはおらず、担当の決まっていな藤乃は強引にウエイトレスに入れられ、予備として用意してあった衣装で丈を合わせていた。

『そう言っても、今さら別の担当なんて無理だし……』

『でも、ミニスカートなんだろ？』

『うーん、ロングもあつただけど、衣装を作る段階でミニを選択したからね』

簡易控え室で着替えているウエイトレス担当の娘の中には、ロングスカートの姿の者もいた。

『ロングもあつたのか！？　なら、なんでそっちを選ばなかったんだ？』

追求するが、

『まさか祐さんが着ることになるなんて思ってもいなかったから。しかたないじゃない』

そう言われては、答えようがなかった。

『これも仕事だと割り切つて着替えてよ。それ以上着替えないでいると、彼女達にひん剥かれるわよ』

針子達の大半に着せ替え人形とされている藤乃の姿があつた。

藤乃の衣装合わせが済めば、彼女達の興味が記憶喪失で戸惑っている『瀬野浮帆』に向くのは伺い知れた。

「はあ〜」

思いつ切り溜め息を吐く。

逃げようかとも思うが、更衣室と化しているためか男性教諭が覗かないようにと入り口にはしっかりと見張りが立てられていた。

しかたなく着替えることにした祐介。机の上に衣装を置き、制服を脱ぎ出す。

黒のタイツを履き、袖に手を通す。

「？」

若干の違和感を感じながらも、着々と着替えていく——と、手が止まる。

片隅に置かれた鏡には、少しだぶつく衣装をまとった浮帆の姿がある。

ミニスカートだったはずのそれは、床にすりそうな程長く、袖は辛うじて指が出るくらいだ。

『何か、全然丈が合っていないけど……本当にコレで良いのか？』

『良いはずなだけど……』

浮帆にも分らない。

衣装合わせをするが、それでもちゃんと寸法を測ってあつらえてあるから、ここまで大きさがずれるはずもない。

『あれ？』

何か思い当たる。

『ちよつと、その衣装って甘奈のヤツじゃないの？』

杏奈と甘奈は双子な分、判別が付きやすいようにとミニとロングを選び分けていた。

浮帆の言葉に衣装を置いた机を見れば、先程手渡された衣装が綺麗に畳まれたまま置いてある。

どうも、隣に置いてあった級友のを着てしまったようだ。

これが浮帆のままならすぐに気付いたかも知れないが、少女初心者の祐介には仕方のない事だった。

『着替え直すのか？』

『そうね。そのままだと衣装合わせもできないし』

『やれやれ……』

もう一度着替えようとした、その時――

『え！』

『あっ！？』

『うんっ！――』

藤乃、祐介、そして浮帆の意識が一点に向く。

『七屋敷様――』

駆け寄ってきた藤乃が小声で呼びかける。既に彼女の姿は制服姿に戻っていた。

「分かってる」

『これって『魔』なの？』

そこそこの力を感じるが、何かがおかしい。

「どうでしょう？ 『魔』にしては早すぎますし……波動が違います」

『じゃあ、何なの？』

「行ってみれば分かるって事だな」

身体を翻すと出口に向かう。

「あつ、浮帆ちゃん、どこ行くの？」

針子の一人が止めようと言葉を掛けてくるが、

「ちよっとトイレ」

短く誤魔化す。

2 - 8 : そこにある非

机を踏み台にして、『1 - B』のプレートの下に古びた木製の看板を取り付ける生徒がいた。

窓の全てを暗幕で仕切られた教室はお化け屋敷と化しているが——用意されている化け物の人形はおどろおどろしさよりも滑稽で愛らしい。

そんなお化け達の中で異彩を放つ一つの甲冑を運び入れる生徒達。
「ちよつと、あなた達——」

見回りをしていた冬華ともう一人の若い女性教諭——山根郁子が呼び止める。

「あつ、郁先生に冬華先生。何ですか？」
一人が振り返る。

「その甲冑つて、どうしたの？」
「コレですか？ お化け屋敷の飾りですよ」
言われて、ジロジロと見る郁子。

「あなた達が作ったの？ 凄く良くできているみたいだけど……」
刀傷に折れて突き刺さる矢、鉄砲の弾の後。そして変色している血の跡——とても女子高生の手作りとは思えないほど、それは精密な作りをしていた。

「クラスに古美術商やってる娘がいて、その娘の親から借りてきたんですよ」

「そんなの持つてきて大丈夫なの？」
郁子が心配げに訊く。古美術商で扱うような代物だ。高価なものかも知れない。もし間違いなどあっても、学校側としては責任を取れない。

「あつ、大丈夫ですよ。曰く付きとかで、処分しようとしていたのを借りてきましたから」

「曰く付きね——」

口元に手を当て考え込む冬華。鑑定眼は持ち合わせていないが、持ち前の靈感には自信がある。

「ねえ、借りてきたのって、甲冑だけなの？」

「後、刀もありますよ」

生徒が指さす廊下の先では、梱包された段ボール箱から一振りの日本刀を取り出している娘がいた。

ゾクッ――

あわ立つ肌。冷たいモノが背筋を駆け抜ける。

アレは危険だ。

心の中で警鐘が鳴り響く。

「じゃあ、先生。準備がありますから」

「あつ、はい。処分するとは言っても、壊さないようにね」

断って鎧を教室に運び込む生徒達に郁子が応じる。冬華の意識は刀の方に集中していた。その正体を探るべく凝視する。

「ねえ、この紙切れて何だと思う？」

「正札か何かでしょ。邪魔なら剥がしちゃえば？ 文化祭が終わった後に貼り直しておけばいいんだから」

「それもそうね」

何も考えずに剥がそうとする、それは一枚のお札だった。

「駄目よ、あなた達――」

掛ける声よりも早く、少女達の手によって刀の封印が解かれた。

「――寒い」

冬華の隣にいる郁子を初め、周りの生徒達が寒気を感じて身を震わす。

「えっ、あれ？ 刀が無いよ!？」

少女の戸惑いが届く。

突然の寒さに気を取られた一瞬、それは彼女の手から消えていたのだ。

そして、

「キヤア――ツ!――!」

お化け屋敷と化した教室の中からも聞こえる。

慌てて暗幕を掻き分けて覗き込めば、生徒達が腰を落としてペタリと座り込んでいる。

腰を抜かしているように見える。

「どうしたの？」

「せ、先生！ よ、よ、よ、鎧が消えたんです！！」

「鎧が消えた？」

生徒達の話では、運び込んだはずの鎧が目を離した僅かな隙に忽然と消え去ったと言う。疲れによる錯覚だと生徒を宥める同僚の教師を余所に、冬華は険しい顔をしていた。

『魔』の事ばかり気に掛けるあまり、こんな『未来』を見落とすなんて――

でも、

「ある意味、これは丁度良いかもね。祐介の力を測るには」

「冬華先生？」

生徒の一人が怪訝そうに眉を顰めている。

「あつ、別に……何でも」

微笑んで誤魔化す。

そうしながらも、鎧と刀の行方を感じ取る冬華だった。そして、そこに向かって進む祐介達の存在も……

2 - 9 : 瞬発系

「何だと思う？」

廊下の至ろう所に積まれた文化祭の準備を掻き分けながら、気配のする方角へと向かう祐介。併走する藤乃に訊ねる。

「そこそこ力がありますが、『魔』程ではありません。たぶん、『魔』の封印が解かれた余波で活発化した悪霊の類と類推できますが……見過ごすわけにはまいりませんわ」

（悪霊ね……）

心の中で嘆息する祐介。

遂先日まで、オカルトとは関わりのない自分が、女子高生をして悪霊退治をしないとかならないと思うと、限りなく憂鬱になる。

「なあ？ 仮に悪霊としてだ」

「何です？」

「ボク達で退治出来るのか？」

不安が過ぎる。

浮帆の力は使えないし、自分も現状でまともに戦えるとは考えがたい。

「久遠が有りませんから大した事は出来ませんので、私は七屋敷様と浮帆さんの援護に回る事になります」

「援護つて、ボク達に何か出来るんだ？」

『ボクは無理だよ。魔力を使うには身体に戻らないと——』

現状で身体に戻っても、動く事すら適わない。

「ボクだって、自分の身体じゃないし、力の出し方なんてモノすらも分からないぜ」

浮帆の身体自体にはとてつもない魔力を内包していても、肝心要のそのの使い方を祐介は知らない。

「浮帆さんの魔力がお身体を覆っていますから、魑魅魍魎と言えども物理的な攻撃が効くはずです。それに、魔法は専門外のため詳しく

いことは解りませんが、お二人の心が重なれば、浮帆さんの魔法も使えるものと考えられます」

「心を？」

心の内の浮帆を見合わせ、首を傾げる。今の状態で既に心が重なっている気がする二人だ。

「ただ、あまり魔法は使い過ぎないで下さい。来るべく『魔』との戦いの場で、魔力が切れていては話になりません故に」

「よく分からないが、肉弾戦ならOKって事か」

ギョツとコブシを握り締める。

「浮帆。体力はある方か？」

『体力？ 体育の成績はいい方だよ』

「瞬発力に持久力、反射神経は？」

手短に訊ね、身体能力の把握に務める祐介。自分の本来の身体とは勝手が違いすぎる。本音を言えば、腕の長さから目線の高さ、基本的な運動能力を掴むのに、数日は欲しかった。

『みんなから瞬発力の塊だって言われてるけど……』

頭に人差し指を当て、小首を傾げる浮帆。短距離走や走り幅跳びと言った瞬発力を擁するのモノは得意だが、持久力を擁するモノ——マラソンや遠泳なんかは苦手だった。もっとも、人知れず魔法を使っているため、どれくらい自分の持久力が無いのかは知らない浮帆である。

「短期決戦か——」

短く洩らす。

一階まで降りた二人は、力の波動を感じる校庭へと向かった。

2 - 10 : 幻想劇

「だいたい、何で剣道部の出し物が西洋劇なのよ。日本人なら時代劇でしょう、時代劇」

校庭に響き渡るのは甘奈の声だった。身にまとっている西洋甲冑は良くできたレプリカで、あまりにも出来の良すぎたそれは通気性が悪くひたすら暑い。しかも、全身黒尽くめのため熱を無限に吸収する。

被っていた兜を脱ぎ、タオルで額の汗を拭いながら、脇に転がっているペットボトルのスポーツドリンクを一口飲む。

「西洋劇って言うよりも、幻想劇ね。剣と魔法のファンタジーなんだから」

丸めた台本を持って言葉を挟んでくる女生徒が一人。後ろでは、竜の着ぐるみ等が転がっている。

「ファンタジーって言うなら、和風にして妖怪を退治するのでもいいじゃないか？ 化け猫退治とかさ」

「初めは演劇部だけでやる予定だったからね。剣道部と合同でやるって最初から決まっていれば、そう言った脚本も書いたんだけど」

籐華女子では、文化系運動系問わず全ての部活、同好会は何らかの出し物を出展しないとならない。ただ、二つ以上の部が合同して企画しても良いことになっている。逆に、一つの部活、クラスで複数の出し物を行うことも許可されているし、有志を募って出展することも可能だ。ただし、場所が取ればの話であるが……

「しかし、もう少し簡単な役にしてくれればいいのに」

主役ではないとは言え、主役の次に活躍する黒騎士を演じる甘奈は、ずうーっと出ずっぱりだった。

「あんたって、全然部活の方に顔出さないから自業自得よ」

甘奈と同じ様な全身鎧を身につけている娘が会話に割り込んでくる。

「台詞が無いだけ有り難いと思いなさい」

寡黙な黒騎士を演じる甘奈と違い、白一色の姿をした剣道部主将の彼女は主役の白騎士を演じることになっている。いまだ台詞を覚えきらないのか、言うだけ言うのと再び台本を見てぶつぶつ呟いている。

「台詞がないって言うけど……」

脇に置かれた台本をチラリと横目で見る。一言も台詞がないが黒騎士の役柄はハードで、一対二十の立ち回りは元より、果ては特撮まがいのワイヤーアクションまである。

その全てがやり直しの効かない上に、講堂を他のクラスや部活でも使ったため満足な練習を積んでいかなかった。もっとも、甘奈のサボり過ぎって話もあるが……

「しかし、秋だと言うのに暑いわね」

見上げた空にはうろこ雲がある。秋だと言うのにまだ残暑厳しく、摂った水分の量だけ汗をかく。

「さあ、さあ、休憩は終わりよ」

監督を担当している演劇部部长が声をかけると、やれやれと重い腰を上げる甘奈。

「んっ？」

視線の片隅に見える影に気付き、顔を向けると、

「鎧武者？」

鎧をまとった武者がゆっくりとした足取りで歩いていた。

「えらい、デイトールに凝ってるな……」

何かの出し物だと思い、そんな感想を抱く甘奈。

ボロボロに痛み、折れた矢が突き刺さる鎧は、まるで戦場で戦ってきたばかりのように見える。全体的にくすんだ暗さに覆われた姿の中、手にぶら下げている抜き身の刀だけが、秋の陽射しを反射し、妖しくも煌めいていた。

「誰が着てるのかな？」

兜を被り、頬当てまで付けているためか、姿形が解り難い。

「一年の娘じゃないの？ お化け屋敷やるって話よ」

「ふーん、お化け屋敷——」

ゾクッ——

鎧武者が振り返った瞬間、甘奈の背に寒気が走る。いや、甘奈だけではない。校庭に居合わせた生徒達の全てが何らかの恐怖を感じていた。

ギュッ。

知らず知らずのうちに、剣を握る手に力が籠もる。

刹那——

鎧武者が甘奈めがけて駆けてきた。速い動きではないが、完全に虚を突かれていた。眼前で振り下ろされる刀。

反射的にそれを持っていた剣で受け、身をかわす。

彼女が今さっきまで立っていた地面を切り裂く鎧武者の刀と、

「へっ!？」

真ん中で綺麗に両断された剣が転がっていた。

手に残る部分を見て唖然とする甘奈。段ボールと厚紙で形を作り、銀紙と絵の具で着色されている模造刀とは言え、重量感を出すのと強度を増すために芯として木の板が忍ばせてあったのだ。それさえも、見事な切り口を見せていることに、甘奈の表情が固まる。

返す刀で斬りつけてくる鎧武者。

「真剣じゃないの!？」

慌てて身体を翻して逃げるが着ている甲冑が動きを邪魔して素早く動けない。それでも何とか避けきる甘奈だが、身に付けていた段ボール製の甲冑の至る所が切り刻まれていた。幸い、生身にはまだ傷は付いていなかったが、それも時間の問題だろう。

「——ちよつと! 何で、あたしを襲って来るんだよ!！」

避けた甘奈の動きに遅れ、数本の髪の毛が舞う。

距離を取ろうと足を伸ばすが、切り刻まれた剣を踏みつけ大きく体勢を崩す。

顔に落ちた影に見上げれば、今まさに振り下ろそうとしている刃

が見えた。

思わずギュツと目を瞑る甘奈。

「頭を下げる！ 竹井！！」

突然の叫び声に身を低くするその上を、何かが通過した。

薄目を開けてみれば、鎧武者の替わりにだぼついたメイド服を着込んだ女子高生の背がそこにあった。小柄の身長に、長すぎる髪の毛は――

「浮帆？」

甘奈の声に応えず、斜に見据える浮帆コト祐介。その視線の先には、蹴り飛ばした鎧武者が倒れていた。

刀を地面に突き刺し緩慢にも思える動作で立ち上がる。その際、倒れた時にずれた兜が外れ落ちる。

「キヤアアアッ――ッ！！」

鎧武者の顔を目の当たりにした生徒達が甲高い悲鳴上げる。

そこには、武者の顔など無く、髑髏があつた。

「大丈夫ですか、甘奈さん」

いつの間にか隣に居た藤乃が声を掛ける。

「だ、だいじょうぶだけど……」

応える言葉に力がない。腰が抜けているのか、ペタリと経たり込んでいる。

「何なの、あれ？」

訊ねる声が震える。

「戦国時代に殺された方の怨念のようすわ」

「怨念？ 何なのよ、それ！？」

胡散臭いと思いたいが、文化祭の出し物にしては余りにも常軌を逸していたのも事実だ。足下には切り刻まれた剣と鎧の残骸が転がっている。

「大丈夫なのか、浮帆のヤツ！？」

「大丈夫ですわ」

ニッコリと微笑む藤乃。

「あのお二人なら何とかなりますよ。きっと」

「二人？」

意味が分からずキョトンとする甘奈。校庭の中心では、浮帆と鎧武者が睨み合っていた。

2 - 11 : ふたり

鎧武者と対峙しながらも、心の中で問う祐介。

『咄嗟に蹴り付けたけど…… あんなのまで相手にするのか？』

『知らんぷりする？』

そう言われて、それを実行できれば苦労しない。

『なんか…… 最近、運が無いな』

愚痴を洩らし、

『なあ、魔法つて呪文とか必要なのか？』

『魔法？ イメージする事だよ。呪文は結局イメージ力を助けるためだから強くイメージして、魔力を制御すれば発動するわ』

『イメージね……』

パチンと指を鳴らす祐介の手に火の玉が現れる。手袋越しにそれを握り締めるが、不思議と焦げる事もない。

『—— よっと』

軽く投げつけたそれは鎧武者が振るう刀で切られるが、刹那——
爆炎と化して鎧武者の全てを包む。

啞然としている気配を感じるが、気にしている暇はない。

『やったの？』

『いや、見かけただけだ』

外見だけをイメージして放った為か、威力を伴っていない火球の攻撃は、鎧武者を包み込みこそしたが焦げるに留まっていた。

『どうやら、ボク一人のイメージじゃ足りないようだな』

『どうするのよ？』

訊ねる浮帆。祐介の意識が自分に向けられていることに気付き、
『ボク？』

自分を指さす。

『ああ。こっちで火の玉をイメージするから、お前はそれが爆発するのを頼む』

『頼むって言われても、ボク、爆発なんて知らないよ!』

『何でもいい。ダイナマイトでも何でもかまわないから、爆発するモノを連想してろ! 来るぞ!』

炎が消えると、切っ先を向け迫ってくる鎧武者の姿があった。

「行くぞ!」

『行くぞって、ちょっと待って——もう! どうなっても知らないから!』

右手に集いし魔力の火球に、浮帆のイメージが重なる。

『「行けえ——ッ!」』

先程と見た目変わらぬ火球が鎧武者に迫る。

陽光を反射し、妖しく光る刀の一筋——

「なっ!」

弾き返された火球はそのまま遙か上空へと上っていく。

「おい! 着弾と同時に爆発するようにしなかったのか!」

『そんなの聞いてないよ!』

心の中で叫び返す浮帆。

「チッ——」

意志疎通が上手くいっていない。

「ひとまず、上空のアレを消してくれ。そしたら、次の魔法に移る」
「分かってるって!」

パチンツと浮帆が指を弾くと、それに併せて上空に浮いている火の玉が大きく膨らみ、大輪を咲かせるように弾けた。

「花火!」

校庭を初め、校舎やグラウンドに居る生徒達が空を見上げている。本来の花火と違い魔法のそれは、昼過ぎの明るい空にも関わらず、極彩色雅な光の乱舞を魅せる。

「何で花火なんだよ——」

『だって、あれが一番イメージしやすかったんだから』

「ったく。次は、ボクが威力の方をイメージするから、浮帆は炎の方を頼む」

吐き捨てるように洩らす。

それでも、魔法の威力からして勝てる見込みの確信は得た。
だが、

『駄目だよ』

両手を広げて、浮帆が祐介の意識の前に立ちふさがる。

『さっきので、魔力を消費しすぎたの。同じように使つと、今日一日での回復できる許容範囲を超えるわ』

内包している魔力はまだまだ十二分にあるが、来るべく『魔』との再戦の時、万全な状況でいたい。

「なら、どうする？ 肉弾戦で行こうにも、あの刀はやばいぞ」

『むう』

腕を組み考え込む浮帆。辺りを探れば、口を半開きのまま自分達を見つめている剣道部、演劇部の面々が視界に入る。そして、先程の花火で注目を集めたのか、校舎の至る所から視線を感じた。

何か浮かんだのか、浮帆は人差し指を立てて聞く。

『祐さんって、剣使えるよね？』

「昔、時代劇のエキストラで簡単な殺陣を做った事ならあるけど…」

…」

それが何かと気配で問う。

『そこに転がっている剣を一本借りようと思って』

「借りる？」

眉を顰める。

「演劇用の模造品だろ？ 真剣相手じゃ、斬られるがオチだぞ」

事実、甘奈の使っていた剣が転がっていた。

『魔力で強化すれば良いんだよ。それくらいの制御なら、今のボクでも十分できるから、祐さんは悪霊を倒す事だけ考えて』

「そう言うのもアリなのか？」

『それが魔法よ』

やれやれと嘆息し、足下に転がっている剣の一本を蹴り上げ掴む。
魔力の隠った剣は、白銀の煌めきをまとう。

『何でもアリだな』

心の中で愚痴る。

祐介の振るう剣と鎧武者の刀がぶつかり合い、甲高い音と共に燐光と火花を散らす。

幾度も重なる二つの刃。

戦国時代を戦っていた者の怨霊だけあって、太刀筋に隙がない。それでも、祐介は善戦してる方だった。

ふわりと翻るスカート。ワントンポ遅れて宙を舞う髪の毛。夏の残り香に汗が飛び散る。身体を返しながら、

「強いな——」

一步、間合いを離れる。

『でも、祐さんもちゃんと戦ってるじゃない』

「今は——な」

短く答え、荒い呼吸で大きく前後に膨らむ胸を見下ろす。

「さすがに身体が重くなってきた……」

呼吸を整えようと深く息をするが、疲弊した体力は簡単には回復しない。命のやり取りと言うギリギリの緊張に、浮帆の体力は急激に消耗していく。逆に、怨霊である鎧武者には体力が切れるという事が無かった。

満足に休む間もなく襲ってくる鎧武者。

甲高い音が校庭に響き渡る中、少しずつだが剣振る腕が遅くなっていた。

「……ここまでみたいですね」

手を貸そうかと歩み出す藤乃だが、不意に背後から腕を掴まれた。

「冬華様？」

「先生？」

いつの間にか現れた冬華の存在に、藤乃の隣で座り込んでいる甘奈も気付く。

「大丈夫、甘奈さん？」

「あつ、はい。まだ、足が立たないんですけど……」

鎧武者の発する殺気に当てられ、今も彼女の足は小刻みに震え、立つことが出来そうにない。

「しばらくは座っていなさい。もうすぐ終わるから」

冬華は藤乃に向き直し、

「手を貸したら駄目よ。そうじゃないと、二人の訓練にならないからね」

大きなレンズの下で瞳を軽く眇め、口元に楽しげな笑みを浮かべる。

「いいのですか？ 『魔』 よりかは弱いとしても、訓練相手にしては今のお二人では荷が重すぎるようですが」

「あの二人なら大丈夫よ」

キッパリと言い切ってみせる冬華。

「……二人？」

二人の会話に怪訝に眉を顰めながら、校庭の中心で繰り広げられる戦いへと目を向ける。

その双眸の黒い瞳には、鎧武者相手にする悪友の『瀬野浮帆』の姿しか映っていないかった。

2 - 12 : ゲリラ的

「そろそろ、勝負を決めないとやばいな」

『そうね』

間合いを取るように離れる。

「剣に魔力を込める事が出来るなら、魔法を掛ける事も出来るのか？」

『魔法を？ それくらいならできるけど……』

スケートボードに飛翔魔法を掛けて登下校している浮帆にとって、物に魔法を掛ける事は馴れている。

「じゃあ、剣を燃やすぞ——」

『よく分からないけど、分かったわ』

考えるだけのゆとりがないのか、あっさりと祐介のイメージに同調する浮帆。剣がまとっていた白銀の揺らめきが赤みを帯び——限りなく透明な炎を形成する。

火炎をまとった剣を水平に顔の横に構える祐介。乱れた呼吸を無視するように息を止める。

雰囲気の変化に気づくだけの知性が無いのか、変わらず剣を振りながら迫ってくる鎧武者。

残る体力の一滴すらも使い切るかのように、速く、そして力強く踏み込む。

カッシャーン！

乾いた音を発てて転がる刀と両の小手。

鎧武者の肘の部分を焼き切った返す刃で、髑髏の脳天から一刀両断してみせた。

クルリと踵を返し、長い髪を振る。

二つに割れながらも、隙だらけの祐介の背中めがけて迫ってくる

鎧武者。

「消えな」

小さくこぼれる呟き。

次の瞬間、鎧武者は切断面から燃え上がった炎に包まれ、炭と化した。

ニヤリ――

その外見には似合わない口元をつり上げた笑み。握っていた剣はいつの間にか炎が消え、指から滑るように地面に落ちた。

そして、

『祐さん！？』

心の中で叫ぶ浮帆の声を遠くに聞きながら、祐介の意識は闇へと落ちた。

崩れるように倒れ込む浮帆の体。

「よいしょつと」

それを受け止めたのは冬華だった。

「ご苦労様」

『祐さんは？』

「緊張の糸が切れただけよ。しばらくすれば目を覚ますわ」

小声で応え、冬華は藤乃の手を借りて浮帆の体を休める場所へと運ぶ。

「冬華先生」

呼び止めたのは演劇部の部長の娘だ。

「今のは何だったんですか？」

「あれは……」

困ったように開いている手で頭を掻き、

「文化祭の出し物の訓練……私と浮帆さんと藤乃さんとで有志を募ってやるアクション――ってコトにでもしておいてくれる？」

曖昧な言葉で誤魔化す。

「はあ……」

解ったような解らないような。

「出し物ってコトは、本番もちゃんとやるんですか？」

剣道部部長の質問に、冬華は少し考えるように視線を泳がし、

「そうね。いつやるかは断言できないけど、ゲリラ的に文化祭の日程のどこかで行うわ」

悪戯っぽくほくそ笑む。

2 - 13 : さきゆばす

「うわあつ！ 寝過ごした！！」

築二十年の古びたアパートを飛び出してきたのは、よれよれのス
ーツを着込んだ祐介だった。

朝とも昼とも解らない白い街並みをひた走る。

『ねえ、何処に行くの？』

「何処つて、これから会社の面接があるんだよ」

唐突に聞こえてくる質問に、疑問を抱くことなく答える祐介。

『面接なんて受けてどうするの？』

「どうするつて、就職したいからに決まっているだろ」

『よろず屋は？』

「あれはバイトだ、バイト。俺は元々平穩を好むんだよ。あんな波
乱に富んだ仕事は趣味じゃない」

腕時計を見れば、揺れている上に文字盤のガラスが反射して時間
がはつきりとは読みとれないが、かなり遅れている。

一段と速度を増す祐介だが、

『久保冬華はどうするの？』

その質問に足が鈍る。

「どうするつて、冬華はただの知り合いだ」

『恋人なんですよ？』

「『だった』だ。過去形だ」

言い直す。氣にくわないのか、口調がぞんざいだ。

『でも、好きなんですよ？』

「嫌いじゃないだけだ」

『素直じゃないね。まあ、どっちにしろ、その姿じゃ女性と付き合
うことも出来ないわね』

「へっ？」

内股に舞い込む突然の涼風に氣を取られ、躓き転ぶ祐介。見下ろ

した自分の姿は――

「何だよ、これ!？」

いつの間にかセーラー服に変わっていた。よくよく見れば、体つきもごんまりしている。横のシヨウウィンドウに映された姿は『瀬野浮帆』だった。

「何なんだよ!？」

今一度絶叫する。その声は可愛らしい。

『駄目よ、祐ちゃん。女の子がそんながさつな言葉遣いしたら』

「み、瑞穂さん？」

ニコニコと佇む瑞穂の姿に、思わず尻餅をついたまま後ずさる。

『あら、あら。制服が汚れてるわね』

楽しげに微笑んでいるように見えるのだが、糸目の向こうに何か嫌なモノを感じ取る。

『これに着替えましょ』

そう言っ取り出したのは、テニスウェアだった。それも、今着ているセーラー服のスカートよりも丈の短いような。

「あ、瑞穂さん!？」

逃げるように後ずさる祐介だが、壁に背中が当たり、それ以上離れることができない。

『あら、気に入らなかったかしら？　じゃあ、これなんてどう？』

テニスウェアがキャミソールに替わる。

嫌々と首を横に振る祐介。

『それなら、これらなんてどうかしら？』

フリルのあしらわれた少女趣味の服から、大人の魅力を際立たせる様なチャイナドレス、レースクイーンのマイクロミニのワンピースに純白のナース服――色々な服が次々と出てくる。何故かその中にはレオタードや水着まであった。

「ちょ、ちよつと待って下さい！　俺、男なんですから!！」

『でも、今は女の子じゃない』

「うっ……」

薄桃色のウエディングドレスを手に迫ってくる瑞穂。

『それに、元に戻った後も魔法で女の子にしてあげるわ』

「結構です!!」

叫ぶ声が高い。

『そう？ 深層心理では違うみたいだけど』

瑞穂が横を見る。その視線の先を追えば、シヨウウィンドウに映り込む女性の姿――

今の祐介である浮帆の姿とは違った自分と同世代の――冬華とは違う――大人の魅力を持った理想的な美女だ。

「なっ!？」

唖然と目を見開き近づく祐介。ガラスの女性もまた近づいてくる。

「これが俺の願望だと言うのか？」

『夢は心が反映される世界なの』

「嘘だ、嘘だ!!」

頭を目一杯横に振る。長い髪の毛がざんばらに舞う。

『そう、ウソよ』

「へっ!？」

アツケラカンとした声に、振り返れば瑞穂が悪戯っぽく微笑んでいる。

『今のは単なる冗談。あれは、あなたが理想に描く女性像よ』

パチンと指を鳴らしたかと思うと、ガラスに映る姿は元の男の姿に戻っていた。

「お前……誰だ？」

訝る。瑞穂と思っていたが違う。

ニコツと微笑みながら、糸目だった瞳を大きく開いていく。それにつられ、その容姿が若返っていく。年の頃は、自分よりも少し若いぐらい――浮帆似の――彼女よりも少し年上。

何処かで見たとような……

『じゃあ、付き合って』

唐突な言葉に、思考が付いていけない。

「何を言ってるんだ？」

『冬華先輩と結婚する気はないんでしょ。だったら、あたしと付き合ってくれてもいいじゃない』

「先輩……」

険しげに眉を顰める。何か思い出しそうだ。

『付き合ってくれるなら、あたしがちゃんと祐介先輩の体を取り戻してあげるわよ』

「祐介先輩って……お前、もしかして瀬野か？」

大学時代、冬華の周りにまとり付いていた後輩の娘が思い出された。

『あつ、覚えていてくれたんだ』

声が弾む。感激しているようだ。

「瀬野がどうして？」

『楽帆でいいわよ』

言う言葉がコケティッシュに笑う。

「楽帆って、浮帆の……」

『そう、姉よ。気付いてなかったの？』

先輩後輩と言った間柄だが強い面識のあった相手でもなく、名字はかろうじて思い出したが、名前までは覚えていなかった。

「確か、イギリスに留学しているんじゃない？」

『母校の学園祭に合わせて帰国してきても不思議じゃないじゃない』
機内のヴィジョンが一瞬垣間見えた。たぶん、楽帆が今乗っている飛行機だろう。

『明日の昼頃に日本に着くから、瑞穂さんに伝えておいてくれないかな？』

「それはいいが、母校ってなんだ？」

『あれ？ 冬華先輩に聞いてなかったっけ？ 藤華女子の後輩だって』

遠い昔、大学のキャンパスでそう紹介された覚えがあった。

『それより、さっきの話どうかな？』

「本当に戻せれるのか？」

『あたしの手に掛かれればお茶の子さいさい屁の河童よ。奪われた先輩の体を奪い返してもいいし、何ならホムンクルスの技術で先輩の新しい体を作つてそっちに移つてもらう方法もあるわ。一番手っ取り早いのが、今の体を先輩のモノに変えてしまふんだけど、それをする浮ちゃんが困るから』

「できるのか？」

『あつたりまえ。浮ちゃんと違って、あたしの魔法は多彩で凄いだから。先輩は大船にでも乗つてゆつくりとしてくれればいいわよ』
突き立てた人差し指に淡い煌めきが灯る。

『あつ、ただし、ただじゃないわよ』

指先光る人差し指を回しながら微笑む笑顔は、かつての恋人が何かを企む時に見せるものとよく似ていた。

一抹の不安を背筋に感じながら、

「何をすればいいんだ？ 金なら無いぞ」

『ぷっぷっぷ。誰も、貧乏人からお金を取つたりはしないわよ』

口元を押さえてケラケラと笑い出す。その仕草は、姉妹だけあつて浮帆と同じだ。

「それで何なんだよ？」

訪ねる言葉が荒い。

『さつき言つたじゃない。付き合つて』

「付き合うだけでいいのか？」

若干の不安を感じるが、男に戻るならそれぐらい安いモノだ。なんなら、速攻で別れるようにし向ければいい。

鬼畜な事を考える祐介の思考を読んだかのように、不意に楽帆の笑顔がニヤリと歪む。

『結婚を前提としたお付き合いよ。それも、約束を破られないように呪で縛らせて貰うけど』

「えっ……」

今しばらく結婚する気は無い祐介にとって、その条件は飲みがた

い。それに、今回の出来事で今まで以上に平穏な生活を望むようになった祐介にとって、魔女との婚姻なんて酷すぎる。

『ゆっくりとは言えないけど、明日までに答えを出しといてね。たぶん、明日の午後にはそっちに着くと思うから』

そう言い残すと、楽帆の姿は煌めきをまといながらホワイトアウトした。

一人、白い世界に立ち竦む祐介。

「……………俺の女難の相って、まだまだ続くのか？」

項垂れる彼の呟きに応える者は誰もいなかった。

2 - 14 : 倒錯

「うつ、う……ん」

気怠そうに開いた目は、眼前にある眼鏡越しの円らな瞳と合う。

「あつ」

寝転がる自分の上に馬乗りのようにいる冬華。怪訝に思いながら、祐介が自分へと伸ばしている彼女の手の先へと視線を動かせば、胸の膨らみの上でブラウスのボタンを外してる両手が見えた。

「……………」

気まずさが空間を支配する中、文化祭の準備をしている生徒達の喧噪がやけに遠くに聞こえる。既に、陽が傾いているのか、窓から差し込む西日は赤い。

「なあ」

固まったままの冬華に呼びかける。

「何か、酷く倒錯的な気分になるんだが」

「なっ、なっ、なっ！？ わ、わた、わたしはただ、クラスの娘達が、困って、衣装合わせで、甘奈さんので、脱がせてくれって頼まれて……………」

上擦らせた声で慌てて説明を始めるが、支離滅裂でつじつまが繋がらない。

『クス、クス、クス』

心の中で鈴の転がるような笑い声が響く。

『先生は、甘奈の衣装合わせをしたいから、祐さんが間違えて着た服を脱がすようにみんなに頼まれたのよ』

一人冷静な浮帆が、口元を押さえて笑いながら教えてくれた。

少し考え、祐介は冬華から視線を逸らすように横を向き、握り拳を口元に添えながら、

「痛くしないでね」

ぽつと頬を赤く染めた。

力尽きるように祐介の胸に俯せる冬華。開かれた胸元にレンズが当たって冷たさが伝わる。

「お、おい！ 本気なのか！？」

一瞬、マジで襲われるのかと狼狽する祐介に、

「くだらない冗談は止めてよね。その顔でそう言う真似されると、嫌な事思い出すじゃない」

力無くそう呟くと、冬華は祐介の上からどいた。

「私にはレズの気は無いんだから！」

無然と言い放つと、ベットから離れる。

「嫌な思い出つて何だ？」

『さあ……』

心の中で浮帆が小首を傾げてみせた。

ベットを仕切るカーテンを閉め、ベットの脇で着替え始める祐介。そこで始めて自分が保健室に運び込まれたことに気付く。保険医の姿はなく、今そこにいるのは祐介とカーテンの向こうで冬華と何か相談をしている藤乃の三人だった。

さすがに数度目の着替えともなると照れが無くなったのか、着ていたウエイトレスのメイド服を脱ぐ。

「冬華」

カーテンの向こうにいる冬華に呼びかける。

「脱いだけど、着替えは？」

カーテンの隙間から差し込まれた紙袋を手取る。代わりに今脱いだばかりのメイド服を手渡した。

「何か、完全に着せ替え人形に化してきてるな」

『文化祭だからね。いつもなら、体育の授業でも無い限り学校で着替える事なんて無いんだから』

やれやれと嘆息し紙袋を開ける——その手が止まった。

『どうしたの？』

覗き込む浮帆。彼女も中身を知らなかったのか、頭を捻っている。袋から出てきたのは、一丁の銃。それもSF映画に出てくるよう

な、引き金を引くと緑色のレーザーが出そうな。その下からは、白いタイツにプロテクターの付いたエナメル質のピンクのかなり際どいワンピース。

「おい、冬華。これは何だ？」

カーテンを開いた先には藤乃の姿しかなかった。

「どうかなされましたか？」

やんわりと訊ねる藤乃。祐介の隣に置かれたバイザーに、自分の持ってきたそれが特撮に出てくる様なヒロインのコスチュームだと気付く。

「冬華は？」

「先生なら、七屋敷様のお脱ぎになられた装束を持って、教室の方へとお戻りになれましたが」

「ちっ、逃げたな」

舌打ちする祐介。

『ねえ、祐さん。この際何でもいいから、早く着替えてくれないかな？』

さすがに自分の体が下着姿でいることに抵抗をみせる浮帆。そのまま彼女は窓の外を指さした。

『いくら女子校と言っても、覗く娘もいるんだから』

その向こうには、大工道具片手に窓にへばり付いている一年の集団がいた。

体中真っ赤にしてカーテンを閉める祐介。

「九石」

カーテンの隙間から顔だけを出す。

「何です？」

「何で着替えの衣装が特撮ヒロインなんだ？ 浮帆の制服はどうしたんだ？」

もつともな疑問を口にする。

「浮帆さんの制服でしたら、クラスメートの方々が練習で沸かした珈琲をこぼしたとかでクリーニングに出しているそうです。そちら

は、冬華様が代わりにと用意した物ですわ」

文化祭と言うことで変わった衣装には事欠かないが…… よりにもよって、特撮ヒロインのコスチュームである事に、理不尽な、それも悪意の籠もった天の意志を感じる。

魔女がいて、魔物が跋扈する世の中だ。仮に悪戯好きな女神がいてもおかしくないのかも知れない。

げに恐ろしきは女の園が……

見当違いな感想を抱く祐介。

「冬華のヤツ、もう少しましな衣装を見つけてきてくれればいいのに……」

愚痴ったところでそれ以外に着る物が無い。

さすがに下着姿で居続けることも出来ず、仕方なく首を通す。

2 - 15 : 楽帆

「私、あんまりそう言う方面に詳しくないんですが……正義の味方ですね」

胸の前に手を併せ、困ったように視線を泳がす藤乃に、

『藤乃、それってあんましフォローになってない』

浮帆が心の中から力無く突っ込む。

付ける必要もないのに何故かバイザーまで付けている祐介は、保健室の中にあつた鏡の前でやけくそ気味にポーズを取っていた。

「あら、似合ってるわね」

クスクスと笑って入ってきたのは冬華だ。

「クラスの娘達には話を付けてきてあるから、今日の所は帰る？」

「帰るって、この格好でか？」

文化祭の学内をいる分には問題ないが、さすがに街中を歩くには恥ずかしすぎる。

「それもそうね。何なら車で送る？ 母さんに借りてくるけど」

ビクツと、藤乃や浮帆にまでわかるように大きく跳ね上がり、後ずさる祐介。

『どうしたの？』

『車は嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ……』

不思議そうに訊ねる浮帆だが、伝わってくるのは強い拒絶の感情。嫌そうな顔してるわね」

「あつたり前だろ！！」

荒げて叫ぶ。

ムスツと冬華は唇を尖らす。

「いいわよ別に。でも、その体で家まで帰れるつもり？」

トンツと軽く額を人差し指で押すと、崩れるように膝が折れ尻餅をつく。

キョトンと見上げる祐介。全快までにはほど遠いのか、全然体に

力が入らない。

「そう言うことだから、諦めて乗っていきなさい」
返す言葉も出ない。

「それに、早く回復させないとやばいわよ」

声のトーンを落とす冬華。顔つきが真剣なものに変わっていた。

「どう言うことだ、それ？」

「さつき、視たんだけど……明日、来るわね」

「そうか」

重い腰を上げ、立ち上がる。

「最悪、あいつの手を借りるしかないのか……」

現状では、全く勝てる気がしない。脳裏に夢であつた楽帆の姿が浮かぶ。

あれだけ自信ありげに言い切つたのだ、手を借りれば勝てるのだろ。ただ、条件が飲めない。

「どうしたの？ それに、あいつって？」

「瀬野だよ。夢の中であいつに会ってきたんだ」

「瀬野さんって浮帆さん？」

『ボクがどうかしたの？』

外と内で同時に訊いてくる。

「半分正解で半分外れだ」

「半分って——まさか!？」

冬華の傾げた首の上の頭がハツとする。

「あいつもここの卒業生なんだってな。文化祭に合わせて帰ってくるって言うていたぞ。それで、手を貸そうかとも言われた」

「駄目。それは駄目よ!!」

顔面蒼白にして叫ぶ冬華。

「あの娘、浮帆さん以上に不確定要素が強いんだから、下手に干渉されたら私の見つけた未来が崩れる」

「未来が崩れる？」

訝るが、冬華は両手で顔を押さえブツブツ呟いているだけで答え

ようとはしない。

「……文化祭……合わせて……今日か、明日………電車……飛行機を………爆弾………」

そんな担任を斜に見ながら、

『ねえ。誰のコトを言ってるの?』

蚊帳の外にいた浮帆が訪ねてくる。

「んっ? ああ。お前の姉のことだよ。確か、楽帆とか言ったよな?」

『姉さん!?』

さすがに驚く。

『どうして、祐さんが姉さんを知ってるの?』

「どうやら、大学の後輩のようだ」

ポリポリポリと頬を掻きながら、思い出す。

「大学の時に冬華に紹介されたことがあるんだよ」

横目で冬華を見、

「高校の後輩で藤華女子の卒業生だったな。何回か会話したこともあるし飲みに行ったこともあるが……まさか、瀬野が浮帆の姉とは思っても寄らなかった」

瀬野って名字で呼んでいたから気付かなかったが、今考えてみれば、冬華が彼女のことを『楽帆』と呼んでいるのを聞いた覚えがあった。「その楽帆様にはなんと言われたんですか?」

いっちょやってる冬華を後目に、藤乃と浮帆の二人に夢の中での話を掻い摘んで説明してやる。

「結婚ですか……」

遠い目をして、ぼつと頬を赤らめる藤乃。彼女とは対照的に、浮帆は冷めた笑みを浮かべてみせた。

『姉さんらしいね』

「らしい?」

『あの人、力の強い人に惹かれやすいの。たぶん、冬華先生と仲が良かったのも、冬華先生の力に気付いていたからじゃないかな?』

「それで、次はボクってか？ 大学時代は、そんなそぶりも見なかったぞ」

それ以前に、冬華の隣で親の敵を見るような視線を向けられていた覚えがあった。

『たぶん、その当時は祐さんの力が覚醒してなかったからじゃないかな？』

こぼれた記憶が浮帆に伝わる。

『だから、大学時代の姉さんの興味の対象は、冬華先生に向いていたのよ』

「そう言うことね」

まだまだ続く女難の相に一抹の不安を感じる。

「それで瀬野は強いのか？」

夢の中での口振りでは、かなり強そうだった。

『魔力自体はママ達よりも少し劣るけど、探求心の強い人で色々魔法のことを勉強しているうちに、今じゃ日本にいる魔女の中でもトップクラスの技術力をもっているはず。それに、イギリス留学も本場での魔女修行が目的だから、今だとどれくらいの魔法を使えるか想像もつかないわ』

一度言葉を句切り、大きく息を吐くと、

『一つだけ確実に言えることがあるわ』

「何だ？」

「100%負ける勝負をペテン一つでうやむやに勝ちを取ってしまうような娘よ」

答えは別の位置から返ってきた。

『冬華先生？』

そこには、少しやり切れない顔をした冬華が立っていた。

「楽帆と結婚する気はないんでしょ？」

レンズに光が反射しているのか、見下ろすその瞳が見えない。

「結構可愛い娘だから、結婚してもいいか——」

冗談交じりの言葉を飲み込む。西日が射し込み、まだまだ残暑を

感じさせる空気が冷たく感じられた。

「冗談だよ、冗談。せっかく自由になれそうなのに、わざわざ別の蜘蛛の巣に引っ掛かりに行くバカがいるか」

揶揄して言う。

「むう。賭の期限はまだ残っていることを忘れないでよね」

口調は拗ねているようだが、

『?』

浮帆には、その口元に見える不遜な笑みが気になった。

「へいへい。それよりも、何かまた眠たくなってきたぞ……」

回復しきれていないのか、猛烈な眠気が襲ってくる。

「もう。送っていつてあげるから、車までは起きてなさい」

「目を覚ましたら、あの世なんて無しだからな」

ポカッ――

後頭部を軽く小突かれた。

『先生、ボクの体を殴らないで下さいよ』

「あつ、ごめんなさい。つい、いつものクセで」

悪びれた様子を見せない冬華。

「それで、藤乃さんはどうする？ クラスの方も大方の準備が終わっていたから解散していたわよ」

教室に残っていたのは準備を担当している数人のみで、ウェイトレスのグループに入れられている藤乃にとって残る必要はなかった。

「先に寮に帰る？」

二人とも女子高の隣に併設されている寮暮らしだ。

「それでしたら、少し連れて行って欲しい所があるのですが、かまいませんか？」

少し考えるように押し黙ると、おずおずとそう頼む藤乃だった。

「ふ、冬華様！！ 堪忍ですう！ もう少しゆっくりと走って下さいい——ッ！」

左右から掛かる強烈なGに必至に耐え、涙ながらに訴えるのは藤乃。運転席では、聞く耳持たないかのように前だけを睨み付けてハンドルを切る冬華がいた。

急カーブの続く山道を冬華が操る軽は、その小柄な車体から信じられない程の高速で車輪をドリフトさせながら疾走している。

今、彼女達是要山を走っていた。

街灯すらない夜の道、左右から繁る鬱蒼とした木々に星明かりは遮られ、背後には息を詰まらせる程の闇が迫る。

少しだけ開けた空間を、思いつ切り後輪を滑らせながら停車する車。

「着いたわよ」

ふうーっと一息抜いて扉を開ける冬華。高地だけあって涼しい風が頬を撫でる。

付けっぱなしのライトが照らす先には、古い鳥居が一つと、山中へと更に続く石階段があった。

「冬華様——」

生い茂る木々の隙間から射し込む淡い月光に照らされた藤乃の巫女装束が、不思議な神秘さを醸し出す。ただ、助手席から降りてくる彼女の足取りはよれよれとおぼつかない。

「お願いですから、運転はもう少し静かにして下さいまし。寿命が縮まりましたわ」

「静かに？」

口元に人差し指をあてがい、小首を傾げる冬華。黒づくめの冬華の姿は周りに溶け込んでいた。

「長距離運転するのって、久しぶりだったから少し荒かったかしら

？」

「少しじゃなくて、大変もの凄かったですわ」

「そうなの？　どうも運転していると集中しちゃっているから、周りが見えないのよね」

上手いとは思っていない冬華だが、下手すぎるとも思っておらず、本人にしてみれば普通に安全運転しているつもりだ。

「それより、こんな山奥に何の用なの？　藤姫の一族の里って、山の向こうなんですよ？」

「刀を取りに来たのです。夕刻の戦いを見て、少しでも手助けになればと」

鳥居をくぐり、上る石階段は所々崩れている。

「刀って、どんな？」

「久遠と対をなす御神刀——玉響です」

石階段を上り終えた先には、小さな社が鎮座する。深々と一度頭を下げ、戸を開ける。そこにはひと振りの白木の鞘の刀があった。月下の元で抜く刃が煌めく。数百年の時を放置され続けていたとは思えないほど、それには曇り一つ無い。

「凄い力を感じるんだけど……」

感じ取る力は久遠をも上回る。

でも、逆にそうなってくると、

「使えるの？」

疑問を口にする冬華。

大きすぎる力は逆に振り回される事に繋がり、戦いの場では意味を成さない。

鞘に戻し、首を横に振る。

「あいにく私の力では使いこなすことは適いません。ですが、七屋敷様なら可能かと」

「祐介——ね」

悪霊相手の立ち振る舞いを見る限り、刀自体を操れない事は無さそうだ。

「昔から器用なところのあるヒトだから妖しく微笑む。」

クルリと身体を返し、

「さあ、帰りましょ。明日も早いんだから」

冬華は車を止めている下に向かって階段を下り始める。それとは逆に、後ずさる藤乃。

涼風が吹き抜ける中、じんわりと汗ばむ。

「どうしたの？」

怪訝そうに訊ねる冬華。一步彼女が歩み寄ると、藤乃は後ずさる。

「えっ、あつ……まだ、里の方に用事がありまして——これからそちらの方に行こうかと」

「用事？」

「はい。少し、調べたいことがありまして」

「ふーん」

キーホルダーを摘んで車の鍵を回す。チリーンとした金属音が、静寂の山に響く。

「歩いてつて、こんな時間帯に女の子一人山の中を歩かせるわけには行かないわね」

教育者らしい考え。里のある方向の山を見て、

「ついでだから送っていつて上げるわ」

他意の無い親切心なのは藤乃にもわかる。

でも、冬華の車には乗りたくない。

「あつ、大丈夫です。この山は、獣道まで全て把握していますので逃げるように慌てて山の方へと駆け出す。生い茂る木の中に入ると、一度振り返り、

「明日の昼過ぎには学校の方に戻りますので、お願いします」

ペコリと頭を下げ、山の中へと消えていった。

ポリポリと鍵の先端で頭を搔き、

「さてと、私は私で次の準備に入りますか……ね」
車に乗り込む。

2 - 17 : 見据える先

「こんばんは」

閉店間際の夢見鶏に現れた姪に、閉店準備としてテーブルを拭いていたマスターがその手を休めた。

カウンターには一人のお客が、柄の長いスプーンでパフェをつついている。年の頃は冬華と同じくらいの髪の長い女性だ。スーツ姿からして、会社帰りのOLのように見える。

「マスター。ミルクティーお願い」

「ラストオーダーは終わってる。欲しければ、自分で煎れる」

仕方なくカウンターの奥へと向かう冬華。既に火を落としているため紅茶は諦め、氷を入れたグラスにオレンジジュースを注ぐ。

ストロー突き立てカウンターに置くと、先にいたお客の隣のスツールに腰掛ける。

「これ、境のヤツが仕事で駆けずり回っているから代わりに冬さんにつて」

脇に置いてあったハンドバックからお札の束を取り出す女性。

「ありがと、さいりさん」

彼女の名前は九宝院さいり。よろず屋に所属している荒事裏仕事担当の凄腕の退魔師だ。

「何が起こっているか詳しくは知らないけど……姫の封印が解けたんでしょ？　かなり騒がしくなってるわよ」

パフェをぱくつく。

藤姫の身に封じられていた『魔』は一体だけではない。かなりの数の魔物封じられており、解き放たれたそれらのほとんどは街の闇に潜んでいる。

そして、それらに呼応するように籐華町の至る所で魑魅魍魎の類が活発化していた。丁度、昨日の鎧武者の怨霊と同じように。

「手を貸さなくてもいいのかしら？　何なら境も連れてくるけど」

「あつ、いいわ」

ストローでジュースをかき混ぜると、中で触れ合う氷が澄んだ音を奏でた。

「さいりさん達の手を煩わせるほどの相手じゃないから」

「ふーん」

物言いたげな瞳を向けるが、さいりは何も訊ねない。

「頑張つてね」

最後の一口を食べると空の器の隣に代金を置き、まだ仕事が残っているからと店を後にした。

「一体、祐介のヤツに何をやらせているんだ？」

「ん？ 別に。ただ、みんなで幸せになる方法を探しているだけよ」
ほくそ笑み、ストローに口を付ける。

半分ほど飲むと、思い出したように一枚のチケットを置く。

「何だ？」

「ウチの学校の学園祭よ。小枝ちゃんに渡しといて。中学終わったら遊びにでもおいでって言うておいてくれないかな」

「別にかまわないが……」

ジロツとチケットを睨むマスター。

「小枝まで巻き込む気なのか？」

困ったように頬をつり上げ、

「小枝ちゃんの身の安全だけは約束するわ」

眼鏡の下で瞳を細め、そう答えてみせた。

2 - 17 : 見据える先 (後書き)

これにて二章終了――

三章目以降の分割が済んでいないので、次話はしばし時間が掛かります (分量にして残すは1/3ってところかな?)

3 - 1 : お祭り

「やっぱり、恥ずかしいな」

早朝の教室。鏡に映るウエイトレス姿を見て、気難しそうに顔を歪めている女子高生が一人――瀬野浮帆コト祐介だ。

『昨日着ていたじゃない』

『昨日は昨日』

衣装合わせでは甘奈のを間違えて着ていた為、足首まであるスカートの裾に恥ずかしさはさほど感じなかった。

「何が悲しくて、こんな短いスカートはいて媚びなきゃならないんだか……」

裾をつまみ上げ、がつくりと頂垂れる『浮帆』に、杏奈が声を掛けてきた。

「そんなに短いかな？ 駅前のファミレスの方がもつと短いよ」

自分のはいているスカートの丈を見下ろしながら言う。

どうも、愚痴が聞こえたらしい。

「十分短いですよ」

杏奈と違い仁美も恥ずかしそうにしている。

「集客率UPを目的に選んだコスチュームだからね」

「でも、生徒達の女性客ならまだしも、一般客には男性もいますからね。さすがに恥ずかしいです」

「うだうだ言ってもしょうがないっしょ。ミニを選んだのは仁美自身なんだから」

一人、ロングスカートをはいている甘奈は平然としていた。

「確かにそうですけど……実際に男性に見られると思うと」

はぁーっとため息をつく仁美。ちらりと横目を向ける。

「何？」

仁美の視線に戸惑う祐介。

「いえ。こう言う時は、浮帆さんが羨ましいな――って」

「羨ましい？　ボクが？」

心の中では浮帆も不思議そうにしている。

「だって……一般客の相手なんてする暇無いと思うから」

「暇が無いって？」

「決まってるじゃない。後輩連中がほかっておかないってコト。記憶無くしているから忘れているかも知ないけど、あんたってば後輩に慕われているんだから」

甘奈があっさりと言い放つ。

「浮帆さんにはファンが多いですからね」

「ファン？」

予想の付かない言葉に小首を捻り心に問う。

『ファンってどう言うことだ？』

『どう言うことも何も……何故か後輩の娘に人気あるのよね』

頭の後ろで手を組む浮帆。

魔法を使った試験のヤマ占いが原因でファンができていていると思っ
ている浮帆だが、実際の所は自由気ままにスケートボードを操る活
発さに占いという神秘さが加わった事だ。

「ちつつち。情報が遅いね、甘奈」

杏奈が突き立てた人差し指を横に振って、話に割り込んでくる。

「昨日のあれで浮帆のファンが増えたみたいね。後輩以外にも三年
の先輩達の間でもファンが出来たって話よ」

「あれって、本当に文化祭の出し物なの？」

現場にいた甘奈にしてみれば、昨日の魑魅魍魎はどうしても文化
祭でのアトラクションなどと言った陳腐な代物には思えなかった。

「出し物ってコトにしておいてくれないかしら」

文化祭前の見回りにやってきた冬華。

「仁美さん。藤乃さん、実家の方に用事とかで今日は遅れるって連
絡入ったから宜しくね」

「あっ、はい」

委員長としての仁美が頷く。ローテーションでは彼女たちのグル

ープは朝一番で正午までのウエイトレスを担当しているのだが、転校してきたばかりの藤乃は元々数には入っていなかったので、これと言った問題は無かった。

「せんせー、せんせー！ アトラクションの方はいつやるんです？」
目を輝かせて訊ねる杏奈に、

「予定では、今日の午後にも行うから、興味があったら見に来てね」

ウィンク一つ、別の生徒達の元に向かう。その際、

「あっ、浮帆さん。担当が終わったら私のお店の方に顔出してね」
一言残していく。

「お店ってなんだ？」

「冬華先生のやってる占いの館よ。籐華って、生徒だけじゃなくて先生も出し物をしないとイケないのよ」

「ふーん」

去っていく冬華の背を見つめながら、心で漏らす。

「あいつ、現役ん時から同じことばかりしてるな」

祐介は高校生時代に籐華女子の生徒と付き合っていた友人に誘われて文化祭に遊びに来たことがあった。その時、占いの館をやっていた冬華と初めて出会ったのだ。

その時、冬華は祐介の顔を見て言った。

——キミ、面白い星の下にいるのね——

眼鏡を掛けていない瞳を細め、

——色々な騒動に巻き込まれるけど、安心して。私でよければ導いてあげるから——

屈託のない笑顔で悪戯っぽくそう続けた。

「導かれた結果がこれか」

ポツリとこぼす。

「どうかしたの？」

「あっ、いや。冬華との腐れ縁が続いていると思ってな」

濁す祐介に小首を傾げながらも、浮帆は話題を変える。

『ねえ、祐さん。藤乃の用事ってなんだと思う？』

『たぶん、対『魔』用の武器でも探しているんじゃないのか？』

希望的観測を込めた予想を口にした。

昨日の戦いで消費した魔力も全快してはいるが、今のままじゃ『魔』に勝てる可能性は薄い。それこそ、途方もない幸運でも味方すれば話は別だが。

（ついでだから、後で占って貰おうかな……）

そんな弱気なことを考える祐介の今週の運勢は、いまだ女難の相が続いている。

そして、冬華の導きによって自分たちの『縁』と言う糸が複雑に絡まっていることに気付いてはいなかった。

『うきほあー。開店するよ』

思考の海から祐介を引つ張り上げたのは、クラスメートのそんな一声だった。

開店と共に開けられたドアからお客が入ってくる。まだ一般客がやってくるには時間があるのか、客の大半が生徒で他には先生が混じっているくらいだ。

『あつ、いらつしゃいませ』

あいさつ一つ、お客を出迎える。

『三名様ですね。こちらへどうぞ』

ハキハキとした動作で、三人1グループの生徒を席へと案内する。注文を取り、奥の机と暗幕で作り上げた厨房へと伝える。その一連の動作には無駄がない。

『祐さん、凄く手慣れていない？』

心の中で感心する浮帆に祐介は少し考え、

『駅前の商店街にある夢見鶏って喫茶店知ってるか？』

『知ってるも何も、冬華先生の叔父さんのお店でしょ』

『あそこでウェイターのバイトしていた事があるんだよ』

『バイト？ ちよくちよく学校帰りに杏奈達と寄っているけど、見たこと無いよ』

夢見鶏は彼女たちグループの行きつけの店の一つだった。

『そりゃ、高校に入ってからだろ？俺がバイトしていたのは大学時代だからお前らが小中学生の頃だ』

自分の身体にいるためについてい忘れがちだが、祐介は大学卒業している二十代後半の『オジサン』だった。

新しくやってきた女子生徒に気付き、入り口に向かう。

お盆を両手で抱え、元気良くあいさつし頭を下げる祐介。ニッコリ微笑む仕草は、営業用なれど何処か人を寄せ付ける。思わず頬を赤らめるのは、憧れの『浮帆』を慕うファンの娘達だった。

テキパキと、それでいて颯爽に優雅な風と共にお客をさばくその様は、見ている誰もが心地よい。

そんな祐介に、浮帆は心の中で突っ込んだ。

『今の祐さんってば、ボク以上に少女らしくない？』

「んっ？」

仕事の手を止める祐介に、浮帆の爆弾発言が続いた。

『どんだん女の子演じるの慣れてきているよ』

「うっ……」

頬杖ついて見据える浮帆のジト目に狼狽える。『浮帆』を演じるように刷り込まれた瑞穂の暗示は既にほとんど消えているのだが、女性の身体で動いている内に自然と少女の役割が身に染みていた。

つつい無意識に行う女らしさを振り切るように、

「まあいい。これもそれも、今日までなんだから！」

素早く立ち直る祐介。

「ねえ、何が今日までなの？」

「決まってるだろ、俺が浮帆である事だ——」

言い切りかけて、質問が浮帆からじゃない事に気付く。いつの間隣にやってきた杏奈が、興味津々と見つめていた。

「ねえ、『俺』ってなんなの？」

先日掛けられた瑞穂の術は解け、ついつい元の自分を知っている相手との会話になると、『俺』に戻ってしまう祐介。

「もしかして、記憶喪失と関係あるの？」

「えっ？ あっ……うっ」

問われたところで答えようがない。何とか誤魔化せないものかと逃げ道を探す祐介の耳に、

「ちよつと、お客様。困ります！」

仁美の非難の声が聞こえた。目を向ければ、他校の男子高校生が仁美の腕を掴んでいた。

これ幸いと杏奈の追及の手から逃れるようにそちらへと向かう。

「ねえ、いいだろ。この後さ、俺達に校内を案内してくれないか？」

見た感じいい男の分類に入る容姿だが、あまりに性格がナンパすぎる。止めに入ろうとする甘奈を制し、彼らの元へと歩み寄る祐介。「お客様、こちらは喫茶店でございます。ナンパの場でもなければ恋人斡旋場でもありませんわ。ましてや、キャバクラではありませんん」

冷静に——冷たいほどに冷やかな声音で話しかける。

そんな祐介に気付いたのか、男達の興味が仁美から『浮帆』に移る。ただ、仁美を掴んだ腕はそのままだ。

「おや、もしかして妬いているのかい？」

睨み付けるが意にも返していないようだ。

「キミも可愛いね」

「えっ？」

面と向かれて言われたことのない褒め言葉に、思わず頬が熱くなる。借り物の身体とはいえ、ついつい過剰反応してしまう。

「おっ、顔なんて赤くしちゃって。キミも満更でもないようだね」

ニヤリとほくそ笑む男。

「特に、このこぶりのお尻なんて、無茶苦茶俺の好みで可愛いよ」「ひゃん」

いきなりの感触に跳ね上がる。

なおも触ってくる不快な感覚に、

プチッ——

浮帆は、祐介の心の中で何かが切れる音を耳にした。

『コロス!』

そんな感情が浮帆に伝わってくる。

『祐さん?』

『痴漢は乙女の敵だ』

訊ねる浮帆に、キツパリとした怒りが返ってきた。

『いつから乙女になったのよ……』

そう漏らしてみるが、浮帆にとっても自分の身体がこねくり回されては気持ちいいものでもない。祐介の行動を止める気はなかった。『ずうーつとウエイトレスしている訳じゃないんだろ? もしよかつたらキミも一緒に文化祭を回らな——ギヤアツ!』

悲鳴を上げて座っていた席から落ちる男子校生。尻を撫でていた手首を掴み上げ、祐介は容易く男の関節を極めていた。

悲鳴を上げながら崩れ落ちた相方に、仁美の腕を掴んでいた男が動いた。

『キャツ』

仁美を解き放ち、勢いよく迫ってくる男。浮帆は逃げるでもなくその腕を取り、クルリと綺麗に弧を描き背中から投げ落とす。幸い、先に腕を決められた男が下敷きになり、致命傷にはならなかったが、二人ともお互いに強く背中を打ち付けていた。

基礎的な格闘術に護衛術、護身術は、かつて身辺警護の仕事で組んだ格闘の達人に手ほどきを受けたことがある祐介。か弱い『浮帆』の身体では、空手などの『剛』な技は使えないが、合気道と言った『柔』な技なら十二分に使いこなせた。

うめき声を上げながら立ち上がるうとする男達。

二人を見据え、

『いい。今度、ウチでこんな真似したら、コロスわよ』

こぼれ漏れる祐介の殺意に浮帆が内側から魔力を込めた。その絶対的な威圧感に、集まっていた客達の間を掻き分けて逃げていく二人組。

「フンッ」

埃を払うように、白い手袋をはめた手を叩く。

それが合図になったかのように、一斉に教室に居合わせたお客の生徒達から歓声が上がった。

「キヤア♪ 浮帆センパイ！」

「素敵よ、浮帆様!!」

「お姉さま。あたしの為に自らの貞操を守るなんて、感激です!」
ちよっといっちゃってるファンの娘達からの黄色い声に、心の中で引きつる浮帆。無事に自分が戻った時のことを考えると、後が恐い。

「祐さん。ついでだから、あの娘達も抹殺してくれる?」

「退学覚悟ならやるけど」

「イジワル」

ムツと頬を膨らます。午後からの『魔』との立ち回りを考えると、理不尽なまでに自分の平穏な日常が無くなっていくのを強く感じる浮帆だった。

3 - 2 : 不思議の国

「杏奈さん！ 三番テーブルの注文を聞いてきて！」

「甘奈、それ九番じゃなくて七番テーブルの紅茶よ！！」

「ちよつと浮帆、その娘達飲み終わっているなら追い出してよ！」

普通では考えられない怒声じみたやりとりが響きながらも、何とか回転する喫茶店。

浮帆がナンパ男を撤退させた話は、尾鰭背びれに胸鰭に、ついでに足に手を付け角を生やしながら校内を駆け回り、噂を聞きつけた生徒達で2 - Aの教室はごった返していた。

「申し訳有りませんが、飲み終えたのなら退出をお願いします」

「そんな、お姉さまは私に出て行けって言っんですか？」

うるうると目を輝かせる女子高生に、祐介はげんなり気味に肩を落とし、既に何十回目かわからない台詞を口にする。

「嫌うわよ」

ニコツと笑う。

一瞬、石のように固まる一年生。上目遣いの瞳に目一杯涙を浮かべ、

「嫌わないで下さい、先輩！」

「はいはい。嫌わないから、今日の所は出ていってくれる？」

抱きついてくる娘を投げやり気味に諭す。

「はい！ 今すぐに」

名残惜しそうに後れ髪引つ張られるように店を出ていく一年の娘。空いた席にはすぐに別の生徒が腰掛け、これまた熱い眼差しを浮帆に向けている。

『何か……女子校ってこういう世界か？』

『たっはっはっは……幻滅した？』

『いや』

返ってきた否定の言葉に、おやっと小首を傾げる浮帆。

『期待通り、ユリの花咲く禁断の園だ』

『なっ！？ ボクはノーマルよ！』

顔を真っ赤にして叫ぶ。

『冗談だよ、冗談。それより、後どれくらいで交代なんだ？』

メイド服に着替える時、腕時計は外しているし、壁の時計も店内の雰囲気合わないと言う理由で暗幕で仕切られた奥へと押し込まれていた。

『さあ？ 誰かに聞いてみれば？』

『それもそうだな』

手近にいた杏奈を掴まえて訊ねる。

「交代時間？ 確か、後十分ほどだよ」

何も見ずに答える杏奈。

「後十分ね……」

小さく嘆息し、ウエイトレスの仕事に戻ろうとする祐介。その背中に、

「貸し一つね」

「貸し？」

何のことかと振り返る。

「あんたのおかげで三割増しでハードになったんだから、今度、夢見鶏で奢ってよ」

三割も何も、まだ初日の最初のローテーションで客の入りの基準がないのだが、それを突っ込めるだけの気力は祐介にはなかった。

（まあ、いいか。どうせ、奢るのは浮帆だし……）

奢る頃には自分は『瀬野浮帆』じゃないことを考える祐介だったが、その心の片隅では、

（夢見鶏なら祐さんのツケが利きそだから、奢るくらいいいか）

文化祭の終わった後には、元の『瀬野浮帆』に戻っているはずの浮帆がそう決めつけていた。

「あつ、あたしにも奢ってよ」

話を聞きつけた甘奈が耳打ちして去っていく。三人娘の内一人、

仁美だけはナンパから助けられたこともあつてか、何も言っていない。

忙しすぎる仕事に没頭するあまり十分という時間はあつと言う間に過ぎ去り、やってきた次のローテーションのウエイトレスに仕事を引き継ぐ四人。

最後の注文に手間取った祐介は一人遅れて教室を出る。ウエイトレスの衣装であるメイド服から制服に着替えるべく、二階で準備室兼更衣室として扱われている2・Gの教室へと向かうその途中、廊下で待っていた仁美が近寄ってきた。

「浮帆さん。もしよかったら、この後、一緒に回りませんか？」

彼女の頬が上気しているのが単なる仕事疲れと決めつけるには、あまりにもその眼差しが熱い。

対処に困り、思わず退ける祐介。

『予想通りか……』

浮帆が頭痛げに漏らす。

仕事の忙しさと、話しかけてくるお客との対応に集中するあまり祐介は気付かなかったが、浮帆は仁美をナンパから助けて以来、自分に向ける眼差しの変化に気付いていた。

そのことで祐介に早めに逃げることを促そうと考えていた矢先に、先んじて捕まってしまったのだ。

「えーっと……冬華——先生に呼び出されているから」

逃げる手段に、朝に言われた冬華の呼び出しを使う祐介。

「じゃあ、一緒に……」

「あっ、浮帆先輩！ 休憩時間でしたら一緒に回りませんか！」
浮帆の存在に気付いた娘達が呼びかけてきた。

「ごめん。用事、あるから——」

脱兎の如く逃げる祐介。着替えることは出来そうになかった。

」

「……彼もあなたのことをちゃんと見ているわよ」

涼しげな笑みで卦を言うのは、進路指導室を占いの館に改造した冬華だった。彼女の姿は、普段の黒をベースにした洋服とは違い、白衣と緋袴といった巫女姿だ。

「本当に、本当ですか、先生？」

信じ切れないのか、不安げに訊ねる女子生徒。

「ええ。十一月の終わりに彼の誕生日が来るでしょ？ その時に、マフラーをプレゼントしなさい。喜ぶわよ」

まるで結果を視てきたかのような占いに、女子生徒はコクリと頷いた。

「わかりました、先生。頑張ってみます！」

ニツコリ微笑む冬華。彼女にポケットから取り出した、文化祭で流通している金券を支払う。

生徒が出ていくのと入れ替わるように入ってきたのは、籐華女子とは違う制服を着た少女——小枝だった。

「やつほお、冬華お姉ちゃん、遊びに来たよ」

「あら？ 来たわね——って、その頭なに？」

メガネの下の瞳をまん丸にする冬華。従妹の女子中学生の頭には、何故かウサ耳が付いていた。

「あつ、これ？ 途中で立ち寄った的当てゲームで参加賞として貰ったの。似合うでしょ」

無邪気に笑う。記念品と言っただけあつてか、生徒のお手製みたいだがそこそこ出来が良い。

「丁度良かったわ、小枝ちゃん。ちょっとお使い頼めるかしら？ お礼に金券上げるから」

繁盛しているのか、金庫代わりの箱には代金として受け取った金券が貯まっていた。

「お使いって何するの？」

「ちよつとね。途方に暮れているはずのアリスを連れてきて欲しい

の

「遠くを一瞥し、冬華はクスリと微笑んだ。

3 - 3 : 一応は

世間の喧騒を遠くに、蓋の閉じた便座上に腰掛ける祐介。短いスカートの上には、たこ焼きやら焼きそばやらが多数ある。

「なあ」

『なに？』

「なんで、こんな所でフランクフルトを食べなきゃならないんだ」
カラシの付いたソーセージを頬張りながら愚痴る。嫌いじゃないが、食事を摂るにはトイレといった空間はあまりに空しすぎる。

祐介の持つているジャンクフードの数々は、ここまでたどり着く道中で無理矢理奢られた戦利品だ。始めに奢られたのは、浮帆を慕う一年生の出し物でやっていたたこ焼きだった。丁度昼時で腹も空いていたこともあり、あまり考えずにそれを受け取ったのが運の尽き、一人受け取ったものだから、次から次へと断ることも出来ず、その全てを受け取ったらこうなった。

まだまだ続く食料品関連の出店に、それ以上進むのはさすがにやばいと感じ、一時避難にこのトイレに逃げ込んだのだ。

「元の姿でこれだけ慕われるなら多少は嬉しいが……借り物の姿で慕われてもな」

これから来るべく本番——『魔』との決戦前に力が尽きる。

「お前、魔法の実験と称して生徒に惚れ薬でも嗅がせたんじゃないだろうな」

『姉さんじゃないんだから、そんなコトしないわよ』

憮然と言い放つ。

「姉さん——か」

楽帆のことを考えると、頭が更に痛くなってきた。

『結婚するの？』

「まさか。俺はまだ独りが好いんだよ。せめて、三十越えるまでは結婚なんて考える気はない」

イカ焼きのイカを噛み切りながら、キツパリと言い切った。

串系の食べ物を食べ尽くし、たこ焼きとお好み焼き等のパック物を残したところで、『浮帆』の胃袋は一杯になっていた。

「これって、トイレに流したらまずいよな」

『当たり前でしょ。捨てるくらいなら、冬華先生にでも上げれば？』

「それもそうだけど、冬華のヤツ、どこにいるんだよ？」

大量に食い物を獲得した背景には、冬華の出店の位置がわからずに校舎中をさまよっていたこともあった。

『第二も第三にもいなかったから、たぶん、第一か第四校舎ね。まさか、講堂や部室長屋にいても思えないし……』

考え込んでいると、ドアがノックされた音がした。

「あの、そこに瀬野浮帆さんって方いますか？」

「居ません」

即答する祐介。

『祐さん？』

『どうせまたお前の追っかけだろ』

浮帆のファンが押し掛けて来たものと考え、他人の居留守を決め込む。

「本当に瀬野さんじゃないんですね」

「そうよ」

少し間が空き、

「冬華お姉ちゃんが呼んでますよ」

続けた少女の言葉に注意が向く。冬華の名を出されては応えない他ない。

『出た方が良さそう——どうしたの、祐さん？』

考え込む祐介を怪訝そうに見る。

「もしかして……小枝ちゃんかい？」

「あっはい。そうですけど、どうしてわかるんですか？」

扉を開けた先には、見知った女子中学生が不思議そうに佇んでいた。

「あつ、いや。冬華先生に聞いたことあるから」

曖昧に誤魔化し、

「悪かったわね。ボクがその『瀬野浮帆』よ」

素直に名乗った。

小枝の案内で校舎を進む祐介。心の中で浮帆が訊ねる。

『あの娘、祐さんの知り合いなの？』

『冬華の従妹で夢見鶏のマスターの一人娘の風見小枝。中三のはずだ』

そう言ってみるが、妹と接する少女の頭の位置が自分と同じ目線の高さにあることに、祐介は今更ながらに強い違和感を感じた。

『ふーん。冬華先生のね』

不思議そうに眺める先では、小枝のウサ耳がヒョコヒョコと揺れている。

「クスッ」

周りの騒ぎ声に紛れて小枝の笑いが聞こえ、正体を覚られないように『瀬野浮帆』としての口調で訊く。

「どうしたの？」

「あつ、いえ。冬華お姉ちゃんが、瀬野さんのことをアリスって言うていたものだから」

小枝は、頭上のウサ耳を指さしてケラケラと楽しげに笑う。

「アリス？」

一瞬考え込むが、すぐに言葉の符丁に気付く。ワンピースの色こそ違うが、エプロンドレスを身につけ、ウサギの小枝の後を、不思議の国と化した校内をさまよう様は、確かにアリスなのかも知れない。

小枝の案内でやってきたのは、まだ回っていない第一校舎だった。昼の休憩時間でも取っているのか、客の入っていない占いの館へと入る。

「お姉ちゃん、連れてきたよ」

「ありがとう、小枝ちゃん。これ、お礼だから」

小枝に金券を渡すと、遅れて入ってきた祐介の方を見やる。

「遅かったわね」

「先に食事を取っていたんだよ」

残っていた焼きそばやらをテーブルの上に置く。

「それより、その格好は？」

出迎えた冬華の巫女姿に訝る。

「これ？ 藤乃さんに頼んで借りたのよ。本物の巫女装束は作りが
しつかりしているのね。パーティグッズとかで売っているのとは全
然違うわ」

クルリと回ると緋袴の裾がフワリと舞う。

「ねえ、似合うでしょう？」

「えっ、あ……うん」

見慣れぬ姿に思わず頷く。その頬が赤い。

「ちゃんと、あなたの分も借りてきてあるから安心して」

冬華の指さす、準備室として改造した進路指導室の奥には、桐の
箱があった。

「んなっ！？ 俺も着るのか？」

「決まってるじゃない。ここで占いの手伝いして貰う約束なんだか
ら」

「何だよ、それ？」

『あっ』

心の内で浮帆のこぼれた声が重なる。

尋常ならざる状況にすっかりと忘れていたが、浮帆は冬華と約束
していた。文化祭初日の休憩時間に冬華の店を手伝うと。その事を
祐介に伝える。

「俺を呼んだのって、まさか店を手伝わせるためなのか？」

まさかと思いながらも、そう訊ねずにはおれない。

「そうよ」

冬華の返事はあっさりとしていた。

「浮帆さんとの約束だけど、今の浮帆さんはあなただからね、祐介」

「おい、おい、マジかよ。緊急事態なんだぞ！」

「あら。学生の本分は学業でしょ。文化祭もちゃんとした学校の授業よ」

何か言い返そうとする祐介だが、自分を凝視する視線に気付き言葉を飲む。

円らな瞳を半眼気味にして睨むのは、自分たちをここまで連れてきた小枝だった。

「何、小え——」

「あつ！ 祐介お兄ちゃんだ！？」

小枝は指さして、『瀬野浮帆』の中身の正体を看破する。

「お姉ちゃん、これってどう言うことなの？ どうして瀬野さんの中にお兄ちゃんがいるの？」

冬華に訊ねる小枝を横目に心の中で不思議そうにしている浮帆に、祐介の嘆息交じりの心が伝わってきた。

『冬華と同じで、この娘も靈感が強いんだよ』

『じゃあ、ボクもわかるのかな？』

普通に取り憑いている幽霊とは違い、祐介の心の中に居る状態の今の浮帆を関知する事は普通じゃ出来ない。それなりに力のある者なら、辛うじて浮帆の『声』を聞くのがやっとだ。

「ええーつと、あなたが瀬野さんですよ？ さっきから、不思議な『声』が聞こえていたんですけど、瀬野さんだったんですね」

不思議体験には慣れているのか、あつさりとしたものだ。

「霊の感知能力は私よりも優れているからね」

祐介に着替えるように言い放つと、冬華は小枝に事の真相を掻い摘んで説明した。その間、祐介はしぶしぶながらも指導室の奥で巫女装束に着替え始める。よろず屋の仕事で着物を着て行っ仕事もあつたので、一人で何とか着付けはできたが、いまいちきちんとなっているのかわからない。

「これでいいのか？」

「あら、似合ってるじゃない。このまま神社で働けるわね」

悪戯心交じりの冬華に、

『ボクは魔女なんですよ』

浮帆が素っ気なく答えた。

「お兄ちゃん。瀬野さんの身体になって二日目なんだよね？」

前までやってきてじいーつと見つめてくる小枝の視線に居心地の悪さを感じる祐介。

「お兄ちゃんのスケベ」

グサツと言葉が突き刺さる。

少しだけ本質を突いた批判に、狼狽えながらも言い訳を試みる。

「ちよつと待て。冬華に聞いただろ。こうしないと俺達は『魔』に殺されるかも知れないってことに」

「でも、それで女子高生の身体なんて、イヤらしい」

睨む小枝の瞳に避難の色が見える。

「小枝ちゃん」

冬華が呼びかける。その声が異様に弾んでいた。

「祐介のこと、幻滅した？」

一瞬の逡巡も見せずに、答えを見出す。

「うっん。だって、あたしのためにお兄ちゃんは成仏しないで生き残っているモン。女性の身体にいるのは嫌だけど、『魔』を倒せばちゃんと元の身体に戻るんでしょ？ だったら、何の問題ないよ」

えっへっへと抱きついてくる。いつもの身長差なら妹として扱えるが、よく似た高さのため途方にくれる祐介。チツとした冬華の舌打ちが聞こえた。

『強いね、この娘』

そんなひいた感想が心の内から届く。

「それじゃあ、祐介が『魔』を倒すのに手を貸してくれるわね」
「いいよ」

即答に待ったをかける祐介。

「冬華、彼女まで巻き込む気かなのか!？」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。お姉ちゃんがこう言ってくるってこと」

は、あたしの手が必要だってことでしょ？ それに、あたしは別にお姉ちゃんに頼まれたんじゃないやなくて、お兄ちゃんだから手を貸してあげたいの」

『冬華先生と小枝ちゃんって、仲悪いの？』

「いや、仲はいいよ」

そう言われるが、端から見ている分にはよくわからない浮帆だった。

「それより、冬華。どうしても小枝ちゃんの助けがいるのか？」

現金な従妹に冬華は微苦笑を浮かべながら、

「この娘の方が探知能力に長けているのよ」

予見能力は冬華の方が優れているが、『現在』を感じるのは小枝の方に分がある。『魔』の様な異質な存在が近付いてくれば、すぐにわかる。

「私も可能な限りの『未来』を視ているつもりだけど、これだけ人が多いと不確定要素が多くなって全てをフォロワー仕切れないのよ。最悪、出遅れて関係ない人まで巻き込まれたらやばいじゃない」

目を向けるのは廊下の向こうの校庭。部活やクラス以外にも少数での有志による参加まで許しているためか、色々な出店やら出し物が所狭しに見える。冬華の占いの館は『閉店中』と札を置いてあるから客は来ないが、学校内にかなりの人がいるのかかなり騒がしい。

「こういう時、小枝ちゃんはどうってつけな人材なのよ」

使えるモノは何でも使うといった感のある冬華。そんな元恋人に、祐介は何かを感じ取った。

「なあ、冬華。お前、どこまで読み取っているんだ？」

クスリとほくそ笑むその仕草に、自分以上に魔女らしく見えると思った浮帆。

「ハッピーエンドよ、一応はね。でも」

口元に指を添え、虚空を見上げる。

「楽帆さんが引っかけ回さなければいいんだけど」

続けた言葉は苦々しかった。

」

「クッション——」

可愛らしくしゃみが響いたのは、空港を出たところ。むず痒い鼻を押さえて、タクシー乗り場を探す一人の女性。焦げ茶色のロングスカートにセーター。帽子をすっぽりかぶったその下の黒髪は真っ直ぐに垂れ、地面にすれそうなほど長い。手に持った革製のトランクからして、海外からの帰りと言ったところか……

ただ、トランクと一緒に持たれた柄の長いほうきが不思議さを醸し出す。

タクシー乗り場に並ぶ行列を見て、げんなり気味に肩を落とす。隣のバス停は、タイミング悪く丁度いま最寄りの駅に向かうバスが出ていった。

大きく息を吐くと、物陰に隠れる。持っていたほうきを水平に向けて、腰の位置でそれは浮かぶ。

「よつと」

少しだけ手で押し下げ横向きに腰掛ける、斜めに揃えた足は地面に着いてはない。

「さてと、帰りますか。懐かしの我が母校に」

トンツとつま先を立てて地面を軽く蹴ると、一息に雲の上まで浮かび上がる。

燦々とした秋の日差しを身に受け、

「待っててね、祐介センパイ♪」

空港から飛び立つどの飛行機よりも速い速度で彼女は飛翔した。

3 - 4 : アトラクション

一般客が多くなった昼過ぎ――

毎年占いの館をやっている冬華の店は、良く当たるって噂も相まって年々客の入りが増えていき、待ち客の列がかなりの長さをしていた。

その全てを一人で捌く冬華。教師仲間で有志を募っているから他にも占いする先生はいるのだが、休憩時間に入っていてその場にはいない。

あまりの忙しさに冬華は祐介にも占いをさせようとしたが、浮帆自身ならまだしも、祐介じゃ満足に行えない上に魔力の消費も激しく、少しでも魔力を温存するために、もっぱらお客の整理に動いていた。

そんな繁盛する占いの館をよそに、小枝は校内をさまよっていた。始めは祐介と一緒に冬華の元に居ようかとも考えたが、祐介が『七屋敷祐介』じゃないことで面白味に欠ける上にあまりの客の入りに圧倒され、その場を逃げるように何かあつたら携帯で連絡すると約束し、彼女は気ままに遊んでいた。

ぴよこ、ぴよこことウサ耳を揺らしながら、面白そうな出し物を見つけては首を突っ込む。従姉の所から貰ってきた金券が多数有り財力には困りはしない。

お面を頭に引っかけ、両手に普通の風船に水風船。綿飴を食べている辺りは、もしかして一番文化祭を楽しんでいる存在なのかも知れない。

背負ったデイパックにはゲームのブースで獲得したぬいぐるみが顔を出している。

「「キャッ」」

キョロキョロと物色しながら歩くため、誰かとぶつかった。重なった悲鳴からして女性なのはわかる。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

そこには、尻餅をついたバンダナをかぶった少女——杏奈がいた。
「謝らなくていいわよ。こっちの方が悪いんだから」

そう言ったのは杏奈とは違い、隣にいる甘奈だった。制服姿の杏奈と違い、午後一で講堂の方で演じていた劇用の鎧姿のままである。
「ちよつと、甘奈！」

「前見て歩いていないあんたが悪いの」

非難の声を上げる杏奈を、ばつさりと切り捨てる甘奈。彼女たちと一緒に行動していた仁美が、小枝を見て小首を傾げる。

「あなた、もしかして夢見鶏の——確か、冬華先生の従姉妹じゃないかしら」

行きつけの夢見鶏で顔を何度か見ている。

「あつ、はい。そうですね……ウチのお店の常連の方ですね」
何となく小枝にも覚えがあつた。

「私たちは冬華先生の教え子なのよ」

「あつ、そうなんですか。冬華お姉ちゃんの従妹で風見小枝って言います。よろしく願いますね」

素直なその行動は好感を持てる。そんな小枝をジロジロと見渡し、
「あのクマさんマスターの娘さんよね？ 全然お父さんと違うじゃない」

「杏奈！」

持っていたイミテーションの剣の柄で頭を小突く。

「何するのよ！」

「あんたは一言多いんだよ！」

言い争う二人に、

「いいですよ。あたしも時たま本当に血が繋がっているか疑う時があるから」

ケラケラと楽しげに笑う。

二、三冬華の話題で会話を交わす四人。ふと思い出のように、甘奈が口にする。

「冬華先生って言えば、いつアトラクションを實行する気なのかな？」

祐介達と『魔』の戦いを文化祭の出し物だと聞かされている甘奈は、昨日の練習で巻き込まれた身としては本番も見たい。

「アトラクション？ 占いの館なら、あっちの校舎でやってましたよ」

指さす先は第一校舎だ。

「ああ、そうじゃなくて。先生が、浮帆と藤乃——ウチのクラスの娘二人と組んで、アクション系のパフォーマンズをするって話なの」
その話で、『魔』との戦いだと言うことに気付く小枝。
「それでしたら——」

ゾクッ——

——とした悪寒に言葉を飲む。振り返れば遙か廊下の向こうを横切る人影が見えた。

ポケットから携帯電話を取り出し番号をプッシュする。突然の行為に戸惑う三人の女子高生に、

「アトラクションでしたら、始まるみたいですよ」

冬華ばりの含んだ笑みをみせた。

」

「浮帆さん。お客さん、来たわよ」

順番整理をしていた祐介に、携帯電話を耳にあてた冬華が言う。
「今、校庭の方に向かって——」

聞き終わらぬ内に祐介は駆けだした。巫女装束に着替えた際に一緒に用意されていた下駄の足音が廊下に響き渡る。

正直走り難いが、靴に替える暇がない。校庭へと出られる渡り廊下まで向かうのももどかしく、開いていた窓から軽やかに飛び出す。

長い黒髪と一緒にフワリと舞う白衣の袖。

突然現れた巫女に驚く生徒達だったが、巫女の正体が『瀬野浮帆』だと気付くとそれは消え、逆に歓声上がる。

昨日の悪霊退治がいい宣伝になり、学校中に伝わっていた。

何が何だかわかっていないのは外来の一般客。それでも、何かが始まるのはわかるのか、黙って見守る。

そんな野次馬達など眼中にないかのように目を配る。注意深く見渡す視線が一点に止まった。

『どう言うことなんだよ、あれは！？』

『分かんないよ』

心の中で低く唸る祐介に、浮帆は首を横に振る。二人が見据える先には、人混みに混じって禍々しい気配を放つ人が一人。

奪われた祐介の身体をした『魔』と思いきや、それは白銀の髪なびかせた着物姿の女性。ただ、文化祭に違和感無く溶け込む、頭上から突き出た三角の獣耳は確かに『魔』のそれだった。

祐介の視線に気付いたのか、『魔』の周りにいた人たちが離れ、女性の存在が際だつ。

「俺の身体の後には別人のを奪い取ったのか……」

訝るが腑に落ちない。今の『魔』の姿は見覚えがあった。つい最近……何処かで。

『しかし美人ね』

なにげに漏らした浮帆の呟きに、祐介はその姿の正体に思い至る。

「思い出した」

ポロツとこぼれる。

『祐さんわかったの？』

「あれ、俺だ」

『へっ？』

キョトンとする。祐介の生身を見たのは、『魔』と以前戦った時とその朝に道ばたでぶつかった時の二度だ。ハッキリとは覚えていないが、女装したところでああも綺麗に化けられるはずがない。第

「一、身長は元より骨格自体が違うのだ。」

「あの姿、俺が理想としている女性像なんだよ」

銀髪を黒髪に変えれば、『魔』の姿は夢の中で楽帆の魔法で化かされた時の自分の姿だった。

「どう言うことなんだ、一体!？」

「むさい姿だったから、姿を写させて貰ったんだよ」

凜とした声音が耳元で響く。

「なっ!？」

咄嗟に身を捻るその空間を、鋭い爪をした『魔』の手刀が過ぎる。間合いを取るように後ずさる。

一瞬にして迫ってきたのか、『魔』はそこにいた。

「祐介とやらは理想が高いとみえる。雅やかでいい姿だろ」

毅然と言い放ち、白銀の髪を払う仕草が艶やかでむかつくほど美しい。禍々しい気配が無ければ、口説いていたかも知れない。

「祐さんってああ言うのがタイプなの？」

「悪かったな。でも、外見だけだ。内面は必要以上に俺を束縛しないタイプが理想だ」

「それって、浮気を許せてコト？」

軽蔑の眼差しを向ける浮帆。軽口でも言っていないと、『魔』から発せられる気に飲み込まれそうだ。

「違う。ベタベタしたのが苦手なんだよ——っ」

身を返す。

今さっき、祐介の立っていた空間を突風が駆け抜けた。振り下ろされた『魔』の腕が、地面に穴を穿つ。

「ほう。少しはやるようだね」

切れ長の瞳を細める『魔』。対して、祐介自身は自らの動きに驚いていた。

「軽い。身体が異様に軽く感じる」

慣れない着物姿だがそれで動きが束縛されるわけでもない。ただ、靴の代わりの下駄が素早い動きを阻害しているはずなのに、それさ

えも感じさせない程の速さで祐介は『瀬野浮帆』の身体を操っていた。

間合いを取って身構える。よろず屋の仕事でかじった色々な格闘技の混じった我流な構えは、袴姿と相まって女流格闘家を連想させる。

「へえー、今日は衣装付きなんだ」

「巫女さんに猫耳美女ってコトは、コンセプトは悪霊退治か何かなのかな？」

特等席を陣取って二人を見ているのは、甘奈達だった。

「……お兄ちゃん」

固唾を飲んで見守る小枝。その隣で仁美は頬を紅く染め上げていた。

「浮帆さん……ステキ」

「仁美……」

「……あんた、真性？」

ぞわつと鳥肌立てて夢見る仁美から半歩離れる甘奈と杏奈。小枝は『瀬野浮帆』に違和感を感じた。

「あれ？」

その原因を探すよりも早く、ギャラリーからも声が上がる。

白昼の下、『瀬野浮帆』の身体から白く薄い輝きが炎のように揺らめいていた。

そして、それは祐介達にもわかっていた。

「何だ!？」

『わからない。でも』

戸惑いが伝わる。

『魔力の絶対量が増えてるみたいだから、その余波じゃないかな?』
浮帆自身、自分の身体の異変が理解できない。

かつての戦いで藤姫によって封印の一つが解かれ籐華町でも随一の力を手にした浮帆だが、今身体の内から感じる魔力はその十倍近くに膨れあがっている。

二人は気付いていないが、あふれ出た魔力が無意識下で『瀬野浮帆』の身体能力をも上げていた。

「魔力は上がっているんだよね？」

「うん」

「だったら、派手なのいくぞ！」

ぱつと広げた両の手のひらに魔力が集約する。

「威力のイメージ、頼む」

「任せて！」

振るった手から幾筋かの魔力光が放たれ、『魔』を襲う。映画でもない限り見られないような魔力の乱舞にギャラリから歓声が上がる。

「やったの？」

「駄目だ。まったく効いていない」

白煙晴れたその向こうには、砂埃一つ付けていない『魔』の姿があった。肘から下の腕が白銀の毛に覆われた獣化している。臨戦態勢に移ったと言うところか――

残暑が少しだけ残る九月終わり、嫌な汗が頬を伝う。

爆発的に魔力が増えたのに、祐介には勝てる見込みが全くしなかった。嫌な予感が付きまとう。

「気付いているか？」

「何？」

隙を見せないよう、『魔』を睨んだまま言う。

「『魔』の姿――俺達以外の連中にも見えていることに」

すっかりと失念していたが、『魔』は力の無い者には見えないことを思い出した。

本来なら、野次馬の視線は自分達だけに向けられる。なのに、先ほどから彼女たちの視線は二つに分かれていた。自分と――『魔』に。

「どう言うことだと思う？」

「幾つか考えられるけど、今はそれどころじゃないでしょ」

可能性としては、『魔』がわざと姿を現しているか……逆に姿を消せない状況になっているか。変質しているとは言え藤姫とは違う『七屋敷祐介』の身体が原因か、それとも力の加減か、『七屋敷祐介』の身体の中に残る神刀久遠の力が……

どちらにしろ、深く考察している暇はなかった。

『来るよ！』

刹那、間合いを詰めてくる『魔』。祐介も紙一重で反応する。

ヒトの反射速度を超えた戦いに、あんぐりと口を開ける野次馬達。

「冬華様！」

人垣の後ろで窺っていた冬華の元に、息を切らした藤乃がやってきた。白のベストにブラウスと言った他校の制服姿は、いつもの籐華女子なら目立つが今日は違った。手に握られている白木の鞘の日本刀さえも咎められないほどに……

「七屋敷様と浮帆様はどうですか？ 里の方で桔梗様が封印したと言う浮帆様の力を見つけ、封印を解いてきたのですが」

急激な魔力の上昇はそれだった。

「不味いわね」

言ってる言葉に反して、冬華は平然としている。

「祐介の身体を奪われたのが裏目に出ているわ」

校庭を所狭しと駆けずり回りながら戦う二人。時には飛翔魔法を組み合わせて校舎の壁を蹴り上がって空中戦すら行っている。

ハリウッド映画並のアクションに、ギャラー達からはいつしか声が消えていた。

息をもつかせぬ静寂の中、二人の足音が響く。

元の身体と浮帆の体との体格差にもなれ、昨日の怨霊退治で格闘感覚も掴んだ。魔力も全快以上で負けるはずないし、実際に祐介達が押している。

なのに、冬華は不安げだった。

放った魔力の一撃は、あっさりと『魔』の周りがかき消える。

「えっ！？」

「藤姫の血が邪魔してるのよ。浮帆さんの魔力を攻撃される度に吸収しているわ」

伝説に残る藤姫には力の強大さもさることながら一つの特性があったと伝えられる。周りの力を吸収すると言った特異なる能力。その特性があつたがこそ、姫は自らの身体に数々の魔物を封じ込めることができた。

ただ、その能力も代を重ねる毎に薄れ、姫の直系である藤乃の代にはほとんど消えていた。

隔世遺伝――

ややもすれば、自分以上に血が薄いはずの『七屋敷祐介』の身体は、姫と互角以上の特性を具現させていた。

姫の身体を使っていた時は、残っていた藤姫の残留思念がそれを止めていたが、魂の抜けた『七屋敷祐介』の身体を『魔』が操るのに束縛するモノは何もなかった。唯一、相反するはずだった神刀久遠の破片は、奇しくもその力ごと『七屋敷祐介』の身体に吸収されていた。

「『魔』は、浮帆さんの体を狙って現れたんじゃないわね」

顎に手をあてがい推測を口にした。

「え？」

「『魔』は浮帆さんの魔力を奪い取るためにやってきたのよ。祐介の体の持つ力に浮帆さんの魔力が合わされば、この町では最強の力を得たことにもなるからね。このまま戦い続けると、ますます『魔』が強くなるわ」

見上げた先には、空中に飛びながら戦う祐介と『魔』がいた。攻撃こそ仕掛けているが、それは祐介達に必要以上の魔力を放出させるような挑発的なものであった。

「どうにかならないんですか？」

「いくつか策もあるけど……」

視線を藤乃の腕に握られている刀に向ける。

「その御神刀なら『魔』だけを断つこともできるんでしょ？」

かつての戦いで、浮帆が藤姫に聞かされた話は教えられている。神刀久遠なら『魔』のみを斬ることができることを。

「でも、玉響の力をも吸収されるのでは？」

久遠の力をも吸収する今の『魔』なら、斬る前に玉響までをも吸収されかねない。

「やり方次第……なんだけど。よくわからないのよね」
気まづげに顔を歪める。

可能な限り、勝てる未来へと導いてきたつもりだが、どうやって勝つのかは解らない。

勝てるパターンは細かい枝葉を入れれば幾つかあるが、それらの大半で一致しているのは、玉響にて斬りつけると言った点だ。

こめかみを押さえ、片目を閉じる冬華。

「ハッキリ言えるのは、頃合いを見極めて逃げる——ぐらいね」

それもまた、彼女が視た未来の一つ。

許容ギリギリまで魔力を奪うと、『魔』はその場を逃げる気でいた。

「一応、校庭からは出られないように結界を張ったんだけど……どれくらい保つかどうか」

昨夜よろず屋で貰ってきたお札による結界だ。結界の外に出るには力が有れば有るほど難しいと言う代物だが、二つ危惧がある。『魔』が結界の力すらも吸収してしまう可能性——と、『魔』が結界を圧壊させるほどの力を内包している場合。

冬華自身、己の力で可能な限りの未来を視たが、それでも全ての選択肢を知っているわけではない。

それに何より、最大の不確定要素がまだ現れていないのだから……（間に合えばいいんだけど）

声に出さずに心で呟く。

あさつての空を見上げる冬華の不安げな表情は藤乃にはわからない。

「今回は協力的なのですな」

率直な感想だ。前回の時は、手を貸すと言っておきながら、結局は自分と祐介、浮帆を会わせたことだ。もっとも、それによってこんなおかしい状況になってしまっている。

「ま、あね」

ギクリと答える冬華の口元が引きつっていた。

「私も少しぐらいは手を貸さないと格好つかないじゃない」
視線を祐介達に戻し、

「幸せを勝ち得るためなら、協力は惜しまないわよ」
不遜に言い放つ。

3 - 5 : 参戦

膝を付くように着地した祐介。『魔』の指先から伸びる鋭い爪に、白衣と緋袴の至る所が切り裂かれ、白い肌が見える。所によつては、肌理の細かい肌が裂け、血を流している部分もある。

でも、致命傷はない。

まだ身体が動くのを確かめる。先日 of 鎧武者との戦い時には切れていた持久力も、魔力が補っていた。

「でつかいの行くぞ！」

『OK!!』

短期決戦を決める二人。両の手に金色の粒子が煌めき集う。見ている者の全てを魅了する魔力の輝き。

放たれた魔法は、陽光を反射し虹色に輝く。

多彩なるイリユージョンに、戦いを知らない観客達から歓声が立ち上る。

渦を巻いて迫ってくる光の螺旋。

クスリと微笑み、真正面からそれを受け止める『魔』。彼女の獣の手の内で、魔力の固まりは弾け、かき消える。

その余波で大気が大きく揺れた。

『魔』が吸収しきれなかった魔力の一欠片が祐介達を襲う。

避けようとするとする祐介だが、背後に集まっている人の気配にその動きを止めた。魔法で相殺しようとするそこへ、横から伸びてきた一本の影がそれを虚空へとはじき飛ばした。

蒼白い燐光をまとう太刀——神刀玉響。

「いたずらに攻撃しても無駄ですわ」

「九石!？」

玉響を構える藤乃。

「冬華様からの伝言です」

真つ直ぐに『魔』を見据えながら続ける。

「『魔』は浮帆様の魔力を吸収しています。このまま攻撃を続けても、『魔』を強くするだけです」

「吸収だと？」

言われて気付く。『魔』の戦いの違和感に……

身体を狙ってきたの戦いにしては精彩を欠き、どこか自分を挑発している。

『ボクの身体が狙いじゃないってコト？』

「はい。浮帆さんの魔力を吸収するだけ吸収したら、逃げますわ。

そうになると、もう二度とお二人の前に現れないかも知れません」

『魔』にしてみれば、力さえあればこうして戦う必然性はない。

『魔』の攻撃をかわしながら、校庭を駆け抜ける二人。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「解りません」

首を横に振る。

「ただ」

走りながら、その手に握られた玉響を差し出す。

「冬華様の予見では、この玉響で退治するとのことですよ」

「予見……ね」

渡そうとする玉響を押し戻す祐介。

『祐さん？』

「あいにくと、今の俺がそいつを持っても、何の役にも立たないだろう？」

藤姫の刀を使えるのはその血筋の者だけ。先の戦いで浮帆が使えたのは振るうことまでだ。その刀身にある力を解放したのは藤姫の意志があつての事。藤姫の助けがない状況で、『瀬野浮帆』の身である自分にそれが扱えるとは思えない。

「でも、私では玉響の力を制御し切れません——」

同時に二人の少女は長い黒髪をなびかせながら散開するように跳んだ。その間を『魔』の振り下ろされた腕が穴を穿つ。

「チッ！ 策を練ってる暇も無しってか」

魔力を奪おうとしてるのはわかったが、それで殺されないことは同意ではない。

避けると同時に魔法を放つ祐介。

爆煙晴れるその場には、平然と立っている『魔』がいた。

「一人じゃ無理か」

苛立たしげに吐き捨てる。どれだけの魔力を込めようが、浮帆と同調しない限り、魔法は威力を伴わない。いたずらに『魔』を強めるだけだ。

「御覚悟！」

玉響を水平に構え、『魔』へと襲いかかる藤乃。ズキツとした激痛が脇腹から伝う。『魔』の攻撃を避けた際に掠った傷だ。

ただでさえじゃじゃ馬な玉響に、痛みが邪魔して制御が甘くなる。それでも必死に抑え攻め込むのだが、

「無駄よ」

やすやすと受け止められた。

玉響の刀身を掴み、藤乃ごと無造作に振り回す。

「キヤアッ！」

玉響を放し、吹き飛ぶ藤乃。段ボール製のオブジェを突き抜けながら転がるその姿は、どこかで切ったのか頭から血が流れている。

滴り落ちた血がスカートに赤黒い染みを付けた。

他にも擦り傷激しく、綺麗だった白い肌が砂で汚れていた。

立ち上がるうとした際、流血にユラリと身体が揺れる。

そこへ、『魔』が放った閃光が迫ってくる。

「危ない！」

体の前に突き出した両の手に体中から力をかき集め、自分と背後の観客達を含めた全てを守るように防ぐ。

「クッ」

何とか防ぎきったが、急激な力の消耗に膝が折れる。クラツときた浮遊感。崩れそうになるのを、

「——っ」と

背後から抱き留められた。

「藤乃！ 大丈夫なの！？」

掛けられた声は知ったモノだ。そこには、甘奈達が心配そうに顔を歪めていた。

「大丈夫です、皆さん」

精彩の欠けた笑みを見せ、ゆっくりとした足取りで再び戦場へと向かう。

「ちよつと、甘奈！ その手って！？」

杏奈の視線につられて手のひらを見れば、紅く染まっていた。

「これって……」

「たぶん、藤乃さんの血だと」

仁美の声音が震える。演出にしては完璧だが、学園祭のアトラクションにしては度が過ぎる。

離れていく藤乃の背を見れば、脇腹の所で小さく裂けた制服の白いベストが紅く滲んでいるのがわかった。

ぬめつとした感触は、血糊とはとても思えない。

「……あれって、本当に学園祭の出し物なの？」

藤乃ほどではないが、白と赤のコントラストが目立つ巫女装束をボロボロに汚していた小柄な親友の少女がいた。

「大丈夫だよ」

三人と一緒にいた小枝が言う。

「お姉ちゃんが笑っている内は大丈夫」

小枝の見つめる先は、校庭を挟んだ対面の人垣の後ろにいる冬華だった。

」

微笑を浮かべながら戦いを見守る冬華。不意に彼女の表情が少しだけ曇った。

」
掴んだ玉響を投げ捨てる『魔』。チラッと横目でそれを見る祐介だったが、その刀身からはなんの力も感じられなかった。

「あいつ、玉響の力まで吸収したのか……」

『どうするのよ？』

心の中で浮帆が慌てふためく。冬華の見た未来では、玉響が最大の要だった。それが使い物にならない今、打つ手無しである。

「やれることだけやってみるだけだな。それしかないだろ」

駆け出す祐介。

『もう！ この戦いが終わったら、何か奢ってよ、祐さん』

浮帆が魔力の一部を制御して、玉響を呼ぶ。

『魔』の眼前に迫ったところで、それを掴む祐介。力が無くとも、ただの武器として使う分には問題ない。効くかどうかを別にすれば……

魔法の攻撃を目眩ましに放って、玉響で攻め入る。祐介と浮帆の心は完璧に同調していた。

魔法を吸収し、玉響を紙一重で避け続ける『魔』。藤乃以上に鋭い太刀筋に、幾つかの紅い線が走っていた。

でも、皮一枚だ。

後一步が足りない。

「？」

キョトンと動きを止め、手に握られた玉響を見つめる祐介。

『祐さん！？』

「もうお終いかい」

不遜な笑みを浮かべ、

「だったら——死ね」

十分力を奪い取ったのか、飽きるようにとどめを刺そうとする『魔』。その身体が、背後から羽交い締めにかかる。

「二人とも、今です！」

思考の海に沈んでいた祐介の意識が戻される。

考え込んでいる暇はない。

藤乃に動きを押さえ込められた『魔』めがけて、玉響を振るう。

「甘いんよ」

『魔』は、藤乃の脇腹の傷を握りしめ、力の抜けたところを迫ってきた祐介めがけて投げつける。

もつれ合うように倒れる二人。

「いつつう……九石、大丈夫か？」

問いかけるが返事がない。脇腹から大量に血を流しながら倒れている。

『藤乃！？』

「クツ——」

歯がみする祐介。病院に連れて行くこうにも、目の前の『魔』が素直にそれを許すかどうか……

「？」

『えっ？』

悩む彼らの目の前で、藤乃の裂けた制服の下の傷口に白い光が灯り、見る見るうちに塞いでいく。

「うぐ……」

小さいうなり声を上げ、キョトンと瞬きする藤乃。

「何だ？」

『これって、治癒魔法！？』

驚く祐介達も魔法の暖かさが包み込み、打ち身やらでボロボロだった傷を治していく。

「ん？」

様子のおかしさに気付いた『魔』が顔を顰めたその時、天空より光線が飛来してきた。

雨の如く降り注ぐ光の矢の数々。予想しない攻撃にもろに喰らう『魔』。

でも、それだけだ。

光の矢が当たると同時にそれさえも吸収してみせる。

「力業では無理みたいね」

頭上からの凜とした女性の声音。落ちる影に見上げれば、ほうきに腰掛けた楽帆がいた。

『姉さん！？』

驚く浮帆に何者かがわかる。

「瀬野なのか？」

『うん。楽帆姉さんんだけど……ほうきで飛んでくるなんて』

口元を歪め、唸る。

やって来ることは聞いていたが、まさか飛んでくるとは思ってもいない。

「九石を治したのはあいつなのか？」

『うん。でも……あんな登場の仕方して大丈夫かな？』

藤乃が助かったことに安堵したのか、急に周りの反応が気になってくる。

「凄い！」

「瀬野さんに似てるけど……あの人もアトラクションの出演者なのかな？」

「どうやって浮いてるのかしら？」

「校舎との間にピアノ線でも張ってるんじゃないの？」

浮帆の危惧に反して、楽帆さえも演出と捉えるギャラリー。独り

——冬華だけが顔を青くしている。大きすぎる眼鏡の下で、殺意の籠もった一瞥を上空の楽帆に向けている。

「無茶苦茶だな」

浮帆の気持ちを代弁するかのように祐介が言う。

「ここの連中は、こういう神経してるんだか」

冷静に考えれば、校舎よりも高い位置に浮いている楽帆の姿に、校舎間のピアノ線などあるはずもないことに気付くはずだ。

『ウチってば、お祭り好きだからね』

疲れたように苦笑する浮帆。

ほうきから飛び降り、浮帆は祐介達の隣に音も発てずに着地すると、

「先輩。答えは決まったかしら？」

唐突に訊ねてきた。

コケティッシュな微笑みは小悪魔に感じる。

「瀬野なら勝てるのか？ あいつは力を吸収するぞ」

「楽帆でいいって言ったはずだけど」

長すぎる髪の毛を払う。すいっと斜に『魔』を睨む。

「フッ」

楽帆を一瞥、『魔』は薄い笑みを浮かべた。

「あつ！ あなた、私のことバカにしてるでしょ！！」

「フッ。力の弱いヤツには興味が無いからね」

「力が弱くて悪かったわね」

カチンときた。

別段、楽帆の魔力は少ない訳ではないのだが、浮帆、祐介、藤乃と比べれば、少ない方になる。

「あなたを倒すぐらい、小指の先ほどの魔力があれば十分よ！」

ぶわつと楽帆を中心に風が舞い上がる。

渦を巻く疾風に顔を顰めるギャラリー達。その風が収束して『魔』へと向かう。

「なっ？ 吸収できない！？」

地面を転がるように吹き飛ぶ『魔』。よろつと立ち上がるその顔には、今までと違った険しさがあった。

乱れる髪。風の流れでかまいたちでもできたのか、頬に一筋の紅い線が走っていた。

「効いているのか！？」

どれだけ多彩な魔法を使おうとも、微塵も傷つかなかった『魔』の頬の傷に驚く。

自信ありげに取引を持ち込んでくるはずだ。

「私をバカにしないことね。あなたぐらいの低級な物の怪を消すぐ

らい、手段はいくつでもあるんだから」

校庭に並ぶお好み焼きの屋台からヘラが、そしてヨーヨー釣りから水風船が飛んでくる。

うざったげに横一線した爪が、ヨーヨーを裂く。割れた風船から吹き出した水が『魔』の視界を奪ったそこへ、ヘラが迫ってくる。

音を聞き分け、紙一重で避ける『魔』。掠めたヘラが白銀の髪の毛本を落とす。

続いて聞こえる空気を裂く気配に、大きく後ろに跳ぶ。今さっき『魔』がいた地面に数本の串が突き刺さった。中には、刺さったままのみたらし団子付きの串も混じっている。

『物質干渉だ……』

「なんだ？」

『姉さん、間接的に魔法で攻撃してるのよ』

タネを明かせば単純そのモノ。楽帆は物質を魔法で動かして、飛ばしているだけだった。そして、『魔』にその魔力が吸収される前に魔法を解除し、慣性で飛ばしていた。故にどうしても最後の狙いが甘くなるのだが、それでも効いていた。

ゴミ箱を頭上の死角から落とされ、前につんのめる『魔』。こぼれたゴミを払いながら、睨む楽帆から更なる攻撃が飛んできた。

「俺達もできるのか？」

『ちよつとムリっばい。魔力が大きすぎて、あそこまで正確に制御できないよ』

封印から解かれた魔力は絶大で、少しでも制御をミスればすぐにも暴走しそうなほどだ。

「間接攻撃か……」

握りしめた玉響へと視線を落とし、再び考え込む祐介。

3 - 5 : 参戦（後書き）

0 : 前夜の前書きにも書いたけど、TINAMIの方でも公開を始めました（現時点では一章分しかありませんけど）

3 - 6 : 無謀策謀

「私を馬鹿にした者は万死に価するのよ!!」

不意に落ちた影に身をよじる『魔』。次々と木の柱が降ってくる。それは、後夜祭で使うキャンプファイヤーの古材だった。

背後に跳ぼうとした際、背中に固いものが当たり遮られる。左右を見渡せば、同じように柱が突き刺さっている。

「終わりよ」

「ちっ！」

先の避けた柱が四方を邪魔し、逃げ場を失った『魔』。白銀の髪がざわめく。吸収していた力を放出し、頭上から降ってくる柱を焼き尽くした。

「ちよつと待て！ 楽帆!!」

「何、先輩？」

攻撃の手を休める。

「お前、アレを殺す気で攻撃しているだろ？」

彼女の攻撃の全ては、完全に『魔』の急所を狙つてのモノばかりだった。

「あつ」

こぼれる言葉。額に一筋の冷や汗が浮かんでいた。切れかけて、完全に『魔』の身体のベースが『七屋敷祐介』のものだったことを忘れていた。

「あちゃゝ。じゃあ、あれは余分よね」

仰ぎ見た頭上には、グラウンド整備用のローラーが浮いていた。

顔面蒼白の祐介。いくら何でも、あんなモノを食らっては命の保証がない。

「まあ、いいわ。戦う方法はまだまだあるんだから」

睨む先では、『魔』が四方を囲む柱を燃やし尽くしていた。

「よくも、吸収した力を使わせてくれたわね」

爆炎の向こうで、細めた瞳に鋭さが増す。妖力に転化した力を身体にまとい、今以上の速さで攻めてくる『魔』。奪った力をセーブしていた戦いから、全力の戦いへと転じた。

『危な——！？』

「なっ——！」

尋常ならざる速さで迫ってきた『魔』の腕をやすやすと掴み上げる楽帆。

ニヤリとほくそ笑む。

「お終いよ！」

楽帆の身から放たれた魔法が『魔』の身体で襲う。青白いスパークが校庭で弾けた。

「キヤアツ——！！！」

無理矢理腕を振り解き、跳びずさる『魔』。魔法を食らったことに驚きを隠せない。

「いくら力を吸収することができても、あなた自身が力を使っている時なら、それに魔力を同調させて攻撃するくらい容易いわよ」

キツパリと言い切る。その後ろで、

「なあ、浮帆。あれって——」

『一瞬で力を同調させるなんてボクにはムリだよ』

言葉終わらぬ前に否定が返ってくる。ハッキリ言っただけでもない。力では勝っても、技術力が全然違った。

攻撃の手段を失い逃げるかどうか考える『魔』だったが、不意に楽帆からのプレッシャーが消えた。

『魔』から目を反らし、背後の祐介に呼びかける。

「どうする？ 約束、聞いてくれるのなら、このまま代わりに倒してあげるけど？」

すっかり忘れていた。このまま楽帆に任せると、結婚の約束を持ち出されることに——

「で、できるわけないだろ！」

「あっ、そう」

パチンと指を鳴らすと、上空に待機していたほうきが楽帆の元へと飛んでくる。

「だったら、先輩一人でやってネ。助けが必要になったらいつでも言つて。すぐに駆けつけるから」

その柄に腰を下ろし屋上へと浮かび上がって行き、校舎の屋上に降り立つ。

一番の驚異であつた楽帆の退場に、『魔』の目の色が変わつた。

「九石！ 来るぞ！！」

控える藤乃に声を掛け、動く祐介。

「さあ、先輩の力、見せてもらいますか」

縁に腰掛け傍観を決め込む楽帆は、背後から聞こえる下駄の音に振り返つた。

「あつ、冬華先輩。ただいま」

「おかえりなさい、楽帆」

戦況を上から見ている楽帆の隣に立つ。

秋風が髪の毛をなびかせる。地上より風の通りがいいのか、少し寒い。

「祐介から、あなたの条件を聞いてるけどあつさりと退いたわね」

素っ気ない質問は、久しぶりの再会を偲ぶ感情は微塵もなかった。敵意丸出しの先輩に、楽帆は苦笑する。

「だって、いくら浮ちゃんが一緒にいるからって、祐介先輩ってこういう荒事初めてなんでしょ？ どう足掻いてもあの化け物を退治するコトなんてできないんだから、必ず私の助けを必要とするはず。そうすれば、どんな条件も反故するなんてできないはずだから」

「そう言うコトね」

冬華は安堵の溜息つくが、それでも安心しきれないのか念を押すように続けた。

「助けを求めなければ手は出さないのね」

「そのつもりだけど……」

「約束できる？」

微塵の感情も顔に出さずに言質を取ろうとする。冬華にしてみれば、不確定要素である楽帆に、これ以上現状をかき混ぜては欲しくはなかった。

冬華の真意を探るかの如く向けられる視線。

魔法の中には、相手の心を読むものもあるが、相手に力がある場合、役に立たない。まして、冬華の場合、思考を心から切り離すくらい容易かった。

視線を弱める楽帆。

「わかりました。黙って見守っていれば良いんでしょう？」

頷く楽帆に、冬華は発していた冷たい重圧を消す。校庭では、まだまだ戦いが続いていた。

「ありがとう。助かるわ」

屋上から立ち去ろうとする冬華だったが、思い出したように袂からお札を取り出し、校庭に面しているフェンスに一枚張り付けた。

「お札？」

「『魔』を逃がさないための結界よ」

別段隠すことでもなく、素直に教える。

「ここで全ての決着を付けたいから」

言外に含みを感じる。大きめの眼鏡で誤魔化されるが、その下の瞳には昔から時折見せる鋭さがあった。

「先輩、何企んでいるんです？」

立ち去る横顔にクスツとした微笑が見えた。

3 - 7 : くれてやる

一気に距離を狭めてくる『魔』に対し、魔法をスパークさせ目眩ましを喰らわし、回り込むように駆け出す祐介。

『どうするの?』

「試したいことがある」

短く答え、一瞬動きの鈍った『魔』めがけて玉響を振るう。

ざっくりとした確かな感触。ただ、それは『魔』の顔に一筋の傷を付けたただけだ。

『効いてるじゃない?』

「ああ」

浮帆の弾む声に対し苦々しく漏らす。

つつい魔法が使えることでそれにあった戦い方を考えてしまっていた。先の『魔』ならそれでも十分だっただろう。でも、力を吸収する相手にはそれは意味を成さない。ただ、それで全ての攻撃が効かないわけでもない。ヒトに取り憑いているからこそ、単純な物理攻撃もまた有効なのだ。

ただ……

骨の一本や二本折ることにためらいはない。それで自分の身体を取り戻せるのなら安いモノだ。だが、さすがに斬ることにはためらいがある。姿形は別人とは言っても、あれは自分のだ。首を落として『魔』を倒したとしても、それじゃ意味をなさない。

「浮帆。船穂さん達って治癒魔法使えるか?」

藤乃を治療した楽帆なら問題ないだろうが、彼女が素直に従うとは思えない。

唐突な質問に小首を傾げながら浮帆は答えた。

『お祖母ちゃんは治療系専門のヒトだから、死んでいなければ大抵のモノなら治療できると思うけど……』

「そうか」

刀を握り直す。

（腕の一本ぐらいはくれてやるか）

覚悟は——決まった。

五体満足で取り戻そうと考えること自体が虫が良すぎた。

「生きてりやもうけ！ 持ってけ、泥棒！！」

変な気合いを入れ、駆け出す。

攻撃に使っていた魔力の全てを身体能力を上げることに費やした祐介の動きは、一段と速度を増した。

疾く、速く——

行動転換の為の一瞬の立ち止まりの時だけ残像が見えるが、後は背景に溶け込むような揺らぎだけが時折残る。

それに対して、『魔』も遅れることなく付いてくる。

振るう刀を妖力をまとった腕で防ぐ『魔』。力が無くとも、切れ味自体が尋常じゃないのか、腕は薄く切れていた。

「ちっ」

トンツと後方に跳ぶ『魔』。次の瞬間には、腕の傷が治っていた。戦い方に変えてきたね」

数度交わるが、力奪えぬ祐介達を飽きたようにその腕を掴み上げ、投げ飛ばす。

「うわっ」

衝撃と共に、冷たさが襲う。

「何だ！？」

慌てて身を起こせば、ヨーヨー釣りの水槽を半壊していた。

『大丈夫？』

「ああ、何とか」

びしょ濡れの装束は重く感じるが、別段ケガは無い。ただ、戦いに没頭するあまり忘れかけていたが、身体を動かせば、まわりついた服が否応もなく自分の身体が少女だと痛感させる。

視線を落とせば、濡れた白衣が透けて、ブラジャーが見える。そこに視線を感じ、少しは気恥ずかしい。

一度意識した視線を消すことはできない。それでもなるべく考えないようにし、『魔』を探す。

「『魔』は？」

『魔』は、祐介達の代わりに攻めてきた藤乃を軽くあしらひ、戦いの場から去るように上空へと飛び立っていく。

『逃げるみたいだよ』

「ちっ」

舌打ちして歯がみする。ここで逃がしたら、二度と遭えないかも知れない。

どうする……

何か無いのかと辺りを見渡せば、先ほど落ちた際に壊した水槽からこぼれ落ちる水風船が見えた。

「風船……！？」

冬華の張った結界を力任せに壊そうとしている『魔』を見上げる。

「力を吸収するんだったな」

ポツリとした呟きに、浮帆は何を今更と聞き返すが、返ってきた言葉は違った。

『魂は回復してるか？』

『えっ？』

問われて自分の心に潜る浮帆。

『七割ぐらいかな？　せめて八割ぐらい回復しないと、身体を動かすのは無理よ』

『そうか』

短い頷き。

『えっ？　なに！？』

自分の中に流れ込んでくる靈力に浮帆が戸惑う。

『足りない分は俺の魂をくれてやるから、浮帆は最大級の魔力ごと玉響を『魔』に投げつける』

「ちよっと、と言うコトよー」

叫ぶ言葉に気付く。身体のコントロールが祐介から自分に戻って

きていることに。

久しぶりに感じられる五感には、濡れた装束が重いし寒い。

『行くぞ、浮帆！ 時間がない！！』

「もう、どうにでもなつてよ！？」

神刀玉響に持てる魔力の全てを込めて投げつける。長い刀身を回転して飛ぶ玉響だったが、その気配を悟り、あっさりとそれを受け止める『魔』。

ついだとばかりと、その力を奪い取ろうとする。そこへ――

『返して貰うぞ、俺の身体！』

「なっ！？」

許容量を超えた力と共に祐介の意識が流れ込んでくる。

眩いばかりの閃光を放ちながら『魔』から『七屋敷祐介』へと変化していく身体。弾き出されるように押し出されるは――1匹の猫又――化け猫だった。

正体を暴かれ慌てて逃げる『魔』。手元にある玉響を握りしめ、祐介が駆ける。

『七屋敷祐介』の身体に吸収された浮帆の魔力は、祐介の魂が戻ると同時に霧散していた。

ただ、握りしめた神刀玉響の力も回復し、更にそれを触媒に、補うだけの力が増幅される。『瀬野浮帆』の時と違い、藤姫の血族である『七屋敷祐介』の身体だからこそできる芸当。

「欲張りすぎた、お前の負けだ！」

一刀の下に『魔』を断つ。

断末魔上げる暇無く、光と化した『魔』はそのまま玉響を伝い、祐介の身体へと消えていった。

段ボール箱製のオブジェの一つをクッション代わりに全壊させながら着地した祐介。

「勝ったの？」

這い出してきたところを、浮帆が声を掛ける。

「まあな」

自分の腹をさすりながら、頷く。

「？」

キョトンとした浮帆に、

「藤姫と同じように、俺の体の中に封じ込めてやったんだよ」

祐介はニヤリとひねた笑顔を見せた。万事、全てが終わったとばかりに……

3 - 8 : ふりだし

「はい、はい！」

呆けるギャラリーを正気に戻すように手を叩く冬華。

「以上で、私達のゲリライベントはお終いよ。みんな散って、散って。文化祭を楽しみなさい！」

観客を散開させ、藤乃を伴って祐介の下へと向かう。そこへ、楽帆も合流してきた。その横顔は少し不満そうだ。

「残念。せっかく、センパイをモノにするチャンスだったのに……」

「ご愁傷様。誰であろうと、祐介は上げないわよ」

艶っぽく放つ冬華の言葉に、含みを感じる藤乃だった。

「どう？ 自分の身体は？」

訊ねる浮帆自身、久しぶりに感じる五感に不思議な感じをしていた。頬を撫でる秋風がくすぐったく、濡れた装束には冷たい。

「やっぱり、女子高生よりも俺はこっちの身体の方が性に合ってるな」

ジーンズのポケットからよれの煙草を引っ張り出すとくわえ、マッチで火を付ける。

大きく吸い込むと、紫煙が肺を満たした。

あまりに自然な動作に対し、ただ一人だけが反応を示した。

「何だよ、冬華？」

祐介の眼前でニヤリとほくそ笑む冬華。懷から取り出した一通の書類を眼前に突き出す。

何事かと覗き込んでくる浮帆に藤乃、それに楽帆。

「婚姻届！？」

「あっ」

小さい呟き。火の付いた煙草が祐介の口からこぼれ落ちる。

「あちっち」

手の上に落ちた煙草を慌てて地面に捨てる。

「約束は約束よ。判押してね」

あらかじめ用意していたのか、『七屋敷』の判子と一緒に手渡されるそれには、必要な部分は既に書き込まれていた。

渋々ながらも判子を手に取る。

「いいの、祐さん？」

濡れた巫女装束を魔法で乾かしながら訊く。

「約束は約束だからな」

投げやりげに漏らし、恨みを込めるように判を押す。

「お前、これを知っていたんだろ？」

完璧になった婚姻届を陽光に透かして嬉しそうに見入る冬華はクスクスと笑うだけで答えない。その黙りが全てを肯定しているのは誰の目にもわかった。

「ボクって、冬華先生に利用されたってコトなの？」

「災難だったな」

努めて軽く、それでいて多分な哀れみと同情が籠もっていた。

「許し難いわね」

何か言ってやろうかと思う浮帆を遮るように、楽帆が冬華の前に立つ。

「それってずるいわよ！ 祐介先輩を貰うのはあたしなんだから」

チラッと楽帆を見、見せつけるように婚姻届を広げ、鼻先で笑う

冬華。

鼻持ちならない冬華に、

「先輩がそういう手に出るなら、こっちにも考えがあるわ」

ムスツと頬を尖らしたかと思うと、座り込んでいる祐介の方へと

ニヤリ顔を向ける。

「祐介先輩♪」

楽帆の笑みにとてつもなく嫌な予感がする祐介だったが、『魔』

との戦いで疲弊しきっていたため思うように反応できなかった。

動けない祐介に向けて、指をパチンと鳴らす楽帆。弾けた音と共に指先から放たれた魔法の光が祐介の身体を包む。

「ちよつと、楽帆！」

慌てて駆け寄る冬華だが時既に遅し。眩いまでに輝きを高め弾ける光。その中から現れた姿は、ボロボロに汚れた祐介とは違った――
「ッ!？」

驚き身構える浮帆。隣にいる藤乃にも緊張が走る。冬華は啞然と口を半開きにし、楽帆は魔法の成功に悪戯っぽく笑っていた。

四人の視線につられるように自分の姿を見下ろす祐介。下を見れば、先ほどまでの平らな胸とは違い、その上浮帆の小振りなモノとも違うバストがそこにはあった。

「……………」

言葉無く横を向けば、校舎の窓ガラスに映り込んでいた姿は、先ほどまで戦っていた『魔』そのものである。

浮帆ほどではないが長い黒髪を梳くように撫でる頭には、ピンツと立った獣の耳がピクピクと動く。先端をつまんでみれば、神経が通っているのか鈍い痛みが走った。

唯一変わっていないのは、祐介の着ていた服のみ。

「何なんだよ、これ!？」

絶叫する声は祐介の低い声とは違い、女性の高いモノに変わっていた。

「ちよつと、楽帆! あなた、何をしたのよ!？」

「祐介先輩の体の中に封じられた物の怪の要素を強めただけよ!」
しれつと言いつ切る。

稀代の魔女である楽帆の技術を持つてすれば、『魔』の意識を封じたまま外見要素だけを取り出すぐらい容易いことだった。

「おい、楽帆。戻してくれよ!」

「いや」

キツパリと拒否する。クルリと身体を返し、冬華を見据える。

「先輩。祐介先輩、元に戻して欲しかったら、それ」

落とした視線は冬華の手に抱きかかえられている婚姻届に注がれる。

「頂戴」

「頂戴——って、上げられる訳ないでしょ！」

取られないようにと婚姻届を抱きしめる。

「だいたい、これ上げたからって、祐介を元に戻すって保証が無いじゃないの!!」

「保証が無い？」

不安げに楽帆に目を向ける祐介のネコ耳に、浮帆の囁き声が届いた。

「姉さん、ペテン師だからね。勝ちを取るためなら何でもやるのよ」
対する策士冬華もここまでの未来を読んでいなかったのか、ぐうの音も出せないでいる。

「婚姻届くれないなら、いいわよ。自分で出すから」
「自分で出す？」

訝る一同の前で、ポンツとした跳ねた音共に楽帆の手に一枚の用紙が現れた。

「冬華先輩がくれないならこっちにもサインしてね。そしたら、元に戻してあげる」

「ちよつと、駄目よ！」

「あら、いいの？ せっかくの新婚さんが二人とも女で？」
にやにやと言いつつ。

二枚の婚姻届があれば、お互いを牽制しあうこともできるかも——と、一つの考えが過ぎるが、すぐに一蹴した。

魔女楽帆なら簡単に冬華を出し抜くかも知れない。それこそ、判を押した瞬間に役所に飛んで行きかねない。

今のままなら、冬華が届けを提出するのを楽帆が邪魔してくれるはずだ。

そうなると当面の目的は——

「なあ、浮帆」

睨み合う二人を横目に、小声で浮帆に呼びかける。

「お前の魔法で何とかならないのか？ 魔力だけならお前の方が上

なんだろう？」

「やってみてもいいけど」

魔力自体は『魔』から霧散していた魔力の幾らかが再び集まっていたから問題ないが……

「どうなっても知らないよ」

「これ以上最悪なこともないだろ」

気楽に応える。どっちにしろ、猫耳が生えている状況よりも悪いことなど考えにくい。

「んじゃ、いくね」

浮帆の指先に魔力が集い出す。

それを感じ取った楽帆と冬華。

「ちよつと、浮ちゃん！ 止めなさい！！ 力任せに解けるような魔法じゃないんだから！！」

慌てる楽帆だが時既に遅し。浮帆の手から放たれた魔法が祐介の身体を絡め取っていた。

魔力の輝きに全身覆われると、祐介の身体が更なる変化を始めた。その様を遠巻きに見守りながら、最悪だと言いたげに楽帆は顔を顰めた。

変化した祐介の姿に、皆言葉を失う。

周りの反応に、自分の身に何が起こったのかと恐る恐る、姿が映り込む校舎の窓ガラスを見れば、

「っ！？」

絶句。

髪の毛は黒く戻っているしネコ耳も無いのだが——他の部分は何も変わっていない。いや、変に魔法が作用したのか、全体的に若返ってさえた。

「ゴメン、祐さん。ボクにはそれが限界みたい」

申し訳なさそうに謝る浮帆の声は、祐介の耳には届いていない。

そこにいたのは、『七屋敷祐介』とも『魔』とも違った、見た感じ周りに溢れている女子高生と同じ年頃の美少女がぺたりと座り込

んでいた。

3・8：ふりだし（後書き）

三章はこれにて終了――
残すは、エピソードのみです。

Epilogue：後の祭り

文化祭二日目――

「い、いらつしやいませ……」

引きつった笑みと共に声音を震わせているのは、ミニスカートのメイド服に恥ずかしそうにもじもじしている冬華だった。

ややもすると、全身真っ赤にして暗幕の奥へと逃げ込む彼女を、浮帆が無理矢理店内へと押し返す。

自分を利用したお返しと、里へと事の顛末を伝えに戻っていった藤乃の代わりに冬華を無理矢理ウエイトレスに仕立てていた。

「せんせー、引つ込まないでちゃんと仕事してよ」

店内にいる杏奈が呼びかける。

「浮帆さーん」

情けない声を上げる冬華に、

「駄目ですよ、先生。ちゃんとウエイトレスやってくれなくちゃ」

冷ややかに言い放つ。

「怒ってるんですから」

浮帆の澄んだ笑顔が逆に恐い。

「ねえ、祐介。あんたからも何とか言ってよ」

ジーンズに長袖のＴシャツ姿の少女に助けを求める。

目深にかぶっていた黒のキャップのひさしを跳ね上げ睨み上げる少女。着ている服は共にサイズが合っていないのかブカブカで、袖は指先が辛うじて出ているだけ。ジーンズに至ってはかなりの裾を折り曲げ、ベルトで腰を絞っていた。

「高いぞ」

長い黒髪払いながらいけだかに言い放つち、細く白い手を差し出す。その意味することがわかっていている冬華は、気まずそうにあさつての方角を見た。少しずつ後ずさる冬華に、嫌なモノを感じた祐介が慌ててその腕を掴んだ。

「まさか、お前……」

「……きちゃった」

「なっ？」

固まる祐介。足りない言葉数の向こうにある真意にあっさりと気付くのは付き合いの深さか……

「どうしたの？」

わかっていない浮帆が二人を見比べる。事情を知らない甘奈達も仕事の手を休め不思議そうに見ている。

「だから、私とこいつは結婚したの！」

その言葉に退く甘奈と杏奈。一人、仁美の目にはある種の羨望があった。

「なあ、浮帆。あの娘と先生ってどんな関係なんだ？」

小声で浮帆に訊ねる甘奈。彼女たちには、記憶は戻ったことにしである。

「冬華先生の元恋人だって」

聞いたままのことのみを言う。

「浮いた噂一つ聞かないと思ったら……」

「そっちの気が合ったんだ」

完全に冬華への見方を変える二人に対し、

「ステキ」

瞳が輝く。

ぞわつと毛を逆立てながら、仁美から少し距離をおく三人。

そんな教え子達をよそに、冬華と恋人の話は続く。

「新婚生活の始まりよ」

「ちよつと待て！ 今の俺はこんなんだぞ……！」

自分の胸を指さし叫ぶ。戸籍上問題ないかも知れないが、倫理上問題がありすぎる。

事実、二人の会話に事情を知らない生徒や客達が不思議な眼差しを向けていた。

「いいじゃないの」

眼鏡を外し瞳を細める。いつもの雰囲気には艶を纏う。

「折角なんだから、女の悦び、教えて上げるわよ」

ビクッ――

耳元で囁かれて、全身真っ赤に染めて跳ねるように後ずさる祐介。助けを求めるように浮帆を探せば、自分たちの関係を妖しく脚色しながら親友に語っていた。

「大丈夫よ、センパイ！」

一般客に混じって、楽帆が来店してきた。

「ちよっと、それって!？」

楽帆の手に握られた一枚の書類に目がいく。それは、『七屋敷祐介』と『久保冬華』の名の署名された婚姻届だった。

「まさか真夜中に役所に行くとは思っていなかったけど、回収してきたわ」

「か、返しなさい！」

「先輩をそんな身体にしちゃったからね。せめてこれくらいはしておかないと目覚めが悪いじゃない」

取り返そうと迫ってくる冬華よりも先に、婚姻届はいきなり燃え上がり灰と化す。

ガックリと頂垂れ、床に崩れ落ちた灰を見つめる。

そんな冬華を後目に、

「はい、センパイ。これで結婚はチャラよ」

笑顔を向ける楽帆を不審な目で見つめる祐介。

「で、何の裏があるんだ？」

胡散臭そうに訊ねる、その言葉には多分な刺が含まれる。

「いやね。別に裏なんて無いわよ」

そう言われても、ここまで謀略にはめられてはヒトが信じられない。

「ただ」

続ける言葉に身構えていると、楽帆が「ごめん」と謝ってきた。

「浮ちゃん、ちよっとあなたも一緒に頭を下げなさい」

楽帆に頭を押さえられ、何のことか解らないまま頭を下げる浮帆。
「一体、何があっただんだ？」

「それが、その……先輩にかけた魔法——解けなかったりするのよね、これが」

「へっ？」

思考が止まった。

呆然としている祐介に、気まずそうに楽帆が説明を続ける。

「私だけの魔法ならいつでも解けるはずだったんだけど……」

ちらつと横目で妹を見て、

「浮帆の魔法が変に作用していて魔法を解こうにも、魔法の絡まりを解析するだけでかなりの日数が掛かるのよ。その上、解析した魔法を解く魔法を考えるのに更にその数倍は掛かると思っから……短くて半年。長ければ数年。下手すれば一生そのままね」

「なっ!？」

声すら出ない祐介。代わりに浮帆が一つの考えを口にする。

「それなら変化の魔法を上乗せしたらどうなの？」

首を横に振ってみせる。

「無理よ、無理。これ以上下手に魔法を掛けると、よけい解けなくなるわ」

説明には出さなかったが、それらに関しては瑞穂や船穂たちも同じ見解だった。

「どうしろって言うんだよ……」

顔を押しさえ、低く唸る。

見た感じ女子高生の自分が、今まで通りの生活ができるとは思えない。しかも、この姿では『七屋敷祐介』の戸籍も履歴も信用されないだろう。そうなってくると、仕事に困る。

「祐介！これに判押して」

どこに持っていたのか、未記入の婚姻届を持って垂れ掛かってくる冬華。いつの間にか復活したようだ。

「それで、私が扶養家族として養ってあげるわよ」

「できるか！」

無理矢理冬華を引き離す。

「あら、判押してくれるのは約束でしょ」

「約束したのは、あの一枚だけだ」

床に残る灰を指さし、つつけんどんに言い放つ。

「何よ、それ？ それじゃ、ただの骨折り損じゃないの」

「そう言う台詞は、後ろを見てから言え」

言われて、背後からのプレッシャーに気付く冬華。

「それを言うのはボクの台詞ですよ、先生！」

ビクッ——と背筋が跳ねる。

恐る恐る振り返れば、浮帆が据わった目で睨んでいる。

「今度、魔法の実験台にでもなつて貰おうかしら」

「い、いやぁ——！」

絶叫してうずくまる冬華。

頭の中に『視』えたのだ。浮帆の実験台にされた時の未来の自分の姿が——

「ご、ごめんなさい。謝るから、何でもするから、ちょび髭だけは許して」

「だったら、早くウエイトレスに戻ってください」

浮帆がその背中を押して店内へと戻っていった。

「先輩、どんな姿を見たのかしら」

嘆息交じりに呟き、祐介の耳元に口を持っていき、

「で、祐介先輩。モノは相談なんだけど」

囁きかける。

「先輩の姿、元に戻してあげるから、これに判子押してくれる？」

冬華が忘れていった離婚届を差し出す。

「ちよつと待て。魔法じゃ無理なんだろ？」

「魔法じゃね」

悪戯っぽく笑う。

「でも、私が以前作つた魔法薬なら、三日で治るわよ」

どこからか一つの瓶を取り出した。ドロリとした透明の液体が入っている。

ゴクツと生唾を飲み込む祐介。

「さあ、どうします？」

小瓶を脇の机に置き、迫ってくる。

一週間やそこら少女のままなら小悪魔の誘いにも乗らないのだろうが、数カ月以上続くととなると、心が惹かれる。

思わず頷き掛けたそこへ、

「ふーん、魔法薬ね」

楽帆の背後から瓶を取り上げる浮帆の姿が。

コルクの封を開けて中身を小指の先に付けて舐めてみる。その顔がニヤリと笑った。

「やっぱり、思った通りじゃない」

何だとする祐介に対し、まずったと顔を顰める楽帆がいた。

「これ、ただのシロップだよ」

「……………どう言うことだ？」

そっぽを向く楽帆をよそに、浮帆が教える。

「祐さん、姉さんに騙されたのよ。だいたい、解析もできていない魔法に対して効果のある薬が昨日の今日でできること自体がおかしいのよ」

魔法薬作りの達人である祖母の船穂が作ったとしても、どんな単純な物でも数日は掛かる。まして、解呪魔法の薬になれば製法も複雑で簡単に出来るものじゃない。

「本当なのか？」

「それは……………本場仕込みの錬金術で作っているから……………それに、たまたまストックがあつて」

どんな言い訳も、目を反らしている時点で信憑性が無い。

真っ直ぐ見つめてくる祐介に、大きく息を吐き、

「浮ちゃんの言うとおり、ただのシロップよ。ちょうど、そこに合ったの使っただけ」

指さした先には、模擬店で出しているメニューの在庫が置かれていた。

「契約さえしてしまえば、後は呪で縛れたのに——残念」

「残念じゃないだろ、残念じゃ！」

怒る祐介に楽帆は「ごめん」と可愛らしく謝り、ポンツと煙をたててその姿を消した。

「まったく、俺は平穏な生活を望んでいるだけなのに……何で、こうなるんだよ」

「無理よ、祐さん。姉さんに狙われたが最後、あの手この手で迫ってくるわよ」

ガックリと肩を落とす祐介。

「まあ、そう落ち込まない。それより、文化祭でも楽しも」

祐介の細い腕を取り、引っ張る。

「どうせ、祐さんもしばらくは籐華に通うんだから、色々と案内してあげるよ」

「通うって？」

顔を上げ、聞き返す。

「さつき、冬華先生と理事長が話して決めたらしいよ」

「なっ!？」

慌てて店内の冬華の元に詰め寄る。そこには、熟年のスーツ姿の女性が一緒にいた。

その顔には見覚えがある。冬華の母親の春香であり、籐華女子高校の理事長でもあった。

「春香さん! どう言うことなんです!！」

「あら、祐ちゃん。丁度良かったわ」

冬華の母と言うだけあって、なりの違う祐介の正体をあっさりと看破してみせる。

「ウチの冬ちゃんが迷惑掛けたそうで、魔法が解けるまでウチの学校にでもいなさい」

「ちよっと、春香さん!! 別に、俺高校に通う必要なんて——」

「あら、その姿で昼中出歩いていると、補導されるわよ」

どこまで本心が解らない笑みを見せる春香。

今時、女子高生が昼日中に街角にいたところで補導されるとは思えないが、既に確定事項の如くうんうんと一人悦に入っている。

「こうなると、寮の方も用意しておかないとならないわね……お部屋空いていたかしら？ 祐ちゃんと藤乃ちゃんって血族ですってね。それなら、あの娘の同室でいいかしら」

勝手に決めつけていくそこへ、

「あつ、春香理事長！ それなら、私も雇ってくださいよ」
消えたはずの楽帆が現れた。

「ちよつと待ってよ、楽帆！ あなた、学校で何をやる気よ？」

「あら、先輩忘れているんですか？ 私もちやんと教員免許持っていることを」

藤華女子の後輩でありながら、大学でも後輩である楽帆。大学卒業後海外へ留学しているため使っていないが、教員免許だけはしっかりと持っていた。

「うっ……」

「あら、楽ちゃんまで一緒に来てくれるなんて楽しそうね。折角だから、冬ちゃんトコの副担をやって貰おうかしら」

勝手に決まっていく現状に言葉出せない祐介。そんな彼——彼女に、浮帆は何か一言でもと考えるが、適切な言葉が見つからない。

それでも、一言。

「ねえ、しばらく女子高生やるんだから、服でも買いに行く？」
フォローになってはいなかった。

祐介の女難の相はまだまだ終わってはいない。

いや、

もしかしたら、

これからが始まりなのかも知れなかった……

-
おしまい
-

Epilogue：後の祭り（後書き）

以上で終了です。

十年前の文章故に、今よりも癖が無く読みやすいような気がしないでもないけど。

最近の文章って変な癖が付いてるんだよね……いつ頃から付きだしたのか解らないけど、謎かも。

あつ、評価感想などあると嬉しいです（感想は制限無しにしておきましたので、ご自由にどうぞ）

以上、応募用にいづさをゼロから書き直している好風でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0363m/>

TWO - B I T

2010年10月8日10時28分発行